

## 第一章

ピンポーン。最近はとんと鳴らなくなったインターホンの音を聞き、何か大きな物でも注文していたかな、と九条仁は首を傾げた。

仁の自宅には宅配ボックスが設置されているので、それに入らないもの、あるいは手渡しで義務付けられている重要な書類など以外にはインターホンが押されることはない。

あるいは、週刊誌を始めとした野次馬の類いか。しかし、世間の仁に対する関心はすでに薄れている。前にその手の人間がこの群馬の山奥に建てられたこじんまりとした一軒家にまでやってきたのはいつだったろうか。半年も前になるかもしれない。

それでも仁は、少しの警戒心を抱えつつ、椅子から立ち上がり、部屋を出てリビングへ向かった。仁がいたのは二階にある二室のうちの二室の一室で、八枚ものディスプレイが並べられたデイトレード用の部屋であった。

数時間座っていたことで痛む腰を叩きつつインターフォンのディスプレイを確認すると、そこに絶っていたのは見覚えのない少女であった。

「……いや、寧、か？」

仁の幼少期、一年程度と短い期間に過ぎなかったが、祖父母が暮らす村にいた期間があった。類地寧とはそこで知り合った。寧は村には少ない同年代の少女で、年の割りにクールで大人びていた。

通話をつなげる。

「仁くん？」

「ああ、そうだが……」

「私のこと、覚えてる？」

「寧、か」

「っ！ ……正解。よかった、忘れられてたらどうしようかと思ったよ」

「待ってくれ、今開ける」

仁は洗面台で軽く髪を整えると、早足に玄関へ向かった。

扉を開けると、そこに立っていたのは、インターホン越しと比べて三倍増しに可愛い少女だった。

あれから七年経った。しかし、あの頃の面影は感じられる。しかし、丸っこかった顔は少しシュツとして、ショートだった髪は伸びてセミロングになっている。当時から整った容姿をしていたが、成長した今、テレビなどに出ている芸能人らと比べて何ら遜色のない美少女へと成長していた。

「えっと、こういうときはなんて言えばいいのか。……久しぶり？」

自分が動揺していることを仁は自覚していた。仁はとある事情で不測の事態に強く、緊張という感情からも縁遠い人間だ。しかし、仁の心臓は今、確かに普段より大きく脈打っていた。

寧をリビングまで案内し、四人用テーブルの一席に座ってもらうと、仁は台所に飲み物を取りに行った。

「爽健美茶しかないけど、それでいいか？」

「はーい。……ふふっ」

仁は立ち止まって振り返り、

「……どうした？」

「いや、別に。変わってないなあって。仁くん昔から爽健美茶好きだったでしょ」

確かに、あまり意識することはなかったが、思い返せばその通りだ。祖父母宅には最初お年寄りらしく緑茶が常備してあった。しかし、あるとき何かの気まぐれか祖父が買って来た爽健美茶にはまってしまい、それから仁のためにわざわざ重たいペットボトルを買ってきてくれるようになったのだ。それ以来仁は爽健美茶を愛飲している。滅多にないことだが、出先などで見つからないときは十六茶、次点で麦茶まで妥協出来る。

二人向き合って座ると、しばし沈黙の時が流れる。寧はちびちびとグラスに口を付けたり、髪の毛をいじったりして口を開こうとしない。

「ええと……今日はどうしたんだ？」

「どうしたって？」

「いや、急に来るからさ。驚いたというか」

そう言うと、寧はジトツとした目を仁に向けた。

困惑する仁から視線を外し、あさつての方向を向き、また黙りこんでしまう。

察せ、という雰囲気を感じると、

寧が少々気分を害していること、それくらいは仁にもわかる。

しかし、その理由がわからない。

先ほどまで機嫌が悪くなかったはずだ。それが、この一瞬でこの変わりようである。女の子というのは難しい、と、殆ど同年代の女の子とかかわることのない生活を送る仁ではあるが、そのように思った。

「ええと、怒ってる、のか？」

「……」

寧は答えない。身に覚えはないが、彼女の機嫌を損ねたことは確かなようだ。

それからまた、沈黙の時間が流れる。

五分ほど経った頃、そっぽを向いたままの寧が、しびれを切らしたように言った。

「約束、忘れたの？」

仁が他人にはわからない程度に顔をしかめる。心当たりがないはずがない。

「いつか迎えに行く、か」

寧は深く頷いて、

「あともう一つあるんだけど」

無論、覚えている。

『俺に味方したこと、絶対に後悔させない。いつかこの選択が正しかったんだと思えるような世界を俺が創ってやる』

仁は、顔から火の吹き出るような恥ずかしさを感じながら、当時の自分の言葉を述べた。自分の能力を過信しきっていたころの、謂わば黒歴史である。しかし、当時の自分がその過度な自信から口に出してしまった現実が見えていないその困難な約束を実現するための行動、それが現在の仁の人生の軸であった。

「ちゃんと覚えてるじゃん。そりゃそうだよね、仁くんだもん」

寧の言葉には、仁が単に記憶力のよい人間だ、という以上の意味が込められている。

というのも、仁は遺伝子工学、正確にはヒト生殖細胞系列遺伝子工学が使用された、

最初で最後の人類なのである。

遺伝子工学の技術が発達し、中でも特に、それまでタブーとされてきたヒト生殖細胞系列遺伝子工学が、数々の実験によりその効果が示されていくなかで、その人間への適応を擁護する思想であるリベラル優生主義は、長い潜伏期間を経てようやく日の目を浴びるようになり、連日のようにテレビやSNSなどの場で議論され始めた頃。

医者で大学教授も務める九条齋郷は、ヒト生殖細胞系列遺伝子工学の第一人者として日本で数少ないキュアの遺伝子改良の施術を行っていた。まだ議論がまとまらず規制する法律が存在しなかったため、日本では違法ではなかったが、法整備させる前のある種の法の抜け穴をついたような行動であったため批判もあった。しかしその一方で、彼を応援する声も大きく、その理由として彼の施術が出生前診断で判明した胎児の先天性の障害などを取り除くことが可能だったからだ。この施術にはリスクもあり、およそ10%ほどの確率で脳に別の障害が残ってしまうというのがその内容であり、一見すると許容できるものではないように思われるが、すでに自らの子供に障害があることが確定している親からすれば、自分がその立場でどうするかはさておき、90%の確率で健常者として生まれてこられる可能性に賭けるその行動に全く理解を示さない者は少ないだろう。

事実、齋郷の元には依頼が殺到した。

しかし一方で、齋郷には裏の顔があった。

裏と言っても特段隠していたわけではなく、むしろ著作や講演などで積極的に自らの思想を開陳し、世間に広めようとしていた。

その思想というのが、急進的なりベラル優生主義であった。

そもそもリベラル優生主義とは、個々人の持つ生命の自由の定義を拡張し、親は遺伝子テクノロジを用いて自分の子供にその遺伝的特徴を選択することが許容されるという立場のことである。

その上で彼の主張はこうだ。

——人類にはすでに自然選択が機能しておらず、人類は長い間停滞、いやむしろ退化している。そのこと自体はいい、障害児の間引きなどがなくなり、人類にとって不利な遺伝子が残るようになってしまったが、それは人類の倫理観が大幅に発達したことの証左だからである。そして、今、科学技術、特に遺伝子工学が急激に発達している。これは、神が与えたもうた第二の進化の手段なのだ。今、我々人類は新たなステージに進むべきなのである——

このような極端な主張をする齋郷であるから、穏健なりベラル優生主義者が提唱する、遺伝子工学的施術が原因である胎児並びに母体の死亡率がそれぞれ0.1%以下などの条件を馬鹿げた空論だと一蹴した。そんな時代は100年立っても訪れない、治験ですらそんなに安全なものはない、そもそもマウス実験と人間の実験に何の差がある。齋郷はこのように、人類の医療行為に対する過度な規制をその他の動物実験に対するそれと比較し、人間の高慢さをあざ笑った。日々食べるためだけに動物を狭い空間で飼育し、かと思えば一部の愛玩動物に対しては異常なまでの愛を注ぎ、ネズミを葉漬けにすることで様々な薬を開発し——。それでいて人類の犠牲は全く許さないと、なんとも正直で、そして利己的なことか。他の動物も自らの利益のみを追求しているといいわけをする人に対しては、

彼らは残念なことに我々ほど知能が高くない。敵か味方か、彼らにとってはそれだけだ。しかし人類は違う、倫理の概念を持ち合わせているのだ。そもそも動物というとき、一般にその言葉は人間以外を指すことが多い。

人間と動物を全くの別物として考えているわけだ。それなのにこういうときにだけ、動物の行動を人間の非道な行動を正当化する根拠として用いるのか。

このような斎郷の主張は広く受け入れられたとは言いがたかったが、一方で彼の講演に多数の信者が押し寄せていたのも事実だ。

そんな中の事件であった。

信者の中には、当然妊婦も存在した。

斎郷はその者達に、正確にはその胎児に対して、極めて成功率の低い施術を行った。

内容としては知能や運動神経の向上をはじめとした、技術的に少しでも可能性のあるものを全て詰め込んだものであった。単体ではそこその成功率でも、複数となれば成功率は当然下がる。斎郷は成功率を1%と見込んでいた。そして、200人の妊婦を、言い換えれば被験者を集めたのである。この全ては日本、そして海外からも集まった斎郷の思想に賛同せし者達であり、殆どの確率で我が子が死ぬ施術を、その多くが笑顔で受けたという。

多くの胎児は死産となり、数少ない生き残りも重篤な障害を持って生まれるなどとして、三歳までには死に絶えた。たった一人を除いて。

その、唯一の生き残りは、ただ生き残ったというだけではなく、斎郷が与えようとした性質を全て持ち合わせて生まれた。謂わば成功作である。

斎郷は無論この一連の行為を自身が経営する大病院を用いて内密に行った。この病院というのが斎郷の信者のみで職員を固めており、それが故に200人全ての施術が終わるまで世間に発覚することはなかった。

しかし、ここまでの行為、最後まで隠し通せるほど日本という国は腐りきってはいない。行為が露呈した斎郷は即逮捕され、死刑判決が出て一年もしないうちに刑が執行された。

これは異例の早さである。当然そうなった原因の一つには、被害者が多すぎることにもあったが、斎郷が一切自らの行いに対して否定などせず、むしろ赤裸々に全てを語ったという事情もあった。世間の強い処罰感情も影響しただろう。病院は解体され、今は廃病院となっている。

この事件は斎郷事件と呼ばれ、日本国内のみならず海外のリベラル優生主義に対する強い反対論を呼び起こした。

アメリカのとある大学などは斎郷を招きヒト生殖細胞系列遺伝子工学の共同研究をしていたが、そのアメリカを含めた遺伝子工学技術に前向きだった国々も、一斉に法規制に舵を切った。仁がヒト生殖細胞系列遺伝子工学が使用された、最初で最後の人類というのはそういうことだ。無論、今後風向きが変わって、人間に当たり前のように遺伝子工学的施術が行われるような時代がいつか訪れるかもしれない。だが、仁にはそれが、少なくとも遠い未来の話に思えた。

なぜならば、本人には何の責任もないはずの仁に対してすら多くの誹謗中傷が、それも彼の存在そのものを否定するような内容のそれが向けられるような現実を、他ならぬ仁自身が目の当たりにしてきたからである。

「当然だ。不可能を可能にするために、日々精進している」  
寧は少し驚いたような表情を見せ、

「へえ、そうなんだ。具体的には？」

「まず、前提として。俺がこの現状を打破し世間に受け入れられるようになるためには、俺の存在が世界にとつて有益であることを示すしかないと思っっている」

「ふんふん。それで？」

「まあ早い話が、世界に大きな革命を起こすような技術を開発したりして、人類の進歩に貢献する。そのために日々論文を読んだり、大学の研究室と組んで研究に参加したり……まあ、今のところそんな感じだ」

仁の話を聞き終えると、寧は渋い顔をして、

「なるほど、話はわかったよ。——で、その、仁くんを世界が認めざるをえないような技術の開発に成功するのって、いつ頃を予定してるのかな」

顎に手を当てるポーズをとり、仁はしばし考える。

「……まあ、なんとか二十代くらいまでには？」

仁はIQが150あり、間違いなく天才といえる次元にある。特に記憶力に優れ、1度見たもの、理解したことは絶対に忘れないし、理系的な能力も優れている。しかし、だからといってそう簡単に世界に多大な貢献が見込めるような技術を開発出来るはずもない。仁自信少しなめていた節があったが、研究の世界はそんなに甘い物ではないと今では心の底から理解していた。ペーパーテストには圧倒的な自信がある仁だが、新しいものを生み出すということは既存の知識を記憶・理解することは全く別の作業であり、小さな開発ならまだしも、世界を変えるような大きな開発など、数年で達成出来るはずもないのである。

そもそも仁は極力部屋から出ないようにしている。様々な目的で仁を狙う輩が存在するからだ。単純に仁に危害を加えたいという手合いもいるし、彼を何かに利用しようとする者達もいる。

【人類進化会議】がその代表例だ。斎郷の思想を引き継ぎ、人類の自己進化を達成しようとしている。

彼らは表だって活動することはせず、地下に潜伏している。彼らの目的は仁を誘拐し、彼の遺伝子、有り体に言えば精子を入手し人工的に受精させる、これを広く行っていくことで人類の遺伝情報を強化していくことである。そもそも彼らに言わせれば、斎郷は最初からそうしようとしていたというのである。全て、自、白、した様に見えた斎郷も、この真の目的だけは隠していたのだと。なぜなら、1%の低い成功率の施術を200人に行つて一人二人の新、人、類が誕生したとしても、それでもつて人類は進化したと本当の意味でいえるだろうか？ありえない。博士の本当の目的は、そうして誕生した新人類の精子を希望する人々に分け与えることであつた。だから、成功率度外視であらゆる要素を強化するという無茶苦茶な行動に出たのだ。完成した完璧な遺伝子の頒布による人類の進化、彼らに言わせると、これが斎郷の真の目的ということになる。

仁は彼ら人類進化会議の連中に何度か誘拐されそうになつたことがある。仁はその度に圧倒的な運動神経でもって逃げおおせたわけだが、ともかくそうした経緯もあつて、

現在の仁は殆ど自宅に引きこもり、来訪者も警戒してかかる生活を強いられている。まあ、それでもあの頃よりは断然マシなのだが。

そういうわけで、直接研究室に赴くことが出来ない仁は、実験に機材を用いるのが当たり前。技術系研究の世界で大きなハンデを背負っているわけである。

とまあ、そんな事情を寧が汲んでくれるはずもなく。

「遅い！ 遅すぎる！」

そう言つて寧は両腕でバツテンを作った。

「大体さ、前提がおかしいんだよ。確かに約束は二つあるけど、迎えに来るほうの約束は後者の達成前でも出来るでしょ。私、ずっと待ってたんだから」

それでも一向に来ないものだから、しびれをきらして自分から来てしまったと、どうもそういうことらしい。

そこで初めて、仁は寧がなぜ怒っていたのかを理解した。

寧視点では、こういうことなのだろう——いつかいつかと仁が来るのをまつていて、いつまでも来ないのでとうとう自分から行くことにした。当然仁は申し訳なさそうにするものだと思いきや、まるで悪びれる様子もなく、約束のことなど忘れてしまったかのようだ。許せない——。

しかし、これに関しては仁にも言い分があった。

「待つてくれ。寧は二つの約束には関係がないというが、俺に言わせれば二つ目の約束の達成は一つ目の約束のための必須条件だ。……そもそも、さつきは空気が悪くなると思つて言わなかったが、うちに来ること自体リスクのある行為なんだぞ」

「別に、誰にも会わなかったけどね。あれでしょ、マスコミとか野次馬とかが家を包囲して大変みたいなの。私も前記事でみたよ。でもさ、世間の興味なんてすぐに移りゆくものだから」

「まあ確かに最近はずっとこなくなったが、0つてわけじゃないんだからな。……まあ1度うちに来たくらいでどうということは今ではもうないだろうけど、だからといっておおっぴらに公衆の面前で人とかかわることは、まだ出来ない」

俺とかかわるやつは、みんな不幸になる——。

脳裏に浮かんだ言葉は、口には出さなかった。あまりにも女々しいからだ。

仁は口の乾きを感じて、グラスをつかんだ。

「俺はいいが、寧までネットやマスコミのおもちやには絶対にしたくないからな」

寧は言い終えるや否やグラスを口元に運び口を濡らす仁をじーっと見つめた後、言つた、

「仁くん、変わったね。なんか、慎重になった。あと、昔の仁くんは自信満々って感じだったけど、今は……自信を失っちゃったように見える」

「大人になったと言つてほしいな」

即座にそう返したものの、確かに自覚はあった。クリティカルヒットである。

村にいた頃、寧は自分のことを、人間として好いていてくれた、と仁は思っている。これは、自信過剰でもなんでもない。思考が大人になった今客観的に考えても、結論は変わらない。

しかしながら、今の自分を見て寧はどう思うのだろうか、と仁は思う。

わざわざこんな山奥までやってきたのだから、自分に対する感情は変わらなかったのだらう、と思う。——実際に会うまでは。

「——失望したか？」

「へ？」

寧の顔が、まるで素っ頓狂なことを言い出した者を見るかのような顔になる。

「今の俺は、こんなもんだ。寧といった頃の自信満々で不可能なんてないと思ってた、あの頃の俺はいない。自分の実力を自覚して、それでも必死に藻掻いている」

客観的に見て、仁のスペックは極めて高い。しかし、そのスペックが故に仁は、世間のつまはじき者にされているのである、

「……五年前くらいだっけ。あれまでは、結構テレビに出たりして、人気者だったもんね。まあ、あのころからアンチみたいのはいたけどさ」

「クイズ番組で東大生に勝ったりして、テレビに引つ張りだこになって、それまで批判的な言葉ばかり浴びてきたのが、一躍人気者みたくなってるな。ほれみたことか、世界を変えるなんて俺の力があれば簡単なんだよなんて、天狗になってた時期だ」

仁がテレビに出るようになった経緯を知るには、それ以前に遡る必要がある。

そもそも仁が寧のいた村に住むようになったきっかけは、母親・佐恵の自殺だった。仁が六歳の頃の話である。そのころは齋郷に対する世間の悪感情がまだ収まりきらず、親族である仁の母親も誹謗中傷や自宅へのいたずらなどの被害に苦しんでいた。佐恵は齋郷の研究内容には疎く、齋郷には特に何も知らされることなく勝手に成功率の低い施術を行われた謂わば被害者なのであるが、そんなことは世間からしてみると知ったことではないようであった。

佐恵亡き後、祖父母、つまりは齋郷の両親に引き取られる形で埼玉の村に引越した。

当然村にもマスコミは押し寄せた。元より齋郷の生みの親である二人の元にはマスコミが張り付いていたが、仁を引き取ったことで取材は加速した。佐恵を自死に至らしめたことなどまるで悪いとは思っていないようであった。

仁とその祖父母がそれでも村にいられたのは、村長であり寧の父親でもある類地晋作が正義感溢れる男であり、かれが「悪いのは齋郷ただ一人であって、仁や祖父母には責任がない」と主張してくれたからだ。村の者たちの多くは邪魔なマスコミを呼び寄せる大犯罪者の親族達を擁護する晋作の主張に納得がいかない様子ではあったが、表だって晋作に異を唱える者はいなかった。

そして、約一年、村での穏やかな日々が流れた。

晋作の娘である寧以外は仁を避けたが、そんなことはどうでもよかった。日々晋作の蔵書を読みふけり、たまに寧と遊び。それ以上に望むものなどなにもなかった。

マスコミも晋作がシャットアウトしてくれて、村から出なければ出くわすこともなかった。仁は安全の面から小学校にはいかなかったもので、村から出る用事など何もなかったのである。それでも何かの拍子にマスコミと出くわした際には、六歳とは思えない語彙力と論理的思考力で記者を論破したりもしていた。

しかし、そんな生活も終わりが訪れる。

村民が談合し、村長である晋作の不信任決議を出したのである。

新たに選ばれた村長は、仁や政夫、そして前村長・晋作に一番敵対心をむき出しにしていた者だった。

つまりるところ、それが村民らの意思表示であった。

晋作は身の安全を危惧し、寧ととも夜逃げ同然で村を出た。

その際にした約束が、件の迎えに行く発言である。

政夫と仁も、準備で数日遅れたものの、村を出ることとなった。

東京に引越し、村時代以上にマスコミや野次馬の問題に悩まされたものの、仁は村でしたように出会った記者を論破し、野次馬を退けた。

そんな仁の活躍が報じられると、今度はテレビに出てみないかという依頼が飛び込んできて——といった具合である。

しかし、10歳になった頃、とある事件が起きた。

それまで仁は、クイズ番組や討論番組をはじめとした頭脳系の番組に出演していた。見た目は完全に子供である仁が東大生に知識で勝つたり、芸能人や時には知識人を論破する様が珍しく、人気を博した。無論中には、作り物の脳みそなどとケチをつける人間もいたわけだが、それでもあの頃の仁は、間違いなく人気者であった。

それが、あるとき、陸上で選手と勝負するという企画に呼ばれたのである。

仁は小学校にも行っていなかったため、彼の運動する姿を見た者は殆どいなかった。

遺伝的に優れていることは明らかだが、実際どんなものであるのか。

仁自身も、よくわかっていなかった。

そして、安請負してしまった。

この決断を、仁は今の今まで悔いている。

対戦相手は中学生で、100Mの全国大会出場者であった。

その選手は100Mを11秒で走り、番組出演者を沸かせた。

そして、仁は。

100M、9秒32。

ウサインボルトの世界記録を超えたタイムを、非公式とはいえ出してしまったのだ。

仁はタイムを見て、先ほどの中学生の11秒に対する反応から見て、とてつもない大歓声が飛んでくるはずだ、と予測した。

しかし、カメラのほうに戻ると、出演者達は黙りこくっていた。カメラマンも、プロデューサーも、とにかくその場にいた全員が、である。

思い返せば、走っている最中も、最初こそ歓声が聞こえたものの、途中から声が聞こえなくなつたような気がした。

そこで仁は、やりすぎたのだと思った。確かにこれでは中学生がかわいそうである。東大生が負かされるのはスカッとするが、うら若き少年が遺伝子改造された年下の少年に負かされるのはそうではないのであろうと、この頃の仁は大衆の反応を推測出来るようになっていた。

しかし、その推測は誤りであった。

問題は、中学生を負かしてしまったことではなく、そのレコードのほうであった。

仁はまだ知らなかった。

スポーツが、記録をとっても、それはそれは大事にするということに。



また、記録が公正なものであることも、同じくらい大切である。故に、ドーピングはこれほどまでに忌み嫌われているのである。

仁がただの小学生であつたら、世界が仁に熱狂したことだろう。

だが、仁は新世代、彼に批判的な者達に言わせれば人造人間、あるいは改造人間である。仁の出したタイムは、はたして正当なものだといえるのか？

多くの者はNOというだろう。

もし仁が、小学生としてはとても速い、くらいのタイムを出していたら、仁の想定していた歓声を浴びることに成功していただろう。テレビの制作サイドも、それを想定していたはずだ。

しかし実際に彼が記録したのは、世界レコードであつた。

出演者の一人が、愕然とした表情で「スポーツが壊される……」とつぶやいたあの光景が、仁の脳裏にフラッシュバックしたことは1度や2度ではない。

よくわからないが、なにかとてつもないことをしてしまつたらしいことだけが、当時の仁の理解していたことだつた。

スタッフから、今回の企画は没になるかも、と撤収中に聞かされた。

確定形で言わないのは優しさなのだろう、と仁は思った。

現場の雰囲気から、この撮影がオンエア出来ないものであることは容易に想像できたからだ。そのスタッフは、仁の出演する番組でよく見かけるスタッフだつた。

しかし、どういう経緯かはわからないが、その番組は放送された。

そしてそれ以来、世間の仁に対する反応は180度変わった。

それまでは批判的であつたり気味悪がるような意見もあつても、テレビ出演からはある程度好意的に受け止められてきた仁であつたが、一転して化け物、怪物、人造人間、スポーツを破壊する者、人類の汚点——とにかくこれでもかと否定的な言葉を投げかけられた。

当然テレビからのオフアームも途絶え、マスコミは消えたが週刊誌などの低俗な連中だけは残つた。なりを潜めていた一般市民からの東京の自宅への攻撃も復活した。それどころかこれまでにないほど苛烈なものとなり、単に汚物などを敷地内に投げ込まれたりするだけでなく、頼んでいないデリバリーが着払いで届く、動物の死骸が宅配で届く、ドローンによる空中からの嫌がらせ、24時間自宅を映した映像が動画投稿サイトで生配信されるなど、嫌がらせは止まることを知らなかつた。

そして一昨年、祖父の政夫が自害した。

仁には身寄りがなくなつたが、遺産に加えテレビ出演で蓄えたお金を持ち前の知能を用いた相場で増やしていたため、それを期に東京を離れ、埼玉の山中にこじんまりとしてはいるもののセキュリティを重視した一戸建てを建て引越した。

「まあ、とにかくだ。確かに最近はおとなしくしてるのもあつて世間の関心が離れているのは事実だが、いつまた再燃するかもわからない時限爆弾だ——自分でいうのもなんだけどな。失望するかもしれないが、まだ俺は寧のそばで日常を送れる状況にない。これはひとえに俺の実力不足だ、すまない」

仁は寧に頭を下げた。

「やめてよ。頭上げて」

仁が頭を上げると、

「確かに私の記憶にあった仁くんとは少し変わったみたいだけども、人って変わるものだよ。それに、私の安全を考えて迎えにこれなかったっていうなら、文句なんかいえないし」

寧はにやりと笑い続けた。

「……ていうかさ、正直来る前から予想はついてたんだよね。仁くんが約束忘れるはずないし。仁くんの今の状況も、調べればすぐに出てくる。ここだって、ネットで検索したら出てきたんだよ。家の外観みたら大分警戒してるんだなってわかったし。そんな状況でのこの私に会いに来るわけないよね。でもさ、私としてもそろそろ待てなくなってきたし？ それに——」

「それに？」

「一つだけ、私と仁くんが安全に学園生活を送れる場所がある。知らないとは言わせないよ？」

## 第二章

四月七日、月曜日。

東京都に属するとある島に、ずらずらと制服を着た学生達が降り立っていく。

その中には、仁の姿もあった。

集団は先導する学校職員の後をぞろぞろとついていく。その数五〇名。前日にも同数の学生が島入りしている——東都中央学院高等科の新入生である。

寧をはじめとした中等科からの内部進学者は、三月末で春休みを終え島に戻っている。

島は殆ど完璧な円形を成していて、直径は約三kmであり、船着き場から木々に囲まれた道を少々歩くと高さ三メートルに達する外壁が現れる。

校門の両脇には門番が立っていて、右側の門番の背後には、【東都中央学院高等科入学式】と記された立て看板が立っている。

東都中央学院——通称東都学院は東京中央コンサルティングというコンサル会社が立ち上げた株式会社立の中高一貫校である。定員は中等科が一〇〇名、高等科が二〇〇名となっており、中高一貫校としては高校から多くの学生を受け入れている。また、高等科の偏差値は七五となっていて、都内屈指の進学校でもある。

その要因の一つとして、東都中央学院では全寮制にもかかわらず学費が一切かからない。それどころか、生活費の名目で毎月お小遣いまで支給されるといふ太っ腹ぶりである。

壁内中央部にはショッピングモールや大運動場があり、中高生共用の場となっている。そこから西が高等科、東が中等科の敷地だ。

西に向かいまず見えてくるのは、種々のスポーツ場である。中等科、高等科それぞれの敷地にはテニスコートや野球場、陸上用コートなど各部活にそれぞれ専用のフィールドが設けられている。しかし運動部の成績は振るわないようだ。

それを抜けると、高等科校舎が現れる。定員二〇〇名とは思えない大きな校舎は四階建てで、右の体育館、左の水泳場とは渡り廊下で繋がっている。さらにその先にはA、B、C、D棟がある。A、B、Cが学生用、Dが教職員用である。

集団は鍵を渡され宿舍Aに入ってしまった。全寮制とあって学生達の持ち込む荷物は多い。大きなバックパックを背負う者、両手でそれぞれスーツケースを引きずる者。中には軽装備の者もいるが、極少数である。入学後は支給される生活費でやりくりしなければならぬ以上、持ち込みが許可される範囲で持ち込みたくなるのは当然のことだ。しかし、これだけの荷物を持ったまま入学式に参加することは難しい。

各棟七階建てで、各フロア一〇部屋構成。おおよそ下層階が男子生徒、上層階が女子生徒と分けられてはいるものの、男女比は学年により異なるため、男女が同フロアになることもままある。

仁が振り分けられたのは、A棟二階一〇号室であった。

「……いい部屋だな」

仁の自室に対する感想はそれであった。

「これで学費タダはすごいな。人気が高いのも頷ける」

部屋は風呂トイレ別、キッチンにベッド、デスクまで完備で、チェアも仁が聞いたことのあるメーカーの人間工学的に体によいと言われているもの。デスクは昇降式で、眠いときは立って勉強することも出来る。ネットで軽く調べた際に、設備の充実ぶりについての記述は見かけたが、どうもこの学校は情報統制を行っているようで、元学生による生の声というのは殆ど見つからず、情報は公式サイトのものに頼るほかなかった。学生でなく元学生というのは、そもそもこの学園では通信機器の持ち込みが許可されておらず、学園側から配布されるスマホとデスクトップPCを使うことになるのだが、これらはインターネットに接続出来ない。学内のローカルネットに接続して使うことのみを想定しているものなのだ。

要するに島にいる時はネットが使えない。とはいえ夏休みや春休みなどの長期休暇で島から出た際にはネットが使えるわけだが、それでも在校生のSNSなどを見つけることは出来なかった。この大SNS時代にこれは大変なことであり、自主的というよりは学園側に何らかの制限をかけられていると考えるのが自然だろう。

理由は大体想像がついている。この東都中央学院という学校は、每学期成績下位一〇%の学生が退学処分となるシステムを導入しているのだが、当然退学が決まった学生の中には不満をぶちまけたくなる学生も出てくるだろう。無論学園サイドもこのシステムについて説明会や試験当日にまでしつかりと説明しているが、そういう問題ではないのだ。そういう学生によるネガキャンをなくしたいというのが目的と推測出来る。

ただ、卒業後の学生による投稿も殆ど見つからなかった点については仁もよくわかっていない。卒業後も学生を縛る何かがあるのであるだろう。

仁は荷物を壁際に置くと、PCを軽く確認した。COREI9と記されたシールが貼られたPC本体、ディスプレイはベゼルがかなり狭い非光沢液晶だ。これだけではCPUの世代やGPUの搭載の有無、ディスプレイの液晶の種類などわからないことが多数あるが、部屋の充実ぶりから考えておそらく十分なスペックのマシンであろうと推測された。思わず笑みがこぼれる。

無論仁が自宅に備えるマシン達に比べれば数段劣るのは確実だが、学校から支給されるマシンと考えればこれ以上は望むべくもないだろう。

窓から望む景色は、外壁とその先の大海原。ここは殆ど島の西端にあたるらしい。これで大方部屋のチェックは済んだ。

「さて。さっさと入学式に向かうとするか」

「仁君！」

仁が入学式会場である体育館に近づくと、寧が手を振って駆け寄ってきた。

「部屋はどうだった？」

「ああ、これ以上ないくらいには充実してたな」

「でしょ。これで学費タダってすごいよね」

「そうだな。その分成績に関しては厳しいみたいだけど」

「確かにね。でもまあ仁君には全く関係ないことだし。私は気をつけなくていいよ」

「いや、まあ……そうだな」

肯定することに一瞬抵抗を感じたが、事実を否定するのも嫌みだと考えた仁は苦笑いしつつ答えた。

「ところでしつこいようだけど、もう一度確認させてくれ。本当に俺といて大丈夫か？」

仁は周囲を見渡しつつそう尋ねた。仁の視線の先では、目が合った学生達が目を逸らしていく光景が広がっている。実のところ、二人は三六〇度四方八方からじろじろと見られていた。これは受験の時も、今日ここにたどり着くまでの船の中や島の中でもずっとそうであったが、自分とはかくとして寧が同じ目に遭うのは申し訳ない気持ち強い。

「しつこいってわかってるなら聞かないですよ。あれだけ大丈夫だから、気にしないからって言って納得してくれただしょ」

寧はジトツとした目を向けて抗議の意を示してくる。

「……そうだな。でも、実際に続けてみてきついなってなったら、全然離れていいんだからな」

仁からしたら特に問題はない。その時点で退学してもいいし、話せなくとも寧と同じ学び舎で学ぶことに意味を見いだしたのなら残ればいい。

「だーから、心配しすぎなんだって。ほらいくよ」

寧は話を打ち切り、仁の手を自分の手に絡めた。

「お、おい。どういうつもり——」

「私と仁くんの関係が気になってる人多いと思うから、わかりやすくしたげようかなと思ってる」

「いや、わかりやすくっていうか、誤解を招きかねないと思うんだが？」

「いいのいいの。こういうのはインパクトが大事なんだから」

「は、はあ？」

「だーかーらー。私が明確に仁君の味方で友達ですよって示すために、わかりやすくしてあげてるんだって」

「う、うーん」

友達って腕組むものなのか、と仁は考え、かぶりを振った。仁は学校に通ったことがなく、この年代の友達というものがわからない。創作物における単なる友人関係になる男女達は腕は組んでいなかったように思うが、創作と現実は違うということなのか。

仁はそこまで考え、思考を中断した。考えてもわからないものはわからない。なにしろ材料が足りないのだ。まあ、それも学園生活を送る上で集まってくことだろう。そもそも常識がどうあれ、寧がしたいようにすればいいという考えもあった。そもそもこの学園に入学した理由は、寧の仁と学生生活を送りたいという願いを叶えるためなのだから。

腕を組んで以降、感じる視線はより強くなった。先ほどまでより嫉妬や悪意のそれが増えたような気がしたが、気のせいかもしれない。

校門にもあった、【東都中央学院高等科入学式】と記された立て看板を横目に進むと体育館が現れる。体育館に入るには校舎から渡り廊下経由で向かう順路以外に、外から直接进入のルートもある。体育館の両サイドには、現在は開け放たれている両開きの大きな扉があるのだ。ただしこの場合上履きを入れておく袋が必要だ。素手に直接下履きを持ってきた生徒などは、校舎を経由する必要がある。

仁と寧は下履きから上履きに履き替え、持ってきた袋に下履きを入れると体育館に足を踏み入れた。

席は自由なようで、二人は適当に近くの席に腰を下ろした。

各席に置かれていた書類によれば、入学式は一〇時スタート。腕時計で確認すると、現在は九時四〇分だから、まだしばらく時間がある。

しばしくだらない話に花を咲かせていると、

「よお、類地。……と、そっちは？」

声の方に顔を向けると、うっすらと焼けた小麦色の肌が特徴的な、スポーツマンチックな男が立っていた。身長は一八五センチはありそうな長身で、顔はかなり整っている。体にはかなり筋肉があつて、外見はかなりのものだ。

——とところで、仁は普段このように人間を細かく観察することはしない。では、なぜ今回は例外だったのか。その答えは、男の仁に対する視線にあつた。

明らかに敵対心を感じるその視線は、男の眼力も相まってかなりの迫力があつた。

「あ、神宮司くん。紹介するね、こちら九条仁君。私の幼なじみで、高等科からここに入学してきたんだ。まあ私が誘ったんだけどね」

「九条……ああ、あの」

神宮司と呼ばれた男は、顎に手をやり考える仕草をした。反応からして仁のことを認知しているようだ。

「確かに噂になつてたな。あの九条仁がうちの入試に現れたらしいって。まさかと思つたが、本当だったとは」

「そうだよ。驚いた？」

「……まあな。それで？ 幼なじみだつて？」

「そうそう。まあ話せば長くなるんだけど——」

と、寧が昔話を語り出そうとした時。

「まもなく東都中央学院高等科入学式を始めます。席にお着きでない方はお急ぎくださ

い」

「あつ、もう始まるみたいだね。また今度仁君のことはちゃんと紹介するよ」  
「いや、結構だ」

男はそう言って自席に向かっていった。

「大分嫌われてる感じだな」

「うーん。神宮司君って無愛想だけど、ああいう態度取るタイプじゃないんだけどな」  
「ほう」

「……あ、紹介してなかったね。今更だけど、彼は神宮司龍牙君。中等科の三年間で一度も首席の座を明け渡さなかったどころか、三年の時に東大模試で理科三類B判定の大天才だよ」

「ははあ。まあこの学校スポーツ推薦とかないみたいだからみんなそれなりではあるんだろうけど、それにしてもあのならで主席か。人は見かけによらないもんだな」

「スポーツもかなり得意だよ。生徒会所属だから部活には入ってないけど、それでもテニス部の私が一度も勝ったことないからね」

なるほど、かなりの万能型ということらしい。

「とうるか、寧ってテニス部だったのか」

「中等科時代はね。高等科では仁君と何かしたいから、テニス部には入らないよ」と、そんな話をしていると。

「開式の辞。これより、第九代東都中央学院高等科の入学式を執り行います」

入学式はつつがなく進行していった。新入生代表挨拶では龍牙が登壇。仁は客観的事実として自分が外部入学組では主席であろうと考えていたが、新入生代表は中等科の主席が優先されるのだろうか。そのあたりの事情を仁は知らないが、とにかく自分が選ばれなかったことに感謝していた。仁のこの学校での大きな目標の一つに目立たないというのがある。ただでさえ認知度が高く敵の多い仁だ、無駄に目立つような真似をすべきでないのは明白である。出る杭は打たれるということとをこの年にして仁はいやというほど知っていた。そして最後に、学長挨拶。

犬飼悟。東都中央学院学長にして東京中央コンサルティング幹部の一人。

この人物の存在が、仁がこの場にいられる理由の全てだ。

——あの日、寧が突然仁の隠れ家に訪れた日。

寧が仁に見せつけたのは、スマホの画面——正確にはそこに映された動画投稿サイトのとある動画——であった。

その動画は、仁も見たことがあった。

学校の公式チャンネルに投稿されたその動画でその男——犬飼悟は、当時猛烈にバッシングを受けていた、年齢で言えば小学校高学年にあたる頃の仁を擁護する声明を発表していた。それどころか、彼の学園への入学を勧めましたのだ。

悟の当該動画における発言はこうだ。

「当校は経営母体である東京中央コンサルティングが所有する島に位置しており、君が現在受けている様々な嫌がらせの数々は届きづらい——わざわざ船に乗ってやってきて、

不法入島してまで嫌がらせをしようとする輩は少ないでしょう。当校ではインターネットも原則禁止しているため、現在急速に発達しつつあるSNSをはじめとしたソーシャルメディアにおける誹謗中傷などを目にしてしまう機会もなくなります。君の健全な成長に当校は寄与出来ると私は考えています。また、私たちは君に与えるばかりではありません。君が当校に入学することで、他の学生にも多くのメリットがあると私は考えます。世界一の才能を目の当たりにして、なにくそと奮起する学生がいることでしょう。自信を喪失してしまう学生もまた、いると思います。しかし、自信などというものは早めに1度折れてしまうほうがいいのです。何か勘違いをして、自分は優れた人間であると思いついて入校した学校には多くいます。確かに厳しい受験競争を乗り越えてきたのですから、そう考えたくないのも致し方ないことではありますが、しかし上には上がいます。挫折をしない人生などあり得ません。そこで、九条君。君なのです。――」

とまあ、長々と仁を口説く言葉が続けたこの動画だが、時勢もあって大炎上。一時的に学園の偏差値が急落する事態にまで陥った。それでも学園は動画を削除せず、また撤回もしなかった。それどころか、悟はその後も同様の発言を様々な媒体で繰り返した。

仁に対し悟から直接連絡がきたこともあった。しかし、仁はそれを断っていた。当時の仁はそれまでの自信を失い始めたところで、自分とかかわった人はみんな不幸になるのだとネガティブになっていた。それまでの経緯を考えれば無理もないことだが、ともかく当時の仁にとって学校に通うなどということは想像もつかなかったのだ。

そんな東都中央学院の名前を出されたときは、確かにそこであれば学生生活もなんとなくなるかもしれないと思った。しかし、どこかのコミュニティに飛び込んでいくことに対する抵抗感がまだ大きかった。

自分とかかわる人間は不幸になる、

当時はネガティブになった結果としてそう考えていたが、現在の仁はフラットな感情で客観的事実としてその考えを保持し続けていた。

さらに別の大きな問題として、そもそも寧は合格できるのかということがあった。

仁も件の学園が高難易度で知られていることを認識していたのだ。そして、仁は寧に対して特別賢いというイメージを持っていなかった。

しかし、寧はどや顔でチツチと指を振り、「それがね、受験の必要はないんだよ。私、内部進学組だし」と言い放ったのだ。

無論、そんな馬鹿な、と仁は思った。そもそも寧は仁との別れの後アメリカに移住したと聞いていた。てっきり仁は、高校入学のタイミングで帰ってくるようになったものだと思っていたのだ。

仁は寧の自分に対する思いを過小評価していたのだ。

寧はアメリカに移ると、猛烈に勉強を始めたらしい。その理由は、件の動画を見たからだった。仁が東都学院に入ってくる可能性に賭け、寧は猛勉強を続けた。そして中学入学のタイミングで父である晋作を説得し、入試を受けた。東都学院に受からなければアメリカの中学に通うという約束だったようだ。

そして、帰国子女入試に合格し、晴れて日本に舞い戻ったのが三年前。

残念ながら新入生に仁はおらず、東都学院は外出が極めて制限されたネットも遮断されているためむしろアメリカにいる頃より仁に関する情報を集めるのが難しくなったもの

の、当初は成績がギリギリであったためそれどころではなかったようだ。いくらアメリカで勉強したとはいえ独学であったし、基礎学力もあまりなかった寧は帰国子女入試の応募者が少なかつたおかげで奇跡的に合格したため当時は学力が他の生徒に比べて劣っていたようだ。放校になってしまえばアメリカに逆戻り、それだけはダメということで勉強を続けた結果現在では上から二番目のクラスにいるらしい。

寧にそれほどの根性があるとは仁も知らない事実であった。

また、その根性発揮の理由が仁と再会することにあるということも、認めざるを得ない事実であった。

それが、仁が受験を決めた理由だった。

繰り返しになるが、今でも仁は、自分とかわかると人は不幸になると考えている。

それでも、受験を決めた。要するに、見ず知らずの他人より寧を優先することに決めたのだった。

無論、それでも東都学院ほど条件の整った舞台がなければ、仁は寧に頭を下げていたことだろう。

全ての条件が整った上での、仁の高校入学なのである。

「ご入学、おめでとうございます」

そんなありふれた台詞から、学長の挨拶は始まった。

「ご紹介にあずかりました通り、私が学長の犬飼悟です。内部進学組の皆さんは私の話など聞き慣れて退屈でしょうから、主に今回は高校入学組の皆さんに向けたメッセージを送らせていただきます」

フランクな語り口で笑いも取りつつ、話を続ける。

「皆さんは大変厳しい入試をくぐり抜け、今この場にいます。今年は倍率も五〇倍と、例年以上の競争率でした。皆さんは現在、高校入試という世界における勝者なのです。あらためておめでとうございます」

おや、と仁は思った。勝者と言う言葉には、必ず対に敗者という言葉がある。あまり教師が使うような言葉ではないのでは、と学校に通ったことのない仁はイメージでそう考えた。ただ、仁の考えはさしてずれているというわけではなさそうで、それまでの和やかな雰囲気は霧散している。露骨に不快そうな顔をした生徒も散見された。無論中にはうんうんと頷いて話を聞いている生徒もいるにはいるのだが。

「——しかし、競争はこれで終わりではありません。これからも、皆さんの戦いはずっと続いていくのです。高校を卒業して大学に入ってからでも、社会に出てからも、命尽きるその時まで」

どうも様子がおかしい。言葉選びが独特というだけで済ませていいものか。

ちらと寧のほうを見ると、小声で「気にしなくていいよ。いつもこんなだから」と苦笑している。

改めて周囲を見渡すと、内部進学組を示す青いリボンをつけた生徒達は、またこの話かと言わんばかりの退屈な表情を浮かべている者が多い一方で、高校入学組を示す赤いリボンをつけた学生達は、苛立っている者が多いようだ。中には露骨に貧乏揺すりなどして不快感を表明する者もいる。

「皆さんご存じとは思いますが、当校では毎学期成績下位一〇%の学生は退学処分とな



ります。——ああ、心配はいりませんよ。その度に編入試験を実施し定員を補充していただきますので」

確かにこの話は説明を受けている。

「なぜそのようなことをするのか。これは、説明会など開けば毎回のようには聞かれることです。私たちは、新陳代謝を図るためだと説明しています。入学当初は高い能力を持っていた学生も、その後何らかの理由で努力しなくなってしまうえば、入試には落ちたものの滑り止めの学校で努力を一層続けた学生に負けるということはよくあることです。だから偏差値が一番高い学校でも中堅私大に進学するような生徒は毎年出てきますし、偏差値が六〇に満たないような中堅校から東大生が出ることもあるわけです。そこで私たちは考えました。どうして1度入学させた学生は最後まで面倒を見る必要があるのか、と。努力をやめた負け組は追い出して、努力し続け負け組から勝ち組になろうとする生徒を新たに受け入れる、このほうがよほど自然なことなのでは、と」

「負け組とはなんだ！」

一人の学生が立ち上がり、声を上げた。

仁らが振り向くと、やはり赤いリボンをつけている。

「何か意見があるのなら、まず名前を名乗りなさい。それが最低限の礼儀というものです」

「一年A組、甲斐博人。学長、あなたの考えは現在の世の中では到底認められないものです。学生が努力をやめてしまったのには何らかの理由があるのかもしれない。そのような学生にも、あなたは同じような言葉をかけるのですか」

「当然です。負け組は負け組。精神的、肉体的、いかなる理由であれ勝負の舞台に立てなくなった者はすべからず負け組、例外はありません」

「まず、負け組と云う言葉自体不適切だということが理解できないのですか。世の中は、人間の価値は勝ち負けだけではありません」

「いいえ、価値のある人間とはすなわち勝者のこと。敗者にも価値があるというのは負け組の妄言か、あるいは負け組の人気を集めたい者達の策略に過ぎません」

「そんなことは——」

「結局のところ」

生徒の言葉を遮り、学長は続ける。

「どれだけ欺瞞の言葉を並べ立てたところで、この世で評価されるのは勝ち組だけなのです。女性は顔のいいこと、金の稼げること、そして前提条件として健康的な肉体を持つことを男性に求めます。男性は顔や体のいいことを女性に求めます。いうまでもなくこれらの条件を満たす者とは恋愛市場における勝ち組達です。皆さんの中に、わざわざ魅力が劣る人間をわざわざ求める者はいませんか。いるかもしれませんが、それは自分に自信がないあまり拒否させるのを恐れ自分自信を騙しているに過ぎません。本心を引き出したなら、好みはあるにせよおおよそ恋愛市場における勝ち組を相手に選ばれたことは否定出来ない事実なのです」

体育館は静まりかえっている。

学長のいうことは、事実なのだろう。

しかし、世の中には隠すべき真実というものもある。

「今のは恋愛の話ですが、全てにおいて同じことです。君の言うように世の中では、特に日本ではこうした多くの人間にとって不都合な真実を覆い隠そうとする傾向にあります。企業は1度採用したものの使えなかった、あるいはいつからか使えなくなった社員を解雇することが難しい。そういう法律になっているからです。そしてその結果、日本は三〇年に及ぶ経済停滞に直面している。一方でアメリカは簡単に使えない社員を解雇することができません。するとどうでしょう？ 三〇年前は大差なかったMLBとNPBの年俵は大きく差が開き、一流の選手はみなMLBに流出しています。サラリーマンも同じですよ。優秀な者は皆アメリカなどの実力に見合った給料が出る国に行きたがる。日本は最も成功した社会主義だとか言われることがあります。平等だのなんだのと耳障りのいい言葉を並べ立て、あまつさえそれを実行した国の末路がこれです」

仁はため息をつき、かぶりを振った。

平均値としての収入が高いこと、特に学長のいうところの勝ち組の利益が最大化される社会が、アメリカをはじめとした新自由主義国家であるというのは事実だろう。

しかし、それこそが素晴らしいというのは動物の発想だ、と仁は思った。

動物は、特に知能の低い動物ほど自分の利益のみを考え行動する。

しかし知能が高くなるにつれ動物も利他的行動を覚えはじめる。犬が主人の危機に命を賭して戦うのがいい例だ。

そして、人間である。人間は一般に動物とは位置づけられない。その理由は様々あるだろうが、一番の理由は倫理を有していることだろう。

人類は倫理を徐々に発達させてきた。その結果戦争は減り、最大多数の最大幸福を考える功利主義が登場したりもした。

新自由主義は、人類の倫理の発達を逆行するかのような思想である。

仁は、犬飼学長に心から感謝している。その心に偽りは無い。

その上で、相容れない人間だと思った。

「当校は日本の現状を憂い、優秀な人間、謂わば勝ち組を育てるために作られました。現在の日本の教育では、世界的起業家など出てこないのは当然です。世界的企業になるには類似の企業を全て蹴散らしてシェアを獲得する必要がありますが、そのようなこと考えられないように皆さん教育されているわけです。そうした現状に風穴を開けたいという思いのもと、毎年多額の赤字を垂れ流しながらも当校は運営されています。皆さんは成績によつては高校生には不釣り合いとも思えるような生活費を毎月支給されることになりましたが、これも全て以上の理念に則り日本を引っ張る本物のエリートを育成するための手段というわけです。従って当校の理念にどうしても納得ができないというのであれば、やめてもらって結構です」

ざわ、と体育館にざわめきが走る。

「それで、どうしますか？ ええと……甲斐くん、でしたか？」

視線が名を呼ばれた生徒に集中する。

「……ええ、やめさせてもらいます。こんな差別主義者養成学校、こっちから願ひ下げです！」

吐き捨てるようにそういった学生は、ダンダンとわざとらしく足音を立てて体育館から

退出していく。

そして、数名がそれに続いた。

「ふふ、四名ですか。今年は少し少ないですね」

仁は寧に小声で「毎年入学式でやめてく生徒がいるのか？」と尋ねた。

「うん、毎年のことだよ」

「はー、そうか。まあ、これじゃなあ」

いやになるのも仕方がない、と仁は思った。

「でもね、ここにいると友達が退学になったりとか日常茶飯事だからさ。みんな麻痺していくんだよね。もちろん過度な競争主義がいやになって途中で自主的に出ていく生徒もいるんだけど、そうじゃない生徒達は、退学になったのはその人達の努力が足りなかったからとか、極端な人だと学長みたいに負け組とかそういうこと言い出す人も出てくる。なんていうか、順応していくんだらうね」

そういうものか、と仁は顔をしかめた。

そして、寧にはそうはなつてほしくないな、と強く思った。

その気持ち伝わったのか、

「私は大丈夫だよ。なるだけ考えないようにしてるから」

「それがいいだろうな」

仮にここを退学になったとしても、新天地で花開く可能性は十分にある。

それよりも、この極端な思想に毒されることのほうが危険なように仁は感じた。

そして、やはり無料は怖いな、と仁はかぶりを振るのだった。

入学式を終えると、内部進学組は教室に向かってくださいとアナウンスがあった。内部進学組はすでにクラスを知らされているが、高校入学組はまだ知らされていないためこの場で発表があるというこらしい。

「仁くんならA組主席間違いないでしょ」

寧が仁の袖をつんつんしながらからかうようにそういった。

「どうだかな。俺は入試のスコアしかないから、中学までの成績も考慮していきなり主席ってことはないんじゃないか？ そのあたりのシステムがどうなってるのか知らないからなんともいえないが」

「んー、それは私もよくわからないな。神宮司君が新入生代表挨拶してたし、一旦主席はお預けなのかな？ でも、仁君ならすぐだよ」

そう言い残し寧は体育館を去って行く。

内部進学組が去ったことで空席が目立つようになった体育館でしばし待機していると、前方で教員がガラガラと音をたてながらホワイトボードを引きずってきた。その数三枚。

「それでは、各自ホワイトボードで自身のクラスと席番号を確認すること。確認が終わった者から教室に向かって。三枚とも同じことが書いてあるから、うまいことばらけて効率的に確認するように」

多くの生徒が言い終わるやいなや立ち上がり、足早にホワイトボードに向かっていく。

中には余裕ぶりたいのか、席に座って待っている者もちらほらといた。確かに一〇〇名が同時にホワイトボードを確認することは出来ない。それならば空くまで座って待っているというのはなるほど効率的だが……。

仁は迷った挙げ句、席で待つことにした。ただし余裕ぶりたいわけではなく、人混みの中に突入していく気になれなかったのだ。今朝船に乗ってから高校入学組の生徒とはしばらく近い距離に居ることを余儀なくされてきたが、やはり殆どの生徒は仁のことを認識しているようで、1度2度とチラ見してくるのはデフォルトである。それならまだ全然いいのだが、好意的とは言いがたい視線を向けてくる者も少なくなかった。無論予想済みではあったものの、しばらく人の目を避けて引きこもり生活をしていたためテレビに出ていた五年前までに比べると大分視線に対する耐性が落ちていることを仁は感じていた。

すると、ワツと笑い声が聞こえた。それも一人のものではない。声は前方、ホワイトボードを確認している生徒達のものようだった。

特に気にすることなくそのまま席で待っていると、最初にホワイトボードを確認したのであろう第一陣達が引き上げてきた。彼らの多くは何やらいやな笑みを浮かべている。

そして、そのうちの一人はすっと仁に近づいてきて、

「アンタ、E組の最後やったで。あの小学生で東大生相手に無双してた大天才改造人間様が、最下位ねえ。あの番組もヤラセやったんかな？　なんてな、冗談よ冗談、怒らんといてな」

そういつてバンバンと仁の方を叩き、ゲラゲラと笑いながら立ち去っていく関西弁の男子生徒。そして、その様子をニヤニヤと眺めながら立ち去る生徒達。

「うーむ、段々思い出してきだぞ」

仁にしてみれば、これくらいのかいかいは蚊に刺された程度だ。引きこもりで多少耐性が落ちていると言っても、人生の殆どの期間を誹謗中傷と物理的な嫌がらせに晒されてきた仁である。

「この程度で済むなら三年間余裕なんだが、はたして」

そんなことを考えているうちに段々と人が捌けてゆき、最初に席に座って待つことを選んだ生徒らも席を立ち始めた。仁もおもむろに立ち上がり、ホワイトボードを確認しに向かった。

仁に声をかけた男子生徒の言葉を信じるなら、仁は入試の点数が最下位だったということになる。それはありえない。なぜなら東都学院高等科は入試の配点が公開されており、国数英各一〇〇点に面接点一五〇点という配点になっているのだが、仮に面接が0点だったとしても国数英は満点であるはずなので三〇〇点ということになる。ところが例年の合格最低点は二五〇点前後で推移しており、過去問もさらっと確認したが、今年も問題の難易度は例年通りであると仁はみていた。受験後の予備校が出した講評にもそのようなことが書かれていた。であるならば、仮に一番下のEクラスだとしても、その中の最下位ということはあるはずなのである。

なら、あれは単なるからかいなのか？

仁は、そうも思えなかった。これは半分は直感だがもう半分は彼らの俺を見る視線だ。あとですぐにバレる嘘にしてはあまりに愉快さを感じ過ぎた。彼らは俺の席次を見て心底愉快に感じていたとしか思えないのだった。

ホワイトボードの前には、もう生徒はまばらだった。空いた空間に入り、内容を確認する。すると――。

確かに九条仁の名は、Aクラスにはなかった。それどころか、B、C、Dクラスにも。Eクラスの窓側最後尾。九条仁、E―四〇。彼の言っていたことは、事実だった。

HRは至ってシンプルだった。

教科書配布や図面を配っての簡単な校舎案内などがあり、明日からのスケジュールが簡潔に伝えられる。また、スマホもここで配布された。一般に流通しているスマホのようだが、国産とは珍しい。今や日本においてすら日本メーカーのスマホのシェア率は限りなく低い。が、学園の上層部にこだわりのある人がいるのかもしれない。また、特筆すべき事項として、スマホの裏側に小さく名前が刻印されていた。確かにこれなら一般にロックをかけるスマホでも簡単に持ち主がわかるため、落とし物の際には便利かもしれない。

また、学内のローカルネットのみで接続可能なポータルサイトについても説明があった。アプリ形式になっていて、個人用ページでは自分のこれまで受けた試験の点数や部活動で残した結果などが記されている。また、チャット機能も搭載されていて、個人宛のチャネルも作ることが出来るし、複数人を入れたグループチャネルの作成も可能なようだ。連絡先は全て公開されているため、高等科の学生であれば三年生であっても突然チャットをおくるようなことも出来るようになっていく。ただし中等科の学生のデータはないため、そこはしっかりと線引きがされているようだ。PCからも全く同じことが出来るとの説明もあった。

また、別途学内での支払いに使用できるアプリ、東PAYの説明もあり、ここが一番生徒達が盛り上がっていた。件の生活費であるが、毎月一日に入金されるようで、すでに生徒のアプリには今月分が入金されていた。仁らのEクラスでは一万円、Dクラスから二万円、四万円、八万円、一五万円となっていて、クラスが上がることに殆ど倍々ゲームで上がっていくようだ。これにはEクラスの生徒達も盛り上がりを見せ、「絶対に次の試験で上に上がってやる」などの勇ましい声がいくつも聞こえてきた。

なるほど、学長も言っていたが、なんとも法外な値段だ。これに加えて毎回の試験で成績トップ一〇にはボーナスも出るらしく、確かに定期的に一定数の退学者が出ることなど厳しい一面はあるが、それでもこれほど恵まれた環境は世界中探してもそうはないだろうと仁は思った。

「――まあ、俺以外にとってはだが」

「こんなのおかしいよ！」

HRを終え、放課後。

仁と合流した寧は激怒していた。

「なにかの不正があるに違いないよ！ 入試の採点にかかわった人が点数を操作したとか……！」

自分以上に怒っている寧に、つい仁は吹き出してしまった。

「何笑ってるの！」

「いや、俺のことでこんなに怒ってくれる人がいるなんて、なんて幸せなんだと思っ  
な」

すると寧は頬を赤らめ、

「何変なこと言ってるの。そんな場合じゃないでしょ」

寧の言うことはもっともだった。

毎学期の退学者はその学期に実施された定期試験によって決まるため、今の席次が及ぼす影響は特にならない。しかし、試験が公正に採点されないとすると、仁にはどうしようもない。極端な話、また満点を取ったところで0点扱いされるかもしれないのだ。

現在二人はモール内にあるカフェ【*Uma caldo*】にいた。

寧はブラックコーヒーを、仁はミルクティーを注文した。——寧がブラックコーヒーを注文した際、仁は一瞬ギョツとした顔をした。仁は甘党であり、コーヒーはミルクと砂糖をふんだんに入れば飲めなくてもいい程度である。女の子のブラックに対しミルクティは少々ダサイ気もしたが、飲めもしないものをオーダーして悪戦苦闘するよりはいいと考え頼みたいものを頼んだのであった。

「しかし、よくわからないな。俺が嫌いなら落とせばいいだけの話だと思っただが」

寧は困り顔で、

「うーん。学内で対立があるのかも？ 学長は仁君を歓迎しているけど、教員の中には仁君をよく思わない人もいて、みたいな」

「そもそも学長が俺を歓迎してるというの、表向きの話だけかもしれないしな」

「それはないよ！ そもそも表向きの話でいうなら、仁君を受け入れたって話した動画で大炎上してたんだから、人気取りがしたいならあんな動画上げないでしょ」

「確かに世間的にはそうだが、特に陸上の番組で炎上するまでは、知識人を中心に「誕生した子供に罪はない、悪いのは斎郷だけだ」って意見も少なくなかったんだよ。そういう意味では、真の公正主義をアピールするために俺を擁護し続けた可能性もないとはいえない——いや、それはないか」

「あり得ないよ。さっきの話聞いてたでしょ？ 確かによそでは多少猫かぶってるにしても、正義論者に見られたいなんて発想は学長にはないと思うよ。単に学生が集まらなくなるから素を隠してるだけだし」

「……そうだな。その通りだ」

ミルクティに甘みが足りないと感じ、追加の角砂糖を投下しかき混ぜつつ仁はそう答えた。

「話をまとめると」

仁はスプーンを動かす手を止め、言った。

「学長は俺を事実歓迎していたが、学内にはそうでない者もいて、そいつらの工作で最下位ってことにさせられた。落とされなかったのは——さすがにそこまですると学長が怪

しむから、とか、そういうことか？」

「そうだね。うーん、でも」

仁には寧の言いたいことに検討がついていた。

「最下位でも学長は怪しむはずだよな」

こくこくと寧が頷く。

「俺の点数を操作できそうなのは、各科目の採点者と、それを取りまとめて最終的な結果を出す係くらいか」

「その人達に指示を出してる人たちがいる可能性もあるよね」

うーむ、と仁は顎に手を当て考えるポーズを取る。

「となると誰も信用出来ないな」

普通ならまずは担任などに尋ねるものだろうが、担任が点数操作に関わっている可能性もある。

「ま、案外俺がテストに失敗しただけの可能性もあるけどな」

「仁君に限ってそれはないでしょ」

にやりと笑い、

「まあな。冗談だ」

仁はこれまで人生で見えてきた全てを記憶している。

当然自分の書いた答案も映像記憶としてありありと思いつけるが、ありがちなマークズレなどの凡ミスはない。そもそも入試はどの科目も記述式の問題ばかりで解答がズレる余地はほぼなかったと言っている。

二人はしばし無言で考え込む。

——先に口を開いたのは仁だった。

「ま、そうしたら学長に直接話を聞いてみるか」

一人校舎に戻った仁は、学長室を目指していた。

寧もついて行くと言ったが、この件に寧は関係ない。部外者を連れて行くべきではないと判断したのだった。

高等科校舎は長方形の真ん中をくりぬいた形状の五階建てで、一階は職員室や生徒会室などがあり、階を上るほど下級生の教室になっていく。各階に図書室や家庭科室、生物実験室などの各科目用の特別教室とその準備室があり、部活動に割り当てられる部室も殆どが二〜四階に分布している。五階は現在は一部の部室になっている部屋を除いて空室となつていゝらしい。贅沢な話だ、と仁は思った。

目的の学長室は一階にある。職員室の隣で、職員室と違う明らかに重厚な木製のドアが存在感を主張していた。学長室と記されたこれまた洋風のアンティークなプレートを見てもなく、ここだな、と仁は理解した。

二度ノックする。数秒経って、どうぞ、と声が聞こえた。

両開きの扉を押し開けると、件の犬飼学長がこちら向きに、これまた豪華な革製の黒椅子に腰掛けていた。何か書き物でもしていたのか、万年筆を片手に持っている。

「一年E組の九条仁です。本日は伺いたいことがあって参りましたが、今お時間よろしいでしょうか」

「かまいませんよ、九条君。よく我が校に入学してくれました。歓迎します」  
にこやかな笑顔とともにそう述べる学長は、先ほどの入学式の校長とは似ても似つかなかったが、一番ヤバイタイプの人間は裏表が激しく軽い付き合いではいい人に見えたりするものだ。これまでの経験から仁は知っていた。

「どうぞ、近くの席に座ってください」

言われて仁は、応接用の長椅子に腰掛ける。正面にはローテーブルを挟んでこちら向きに同じ長椅子が置かれている。

「それで、聞きたいことはなんでしょうか？」

校長は特に席を移動することもなくそう尋ねてきた。椅子が低いため必然見上げる形になる。

「はい。実は私の配属がEクラスの四〇番だったのですが、これは私の入試が最下位だったということでしょうか」

校長はすこし残念そうな表情をして、

「そうなります。いきなりこんなことを言うのも何ですが、期待外れもいいところ、といったところでしょうか」

仁が黙っていると、

「話はそれだけですか？」

「はつきり申し上げますが、私は入試の採点、あるいはそれ以降の行程において何らかの不正があったと考えています」

「ほう。君の点数を入学試験委員会の先生方が弄ったと、そう言いたいのですか？」

「誰がやったかはわかりません。どれだけの人間がそのようなことを出来る立場にあるのかわかりませんから」

「ほう。つまり、委員会の先生方以外にも君の言う犯人がいると考えていると、そういうことですか」

「可能性は否定出来ません」

学長は深くため息をつき、

「君の勘違いではないのですか？ 君の実力を疑うわけではありませんが、我が校は全国的に見ても最高に近い難易度の問題を出题しています。それに加え、もし当日君が何らかの事情で——例えば腹痛とか——調子を崩していたりしたら、ああいう結果になることもあることでしょう」

「私は入試当日万全のコンディションでしたし、なんなら当日書いた答案を全て記憶しています。予備校の解答とも見比べましたが、全問正解していました。記述とはいえケチをつけさせる余地すらない解答だったと自負しています」

「そう言いますが、君の主観ですからねえ。証拠がない」

「では、答案を出してください」

実のところ、仁は答案に細工をされる可能性を予想していた。いくら学長を受け入れようとしていても、それをよく思わない人が内部にいるのはむしろ当然だと思っていたからだ。事実一時期東都学院の偏差値が下落したのは学長が仁の話をしたからであり、これが



実際に入学したと噂になれば今度はあの時以上の受験者減があってもおかしくない。そう考え、学長に隠れて答案を操作する者がいた。しかし落としてしまえば学長が疑う。そのため席次を下げ、仁は現在さして学力がないと印象づけた上で次回の定期考査も点数を操作することで下位一〇%に入れ退学させるプランだ。

そのため仁は答案を操作しづらくするため、解答を推奨されていた鉛筆・シャープペンではなくボールペンを用いて作成した。ボールペンでは一度書いた解答を消すには斜線を引くしかなく、そのスペースはもう使えないため圧倒的な不利を抱えることになるが、仁に書き直しなどないため問題はない。

ボールペンによる解答の変更はあからさまなものになるはずだ。学長に見てもらえれば不正と判断してもらえる可能性もある。

——と、最初は考えていた。

しかし、どうも学長は仁に対してあまり友好的ではない。当てが外れた格好だ。むしろこの様子だと、学長自身が不正に関わっている可能性すらありそうだ。しかし、何故。仁の排斥に学内で一致していたのなら、はじめから落とせばよかっただけだ。もし仁が世間に向けてこんなことがあったと声を上げる可能性を危険視していたとしたら、この扱いは結局同じことである。

「解答はすでに処分済みです」

そうきたか、と仁は思った。こう言われてしまえば仁にはもう打つ手立てがない。全ては学長が想定していたより仁に協力的ではなかったこと、それに尽きる。

仁は立ち上がり、

「わかりました。もう結構です」

と学長に背を向け、扉に手をかけた——その時。

「おや、もう諦めるのですか？」

仁が振り返ると、学長はいつの間にか先ほど仁が座っていた席の向かいに腰掛けていた。「君の頭脳でいかに論破してくるものかと期待していたのですが、少々期待しすぎていたようです」

「……俺を試したんですか」

仁は自分の一人称が変わったことに気がついていない。

「ええ、その通りです」

「もし俺が不正を暴けたら本来のクラスへ戻すが、それが出来なければそのまま——そんなところですか」

学長は大きめに両手でバツテンを作り、

「いえいえ、一度出した結果を覆すことは出来ません。多少の点数の上下ならまだしもEクラスからAクラスに上がるほどの採点ミスがあったとしたら学園側に不信感をもたれてしまいます」

それはそうだ。しかし、だとしたら——。

「……もういいでしょう。さっさと目的を教えてください。俺を追い出したいのなら、元から合格させなければよかったです」

「心外ですね。私は君に心から入学してほしいと思っていましたよ？ 君と幼なじみの類地君とはよく君の話をしていましてね、高校入学のタイミングで勧誘したらどうかと進

めていたのも私です。類地君は編入試験で中等科に入れたがっていましたが、当時は君を受け入れると発信したことで偏差値が暴落してしまいましたから。多数の関係者から釘を刺されていまして、すぐにというわけにはいかなかったのです」

「だったら」

「事情が変わったのです」

学長の目が鋭くなる。

「いいですか。これから私は君に一つの取引を持ちかけます。もし断れば……わかりますね」

今回と同じように、仁の点数を操作し下位十%にしてしまい退学処分にする、という脅しだろう。仁は頷いた。

「よろしい。……当校は今、閉校の危機に瀕しています」

「閉校の危機、ですか」

予想だになかった学長の言葉に、仁はぽかんと口を開けた。

「ええ。それには当校の特殊な設立経緯があります。当校はご存じの通り株式会社立の珍しい学校です。親会社である東京中央コンサルティングの役員の一人名である私が提案し、設立に漕ぎ着けたのです。そして、当校には現在二名の、親会社役員のご子息が通われています」

ほんの少しだけ話が見えてきたな、と仁は思った。学長は続ける。

「その二人の両親は、私と同じ役員ではありませんが、社内での地位には大きな差があります。私は末席も末席ですが、二人は次期社長候補と目されるほどの存在ですから。そして、そもそもこの学校を作るというプロジェクトは直接的に親会社に利するものではないある種の慈善事業ですから、賛同する団体から支援を受けているとはいえず日々赤字を垂れ流すことになるこのプロジェクトに反対する者は多かったです。しかし、会長の一存で実施が決まりました。しかし、何事もとりあえずやってみるがモットーの会長ですから大してこの学園に対して思い入れなどありません。本日も出席をお願いしましたが断られてしまいましたからね、その程度なのです」

学長はここでいったん話を切り、

「どうですか、九条君。ここまでの話から、我が校が抱えている危機が何かわかりますか？」

問われた仁は、顎に右手をあてがいしばし考える。

「――役員の子供のどちらか、あるいは二人ともが現在学園に対して何らかの不満を抱えていて、そのことを役員である親に報告された場合、学園が廃校に追い込まれる可能性がある」

「まあ、大体正解です。二人とも爆弾のような存在ではありませんが、とりあえず今回問題になっているのはそのうちの一人。名前を松井茜さんと言います。君と同じ高校一年生ですよ」

「ということは、内部進学組ですか」

「ええ、そうです。彼女は元々成績もよく友達も多い生徒だったのですが、とある事情で現在不登校となっています。昨年の秋頃からですから、もう半年になりますか」

「半年？」

仁ははて、と首を傾げた。

「君の疑問はよくわかります。定期試験を受けなければ一発で退学ではないのか——そういうことでしょうか？ 無論、多数の意見を生徒達からいただきましたが、こう説明しました——」

学長はその時を再現するように身振り手振りを交えて語った。

「彼女は当校の親会社の役員の娘さんですから——ええ、そうですよ。特別扱いというわけです。不満ですか？ ……はあ、いつも言っています、毎日きちんと新聞を読んでいますか？ きちんと読んでいるのならわかりそうなものですが。この世の中は、理不尽に満ちあふれています。政治家、企業のトップ、法曹関係者、国家公務員、彼らの誰かが真に信用できる人物たると思いますか？ 否、どれだけ誠実に見える人物も、権力と欲望の世界に一步足を踏み入れた途端そのような建前は捨て去ってしまうのです。まあ、中にはそれでも公正たろうとする奇特な人材もいなくはありませんが、その手の人間は圧倒的多数の悪人達に睨まれ消されるだけです。——もうわかったでしょう？ この世の中に公正など求めてはなりません。普段私は勝ち組負け組とよく言いますが、まさしくその出自からして彼女は勝ち組なのです。それが故にこのようなルールの無視が許される。……ただし、ここは学校です。そして下位一割ルールを作ったのも私です。私とて、本来退学になるべきでない生徒を退学にするのは本意なのです。——そこで、特例措置として、下位一割に沈んだ生徒の中で最も上位の生徒のみ救済されることとします。この措置は彼女が復帰するまで続きます。これで文句はないでしょう」

学長はふうと軽く息をつき、

「とまあ、このように弁明したわけです」

「それで生徒達は納得したんですか？」

「もちろん納得しない生徒もいましたが、それ以上は無視しました。文句があるなら退学してもらって結構だとね」

それを言われると生徒もそれ以上の追求は難しいだろう。割を食う生徒もいないというのなら、そこらが撤退どきだ。

「さて、問題は何故彼女が登校を拒否しているのかということですが……ええ、これはどう説明したものでしょうか」

なんとも歯切れの悪い学長は、続けた。

「……私から説明するのも何でするので、本人に直接聞いて貰いましょう」

「不登校の松井茜さんからですか」

「ええ、そうです。ええと、今は……二時ですか。まだ大丈夫ですね。それでは、今日中に彼女に会いに行つて話を聞き、解決策を考えてください。本人にはそのように伝えておきますので」

そう言つて学長は一枚の紙切れを渡してきた。

A棟七階一〇号室と書いてあるのは、茜の部屋だろう。その下には電話番号と思しき数字の羅列があった。これはスマホの番号だろうが、勝手にこんな個人情報渡していいのだろうか」と仁が考えていると、

「下の番号は生物の朝倉先生のものです。上層階は女子生徒のエリアですから、一応女性の先生が付き添った方が変なトラブルにならなくていいでしょう。ただし、朝倉先生が

付き添うのは部屋の前までです。松井君の事情を知るのは教職員では私だけですから」  
確かに、他の生徒ならともかく無駄に知名度が高くアンチも多い仁が女子の階層に行くと噂になれば、面倒なことになりかねない。女性教員の付き添いはありがたいと仁は思った。

「期限は今学期中です。期間内に彼女が復学出来れば、次の定期テストの採点は公平に行いましょう。しかし、それが出来なければ……わかっていますね？」

仁は深いため息をついた。もはや遠慮の概念はこの学長に対し必要ないと仁は判断していた。

「最初から俺を利用しようとして俺を勧誘するような言動を繰り返していたんですか」

「心外ですね。動画やメディア、私のSNS上で語っていたことは全て私の本心ですよ。外向けに多少きれいな表現を心がけてはいましたけどね。……さっき言ったでしょう、事情が変わったのです」

学長は両肘をローテーブルにつけてこちらに身を乗り出し、

「私は彼女が不登校になって以来、多くの解決策を考え実行してきました。しかしその全ては失敗に終わりました。もう、私の持ち駒は君しかないのです」

堂々と自分のことを持ち駒と言いつつ学長に仁は苦笑するしかなかった。

そして、やはり、と確信を深める。

仁に近づいてくる人間はすべからず彼を利用するためにそうしているのだ。

そして、だからこそ、何の利害関係もなく、それどころか大きなリスクを背負ってまで仁と学校に通いたいと、ともに青春を過ごしたいと言ってくれた寧のことが大事でたまらないのだ。

「いつ松井君が、現状を憂いて父に——松井常務に泣きつくかわかりません。そうなれば全て終わりです。この学園は廃校となり、君は類地君と過ごせる唯一の場所を失うこととなるのです。それは君も困るでしょう？」

その場合おそらくそれ以前に退学にさせられているだろうから廃校云々は関係ないと仁は思ったが、もはや突っ込むのも無駄だと開きかけた口を閉じた。この還暦近い男を論破したところで実益は何もないのである。

「わかりました。やれるだけやってみましょう。——拒否権はないようですので」

最大限の抵抗として嫌みたらしくそう付け加え、仁は席を立った。

「成功を祈っています」

それには答えず、仁は扉を開けて廊下に出ると、後ろ手で扉を閉めた。

「仁君！」

「寧……来るなと言ったのに」

「別に終わるまで待つてたんだからいいでしょ。にしても随分と長かったね。どうだった？ 入試に不正がないか調査してくれることになった？」

「そういえばそんな話だったな、と仁は苦笑した。

「いや、それは無理だ。なんてつたって点数を操作してたのは学長だったからな」  
寧は見たことのないような驚愕の表情を見せ、

「何それ、どういうこと？ 本当に？」

「ああ、間違いない」

寧は小さな手で両手に握りこぶしを作り、  
「ちよつと私文句言ってくる！」

と校長室にずんずんと足音を立て入っていかうとした。仁はそんな寧の肩をやさしくつかんで、

「まあまあ、ストップストップ。落ち着いて」  
「だって！　こんなのおかしいよ！　しかも、よりにもよって学長がなんて——私、信じてたのに」

確かに、寧はおそらく仁の話題という共通点からか中等科時代から学長と交流があったようだから、今回の事実はショックだろう。仁は後で学長に、寧に謝罪させねばと思った。

「行くなって言うのなら、仁君の口からちゃんと説明して」

「お、おう……」仁はポリポリと頭を掻き、思った——困ったことになった。

こうなると今回の件を話さないというわけにはいかない。そうせねば寧は納得せず、仁の目を盗んで学長室に突撃してしまうだろうからだ。仁は自分のせいで寧が睨まれるのが嫌だった。もつと言えば、タダでさえ仁といることで色々噂をされていそうなのに、教職員まで敵に回すのは本格的にまずいだらうという切羽詰まった事情がある。

「よし、わかった。場所を移そう」

一〇分後、二人はモール内のカラオケに来ていた。

そして、仁は洗いざらい事情を話した。

今回の件に関して、学長は特に誰に話すとも言わなかった。暗黙の了解だった可能性もあるが、それならそれで仕方がない。仁にとって他に選択肢はなかったのだから。

話を聞き終えても、寧は怒ったままだった。

むしろ先ほどよりも怒っているようにも見える。学長の悪行の内容が具体化したからかもしれない。

「まあ、そう怒るな」

「逆に聞くけど、なんでそんなに冷静なの？　信用していた人に裏切られて、こんな理不尽な目にあつてるのに」

別に俺は学長を元からさほど信用していなかった、とは言わなかった。

「騒いでも現実が変わらない。俺に出来ることは学長の指示に従うことだけだ」

仁がそう言うと、寧はぐつと押し黙った。

「……まあでも、松井さんのことは私も少し気になってたんだよね」

「へえ。知り合いなのか？」

「ううん。話したこともないよ。でも、松井さんは入学からずっとAクラスで、体育祭でも活躍してたし、文武両道って感じで、それでいていつもお化粧バッチリで可愛いし。ちよつと目標にしたところあるんだよね」

「ふむ」

学長の語る茜の像と、寧の語るそれはおおそ一致している。話を聞く限り、急に不登校になるようなタイプには思えない。一体何があったというのか。

「さてと」

仁は会計用の伝票をつかみ立ち上がった。

「あっ、私も出すよ」

仁は無言でかぶりを振り、

「俺はこれから松井に会いに行く」

「……私も行く」

「いや、それは」

仁の言葉を両手を突き出して押しとどめ、寧は言った。

「いくら学長から話を通つてるとはいっても、男子生徒が女子生徒の部屋で二人きりつてのはね……。そもそも仁君、これが学生初めてでしょ？ 同年代の女の子との適切な距離感とか自信ある？」

仁は言葉に詰まった。確かに寧の主張には一理ある。

「……わかった。ただ、全ては松井次第だ」

「それはもちろんだよ」

一〇分後。仁と寧がA棟につくと、すでに松井教諭は到着済みだった。

三人はエレベーターで七階に向かった。すれ違った生徒は奇妙な三人組に胡乱な目を向けてきたが、気にしては始まらない。

一〇号室前にたどり着く。

「私はここまでと学長から指示を受けていますので」

そう言つて教諭は壁にもたれ掛かり、スマホを弄り始めた。

仁は、せめて二人が部屋に入るまで待てないのかと呆れつつインターホンを押した。

すぐに応答はあつた。

「九条仁君……本物だ」

思つたのと違う反応に面食らう。

「今開けるね。つと、そつちは……類地さん？」

「あ、うん。私仁君の幼なじみで、仁君が松井さんのところに行くつて聞いて……。あつ、でも詳しい話は何も聞いてないから。嫌ならすぐ退散するけど、初対面の男女二人つきりつてのも気まずいかなと思つて」

寧には珍しく慌てた様子でわたわたと捲し立てる。

「——いや、類地さんならいいよ。今開けるね」

そう言つてブツツと接続が切れた音がして、タツタツと部屋の奥からこちらに歩いてくる音がする。そしてすぐにガチャリと音を立て扉が開いた。

「どうぞ、上がって〜」

そう言つて部屋の奥に入っていく茜。

二人はお邪魔しますと口を揃えてから、玄関に足を踏み入れた。

鍵はオートロックタイプで、扉から手を離すとガチャリと音を立てひとりだけで閉まった。

二人は靴を脱いで廊下になると、靴を揃えて茜の待つリビングに向かった。

部屋の構造は仁の部屋と全く同じで、廊下の左右にトイレと風呂、キッチンがあり、奥

に進むと広めのリビングがある。

リビングの中央には四人用テーブルがあつて、その奥側に茜は座っていた。

ブロンドのツインテールをワインレッドのリボンで留めている茜は、日本人離れしたくつきり顔も相まって童話の世界の登場人物のように思われた。しかし、その表情はやはりすこしやつれているように見える。

「そこ座っちゃつてて。飲み物持つてくるから」

「あ、お構いなく」

仁が言うが、茜は歩みを止めることなく廊下に向かう。冷蔵庫を開けた音がした。

「何飲むー？ ミルクティーか烏龍茶しかないけど」

「あ、じゃあ烏龍茶で」

「……俺はミルクティーで」

一瞬違う飲み物をオーダーすると手間かなと思つた仁だが、仁は烏龍茶があまり得意ではないため悩んだ挙げ句好みを優先することにした。

「はーい。氷いる人々？」

「あ、私は大丈夫」

「俺はお願いしたい」

「おけー。にしても二人、悉く趣味が合わないねー」

ケラケラと笑いながらそういう茜を見て、二人は顔を見合わせた。

「なんか、元気そうだね。少し安心したかも」

小声で寧がそんなことを言った。

茜はおぼんにグラスを三つ乗せてすたすたとリビングに入ってくると、テーブルにおぼんをおいてグラスを三人の前に差し出した。

「ごめんね、なんか気を遣わせちゃつて」

寧の言葉に、茜はかぶりを振つた。

「これくらい気にしないで。わざわざ引きこもつてる私を助けに来てくれたんだからさ」  
それに、と茜は続けた。

「私、類地さんのこと実はちよつと尊敬してたんだよね」

「えっ、うそ、どうして？」

寧は驚いた様子で両手を口元に当てる。

「嫌なこと思い出させるかもだけど、類地さんさ、最初はEクラスだったじゃん？ 最初の定期試験なんかギリギリ退学回避でさ。私、正直に言うと、あーこりゃそのうち退学かなつて思つてたんだよね」

無理もないことだ、と仁は思った。退学者の代わりに編入してくる学生は、ギリギリ退学を回避した学生よりその時点での学力は高い可能性が高い。とすると必然、次の退学者は先の試験で下位二割に入っていた学生が濃厚ということになる。

「でもさ、次も、その次も類地さんは退学を回避したじゃん？ それどころか少しずつ順位を上げていって、気がついたらBクラスまでできた。これつてすごいことだと思うよ。この学校はみんな努力してるから、その中で順位を上げるつてことは、それ以上に努力してるつてことだもん」

寧は直球の賞賛を浴びて顔を赤くし、「そ、そうかな……」と頭を掻いていた。

「それに、九条君！」

「お、おう」

「私ね、小さい頃九条君が出てたテレビ番組全部見てたんだ。かつこいい、私もこんなふうになりたいと思つて、それまで無理矢理やらされてた勉強に主体的に取り組むようになって、そこから成績がすごい伸びて。だから、私がここにいるのは九条君のおかげなんだ」

「……そ、そうか。いや、松井の努力の成果だと思うがな」

「謙遜しないでよく。まあ確かに努力したのは私だけど、きっかけを作ってくれたのは間違いなく九条君なんだからさ」

「……」

「あ、仁君が照れてる。珍しい……」

と、寧がジトツとした目で仁を見ながらそんなことを言った。

「うるせ。しようがないだろ、こういうの慣れてないんだよ」

仁のことを利用するため持ち上げたり、気味悪がられたりは日常茶飯事の仁であるが、このように純粋な感謝の意を表されたことなど最後にいつあっただろうか。

「まあ、そんなことはいいんだ」

空気作りは茜が最初から予想外に好意的だったおかげでうまくいった。

そろそろ本題に入らねばならない。

「聞かせてもらつていいか。どうして松井が現在不登校になっているのか」

松井はぼかんとして、

「あれ、学長から聞いてないんだ？」

「ああ。なんか言いずらそうにしてて、本人から聞いてくれて」

仁がそう告げると、茜は「アイツ、逃げやがったな……」となんだか上下関係が垣間見えるような独り言を呟き、

「じゃ、私から話すね。……ちよつと気分悪くなるかもだけど」

話を聞き終えた二人は悄然としていた。

「許せない……」と寧が力なく呟いた。

そんな二人をみて、茜は「まあそうなるよねえ」とでも言いたげに苦笑していた。

仁は茜を、強い人だな、と思った。

部屋に入った時から「思ったより元氣そうだな」とは思っていたが、話を聞く前と聞く後では、その笑顔の重みが違いすぎた。

——茜の話をまとめると、こうだ。

中等科三年の春頃、二人の男子生徒がお金を貸してほしいと茜の元を訪れた。話を聞けばギャンブルに負けて借金を背負ったとのこと。

ちなみにこの学校ではギャンブルが秘密裏に行われていて、先生達もそのことを知ってはいるものの、放任しているというところらしい。というのも、この学校では基本的に教師はただ授業をするだけの存在で、生徒同士のトラブルなどは全て当事者間で解決するか、



それが難しい場合生徒会に処分を委ねるなど、学生中心の学校運営が行われているようだ。そのためギャンブルについても、対策を講じているのは生徒会のみらしく、教職員は我関せずの姿勢なのだという。

そして、たちの悪いことに、彼らは借金完済まで生活費として振り込まれる額を全て支払いに充てる契約をしてしまったのだそう。するとどうなるか？ 長期間自由に使えるお金が0ということになり、当然生活に支障を来すことになる。最低限水は出るし、学食で最もベーシックなメニューは無料で頼めるため飢え死にすることこそないが、文房具などは自腹なため最悪勉強が出来なくなることすらあり得る。

そこで、茜から金を借りて借金を返し、茜には生活費の三分の二を毎月返済するというのが男子生徒らの狙いだった。

面識もない茜に頼った理由として彼らは、当時Aクラスの一〇傑で財力に余裕があり、その上一〇傑に入るような生徒は大抵ギャンブルなど大嫌いでそうした学生との付き合いすら嫌がる傾向にあるが、その点茜にそういうイメージはなかったから、と説明したという。

そう言われても茜には何のメリットもない話で、当初は断ったそうだが、土下座して頼み込まれ、しぶしぶ了承したようだ。

最初の二ヶ月はしっかりと返済されていたが、そこから返済が遅れるようになった。そしてとうとう二人は茜から隠れ返済をしなくなった。

ここまでは想定通りだった。茜は貸した自分が悪いと考え、借金はチャラにしてあげることにした。しかし、無条件でというのはよくないと考え、結果茜は二人を呼び出した。逃げ回っていた二人だが、条件付きで借金をチャラにするとチャットしたところその日のうちにやってきた。二人にも悪いという気持ちはあったのだな、とその時は思ったらしい。

茜はモールで自立型のポールを買ってきて、ポールダンスをやらせることにした。

観客は、茜のクラスメート達と、他クラスから集まった野次馬達だが、放課後ということもあって二〇人もいなかったという。

二人はブツブツと文句を言いながらもポールダンスを完遂した。

茜は「これに懲りたらもう金なんて借りんなよ」と釘を刺し、二人も頷いていた。

これで全ては丸く収まった——と、その時はそう思っていた。

だが、茜の思った以上に、二人の恨みは大きかった。

二人は茜を、「感謝の気持ちを込めてプレゼントがある」と言って呼び出した。

場所はカラオケで、周囲は「なんか不気味」とか「行かない方がいいんじゃないか」とか言っていたようだが、茜は二人の気持ちを無下にすることも悪いと思いき行くことにした。

そして、悪夢が待っていた。

茜はまずスマホを奪われ、手足を縛られ、服を脱がされ——レイプされた。

その上、二人は動画も撮っていた。そして、その動画をネタに強請られるようになった。毎月一五万——Aクラスの一月の生活費全額に当たる——を渡せば動画を拡散しないと。

茜はそれからもしばらく登校していたが、彼らは動画を拡散しないと云ったにもかかわらず、ある日とある同級生の男子から、動画の話をされたのだという。

その彼は心配そうに、「こういう動画があるって男子生徒の間で噂になってるんだけど」と伝えてきたのだそう。彼自体は見えていないが、実際に見たという生徒がいるらしい、

それが誰かまでは知らないとも付け加えて。

その彼はおそらく善意で教えてくれたのだと思う、と前置きした上で茜はこう言った。

「でもさ、私、それ聞いてぶつっと気持ちが悪くなったんだよね。それまではあんな奴らに負けるもんかって自分を鼓舞してただけだ」

二人にクレームを入れたところで何も変わらないし、むしろまた逆上されても困る。それで、契約違反にもかかわらず茜は何の文句も言わず金を送金し続けているそうだ。

基本的にこのような生徒間の問題は生徒会案件であり、不登校という事情も相まって生徒会も話を聞きに来たそうだが、話す気にはなれなかった。そもそも、生徒会役員さえ必ず信頼できるとはいえないのだ。茜は疑心暗鬼になっていた。

そんな中、教職員で唯一相談できる人物が学長だった。

元々茜は親会社役員の娘ということで、学長には気を遣われていた。

そこで学長にことの経緯を話した。学長も、茜が父に泣きついては学園存続の危機であることから親身になって相談に乗ってくれ、いくつか対応策も実行してくれたようだ。

そのうちの一つが当該生徒の抜き打ちスマホ・PCチェックであったが、残念ながら写真や動画などの証拠は見つからなかったらしい。さらに、この抜き打ちチェックの実行に伴い、学長の腹心である教員数名に事件の話をせざるを得なかった。

この件で当該生徒らは生徒会に、学園に対して慰謝料を請求する訴えを起こした。その際二人は、「不当な理由により不当にプライバシーが犯された」と、調査チームがどのような理由で調査してきたのかを頑なに述べなかったため、生徒会も困惑し「情報に不足があり結論を出せない」と判断を保留、また当然学園側はこの訴えを棄却した。これについて茜は、「二人は不良気味で生徒や教師からの心証もよくなかったため、二人が調査された理由を言ってしまうと、仮に物的証拠がなかりうが疑われると判断したからだろう」と推測していた。確かに証拠がなければ生徒会や学園も二人を裁くことはできないが、それでも強姦の疑いがかかった状態で学生生活を送るのは辛いだろう、と仁は思った。

だが、この件から学園側は動きづらくなったとのこと。動画が見つからなかったのはいざという時のために他の誰かにデータを移していたのだろうと茜は推測していた。

仁の「父に打ち明けるのが一番話が早いと思うが」との問いには、「二人が処罰されること、動画が誰の手元にも残っていない状態にすること、これらを達成しないことには逃げるに逃げられない」とのことだった。

学長、そして学園にとっては、茜がそのようなように考えてくれて首の皮一枚繋がったというところだな、と話を聞いていて仁は思った。しかもその事実を、殆どの学生や教職員に至るまで知らないのである。

しかし、現状動画がどこまで拡散しているかわからない以上、解決策はまるで思いつかず、暗礁に乗り上げていた。

もはや全て父に打ち明け、学園ごと道連れにするしかないのだろうか——そんなことを考えだした頃。

学長が仁の名前を挙げた。

「今年の春に、あの九条仁が入学してくる。あの最強の遺伝子が」と。

そこで、寧ははっとした顔をして、

「そうか。だから学長、あんなにしつこく私に仁君の勧誘を勧めてきたんだ。行くって言ってるのに、毎日のように確認してきて。まあ私も、仁君をあんなに求めている人がいるのがうれしくて気にしてなかったんだけど」

もはや万策尽きた格好の学長と茜は、仁に事件の解決を託すことに決めた。

そして、これがダメならもう父に相談して全てを終わらせる覚悟を決めたのだ。

そして、今日。

休みの期間中などにネットで仁の近況を検索していた茜は、中学生の仁の容姿も見たことがあった。無論、盗撮されたものである。

その写真が撮られた日時から一、二年経っていたものの、インターホンに映った仁を一見して本物だ、と確信したらしい。

想像だにできなかったことだが、茜は仁のファンガールだった。

「そんな暗い顔しないでよ。私的にはもし九条君が事件を解決できなくても、本物の九条君に会えたことだけでかなりのプラスだからさ。あとは全てリセットして、前に進んでいける気がするんだ」

それは困る、などといえるはずもなかった。

「……まあ、それは俺が失敗したときの話だ」

仁は目の奥に静かな怒りを讃え、続ける。

「軽はずみな約束は出来ないが——できるだけやってみよう」

茜に見送られ、二人は部屋を出た。

「あっ、ようやく出てきた。どうだった？」

二人は無言でエレベーターに向かい歩き出す。

「あ、ちよつと」

寧が明らかに不快という表情をしていたため、小声で、

「しようがない、事情を知らないんだから。わがままなお嬢様が登校拒否してるくらいに思ってるんだろう」

「……うん、わかってる」

それからはきままずい雰囲気で、朝倉教諭と三人、無言でエレベーターに乗った。

A棟を出ると、「じゃ、私はこれで」と朝倉教諭は足早に立ち去ろうとする。

その背中に仁は声をかけた。

「先生」

振り返った朝倉教諭に、

「次からはもう付き添い大丈夫です。部屋に行くときには寧についてきてもらうので」朝倉教諭は微妙な顔をして、「えーっと」と頭を掻く。

「そう言っていたと学長に言ってください。もちろんダメだというならそれでかまいま

せんで」

「……わかりました。それでは」

くるりと翻り、立ち去っていく朝倉教諭を見送ると、寧が言った。

「どこかで話そう」

短い協議の結果、二人は仁の部屋にやってきていた。

「まだ何もないが」

「そりゃ、今日来たばかりだもんね」

そんな話をしながら、二人は畳の部分に腰掛けた。リビングは奥の窓際だけ畳二畳分のスペースがあり、あとはフローリングになっている。

「それで、何か考えはあるの？」

「まあな」

そう言って、仁は備え付けのデスクトップPCを指さした。

「パソコン？」

仁は頷いて、

「ああ。ハッキングして証拠を掴もうと思う」

「ハッキング？」

寧は目をぱちくりさせて、

「出来るんだ？ このパソコンはインターネットには繋がってないけど」

「関係ない。むしろローカルネットのほうが範囲が狭くてやりやすい」

「へえ……」

よくわかっていなさそうな寧を横目に、仁は腕を組み考える。

茜はこの事件がポールダンスを踊らせたことの逆恨みによるものだと考えているようだったが、仁にはそうは思えなかった。

確かにポールダンスを生徒の前で踊らされて辱めを受けたという感覚は二人にあるだろうが、それでも最初はきちんと金を返していた。段々と怒りが膨れ上がったのだろうか？ 仮にそうだとしても——と、仁は思考を進める。

話を聞く限り、事件とその後の対応は綿密に練られた計画の元に動いているように思える。抜き打ち調査をくぐり抜けたことが、その最も重要な根拠だ。

これらを二人の犯人が自分たちだけでやってのけられるとは思えない。そのように頭が切れる人物が賭場で借金地獄に陥りあまつさえ強姦と恐喝の犯罪二連コンボでそれを解決しようなどと考えるだろうか？ ——実行するのが自分でないのならともかくとして。

二人に知恵を与えた者達がいると想定することに、それほど論理の飛躍があると仁は思わなかった。

そうであるならば、どのタイミングから事件に関与したにせよ、その人物も裁かれなければならぬと仁は思った。

そして、仁がもう一つ気になる点があった。それが賭場の存在である。教員達が手を出さない理由はわかった。しかし、生徒会は？

「なあ。松井の話にも出てきたけど、生徒会ってどのくらい権力があるんだ？」

「すごいよ。基本的に普通の学校の校長をはじめとした教員達が決めるようなことが大体ここでは生徒会の手にあるからね。例えば生徒の校則違反の証拠を掴んだら校則に則って処分出来るし。一応学長の承認がいることにはなってるみたいだけど、明らかに校則の範囲を出てる処分とかじゃない限り否認されることはないみたい」

「ふむ……じゃあ、賭場は？　なんで放任されてるかわかるか」

仁の問いに寧はうーんと考えるポーズをとって、

「私は他の生徒と交流が少ない方だからあんまり噂話とかは回ってこないんだけど」  
そう前置きした上で続けた。

「そんな私でも聞いたことがあるよ。——ねえ、松井さんが何回も試験を受けてないのに退学になってないのはどうしてだっけ？」

唐突に話が飛び混乱しつつ、仁は答える。

「そりゃ、父親がこの親会社の役員だからだが……」

言いながら、気がついた。

「なるほど。賭場の主催者もそうなのか」

「うん」

「で、名前は？」

「大岩巖君。松井さんのお父さんもかなり偉いみたいだけど、大岩君のお父さんはそれ以上って話だよ」

「……そうか」

「うん。でも、大岩君は今回の件には関係ないよね？」

仁はにやりと笑い、

「どうだろうな」

仁の反応が想定外だったのか、寧は困惑した様子で、

「えー？　それはまあ、犯人の二人が賭博で借金を背負ったところから全てが始まったわけだから、大元である賭場の主催者にも責任があるっていえなくもない……のかな？」

うーん、流石にちよつとこじつけが過ぎるような。もちろんそもそも校則違反かつ国の法律違反なのは間違いないけどさ」

仁はこれには何も答えず、右手を口元にやる考えるポーズを取った。

なるほど確かにその大岩とやらはこの学園で謂わば無法状態なのだろう。

だから学校における賭場の開催などという異常事態にもかかわらず、この学校で事実上最高権力者であるらしい生徒会も手を出せないのだろうか。

「気になるな……。1度、生徒会に凸して直接聞いてみるか」

「えー、関係ないと思うけどなあ。それより早くハッキングして証拠を集めた方がよくない？」

仁はまあまあと寧をなだめつつ言う。

「証拠は逃げないさ。いくら証拠を隠滅しようが、一度そこに存在したデータは復元できる。日付つきでな」

それに、と仁は付け加える。

「まだ初日だ。学長が提示した期限までは全然時間がある。もっと情報を集めてからの

ほうがいい」

なぜなら、ハッキングを行うにしても、集中的に調べるターゲットを定める必要があるからだ。全ての学生を均等に過去まで遡りつつ調べるのは不可能というのがその理由である。

「これはまだ単なる予想に過ぎないが、俺はこの事件には黒幕がいると見ている」

これは仁の単なるカンに過ぎない。二人に知恵を与えた者がいること自体は、殆ど間違いなだろうと仁は考えているが、その人物が黒幕である——例えば、強姦と恐喝によって借金をチャラにし、その後も継続的に金を巻き上げ続けること、それ自体を提案したのがその人物であるとか——というのは全くの根拠薄弱な推測だ。

「それが大岩君だと、仁君は思ってるんだ？」

「今の段階では全く確証はないがな」

「うーん？ 私にはさっぱりだけど……」

寧は全くピンときていないようだが、これがむしろ正常な反応だろう、と仁は思う。そして、その寧の考えが正しい可能性の方が現時点では高いのだ。

「確かにあまりいい噂は聞かないけど、何か大きな問題を起こしたって話も聞かないし……いやまあ、賭場を開いてること自体が大きな問題といえればそれはそうなんだけど」

仁はうなずき、

「その辺の事情も、生徒会のほうが詳しいだろう。とりあえず明日あたり行ってみるさ」

翌日、四月八日、火曜日の昼休み。

寧によれば、生徒会は昼休みにも誰かしらが交代で開けているらしい。

仁はチャイムが鳴った瞬間に立ち上がり、早速生徒会室へ向かうことにした。昼ご飯を食べていないが、それは後で考えることにした。最悪長引いたとしても一食抜くくらいだろうということはない。

大股で教室を出て行く仁の姿がまるで教室から逃げだしているかのように見えたのだろう、教室では小笑いが起きていた。それを背中に聞きながら、仁はスタスタと階段を目指す。階段を降り、一階に到着した。席を立ててからここまで二〇秒もかかっていない。

生徒会室は一階のL字の短い方の突き当たりにある。

角を曲がり生徒会室を視界に捉えたとき、仁は「へえ？」と素っ頓狂な声を出してしまった。

遠目に見てもわかった——生徒会室は、扉が重厚な金属製のもので、それ以外の壁の部分も金属だった。

近づくとも詳細がわかり、さらに驚きは増した。おそらく扉も壁も、最強の金属と呼ばれるタンングステン製である。何のために——？ と少し考え、すぐに得心がいった。

この学校では、大岩や松井のような特殊事例を除けば学長に続く最高権力は生徒会にあるらしい。生徒同士の諍いを仲裁するのも生徒会、校則を変更する権限も生徒会にある。まだこれが大人である教員によって行われるのであればなんとなく納得しやすい部分があるが、同じ生徒である生徒会役員に決められるというのは納得がいかないという生徒もい

ることだろう。その気持ちは学校に初めて通う仁にもなんとなく理解できた。

時には生徒会に対する反乱などもあったかもしれない。

その対策として、生徒会はこれほどに防御を固めたのではなからうか。

と、そんなことを考えていると、

「生徒会に何か用か」

振り返ると、見覚えのある顔があった。たった昨日、入学式で壇上に立っていた男。

「黒神会長、ですよ」

黒神忍。三年A組所属の生徒会長。少し長めの黒髪とスクエア型の黒眼鏡と一見目立たなそうな風貌だが、近づいてみると不思議な圧力を感じる。痩せ型で身長は一八〇程度だろうか。体型からして明らかに物理的な戦闘力はなさそうだが――。

「そうだが。そういうお前は、九条仁だな」

「黒神会長に認識されているとは、光栄です」

忍は鼻で笑い、

「心にもないことを言うな。それで、要件は？」

仁は少し考え、この人に余計な雑談や誤魔化しなどはかえって逆効果だろうと判断した。そして、単刀直入に尋ねる。

「……大岩巖先輩について話を聞きたいのですが」

すると忍の目がすつと鋭くなり、

「……入れ」

と、扉を解錠し、両開きの重そうな扉を押し開けた。

仁も後に続き、しっかりと扉を閉める。

生徒会室は、かなりの広さがあった。

部屋内にくくつもの戸締まりまで出来る細長の小部屋が並んでいるのは、生徒の相談に乗るためだろう。複数の相談者が訪れた際、お互いの話が聞こえては集中できない。とすれば防音性能もしっかりとしているのだろうな、と仁は推測した。

他には大型の壁掛けディスプレイや、最奥部の一番豪華なデスクにはディアルディスプレイなど、各生徒の部屋に備え付けのPCとはまた一段も二段もレベルが違うようだ。

「このPCはインターネットに繋がってるんですか」

忍は小さくかぶりを振り、

「この学校の学内におけるインターネット禁止のルールに例外はない。それは生徒会にもいえることだ」

忍はそう説明しながら、部屋中央部にある、役員が集合するときを使うのであろう長テーブルの一つに座った。そして、

「君も掛けたまえ」

「あ、はい」

仁は慌てて忍の向かいの席の椅子を引いた。

「それで？ 何故大岩の話を知りたい？ それから、それを何故生徒会に聞きに来た？」

忍の視線は、鋭く仁を射貫いている。元々の忍の性質もあるのだろうが、それ以上に仁が出した巖の名前に大きく反応を示しているように仁は思った。

「一つ目の質問ですが――現在私はとある問題を抱えています。これに関しては秘密保

持の関係から説明することが難しいのですが、ともかくその問題の解決策を模索していたところ、大岩先輩の存在にぶち当たりました。私は、私が現在抱える問題の根幹に大岩先輩がいる可能性があるかと踏んでいます。とはいっても、まだこれといった確証はないのですが。ですから、その確証に一步でも近づくため話を聞きに来た——これが答えです」

忍はうんともすんとも言わずに仁を見つめている。仁は間髪入れずに続ける。

「次に二つ目の質問についてですが、大岩先輩は賭場を度々主催していると聞きました。そして、生徒会の職務内容を伺うに、これは生徒会の調査対象だと判断しました。となればこれまでに様々な調査を行ってきたはずです。よって他の誰に聞くよりもまずは生徒会の方に話を聞くのが早いと判断しました」

「ふむ」

忍は二つ目の質問に対する回答の途中から目をつむって話を聞いていたが、仁が話を終えるとゆっくりと目を開き、右手人差し指で頭をコツコツと2度叩く仕草を見せた。

「大体話はわかった。私の問題と言ったが、大方学長が絡んでいるのだろう。そうでなければ入学から二日目でこれほどの情報を得ることも出来ないし、大岩が関わるような事件に巻き込まれることもありえない。学長はこのシステムを自分で作っておきながら、生徒会を信じず自ら動くことがあるからな」

「……」

仁は口をつぐんだ。寧に話をしたときはともかく、今や仁はこの問題の抱えるプライバシー度合いが極めて大きいと知ってしまったている。うかつなことは話せない。

「まあいいさ。あの学長が勝手なのはいつものことだ。巻き込まれたお前は災難だがな。しかし、大岩とはな……。学長は奴に触れようとは思っていないが……。まあいい。個人的には撤退を勧めたいところだが、そうもいかないんだろう？」

仁は無言で頷いた。

「だろうな。……で、大岩の何が聞きたい」

仁は殆ど具体的な話をしなかったため、忍が情報をくれる可能性は低いと考えていた。しかし予想に反して忍は情報提供に前向きな姿勢を示した。

「……なんだその顔は。俺が情報を出し渋ると思ったか？ もちろん出せない情報はあがるが、出せる情報もある。お前の聞きたいこと次第だ」

「ありがとうございます」

仁は軽く頭を下げ、

「では、早速。生徒会は大岩を調査してきた、これは間違いありませんか」

「ああ」

簡潔な答え。仁は続けた。

「しかし、今も大岩先輩は特に処分されることなく活動を続けているようです。それは、生徒会が決定的な証拠を手に入れられていないからですか？ それとも大岩先輩の父の力故に手が出せないということですか」

この質問に、しばらく忍は押し黙った。

「答えられなければ質問を変えます——」

だが、仁の言葉を片手を挙げて制し、

「両方だ」



そういう忍の顔には、悔しさが現れていた。

「奴は簡単に証拠を残すような真似をしない。賭場を開催する際は監視カメラがない場所を選ぶのはもちろん、参加希望者のスマホは全て没収し部屋に戻ってから送り届けられるシステムだ。よって参加者が持つ証拠は単なる一証言にすぎなく、物的証拠は何もないということになる。一方で、奴らは参加者を撮影している。それはつまり圧倒的優位に立っているということだ。それに、大岩父は奴に激甘と聞いている。お前の考えている通り、この点もやっかいだ。いや、むしろこれが一番のやっかいごとかもしれない」

仁は後半の情報に気を取られそうになったが、順番に整理していこうと自身を諫め、尋ねた。

「圧倒的優位というのは、大岩先輩をはじめとした主催サイドだけが、参加者を脅す材料を持っているからですか？」

「そうだ」

「しかし、賭場の映像や写真は主催サイドに対してもダメージのある、諸刃の剣なのではないですか」

「確かにそうだ。しかし、映像や写真に写るのは参加者だけだからな。仮に奴らの誰かが映ったとしても、そんなものはいくらでも編集で消すことが出来る。誰もが賭場の主催は大岩だと知っていると看做しても、その映像には映っていない。よってその映像から処分を下そうとすれば、対象は映像に映る賭博参加者のみということになる」

なるほど、よく考えられている、と仁は思った。

巖は頭が切れ用意周到なタイプのようなのだ。

そしてこれは、仁が考える黒幕の条件に当てはまっている。

「同時に――、もし賭場の現場に大岩の姿を映した映像など決定的な証拠が出たとしても。その映像では奴が自身を賭場の主催だと認める発言も残っていると看做する。それを学校サイドに提出したらどうなるか？ ……全く学園サイドが動かないということはないだろう。いくらなんでも賭博は問題として大きすぎる。だが同時に、大岩はお前が知る通りこの学園の存続をその一存で決められる立場にあり、かつ息子に異常に甘い。つまり、仮に大岩を退学処分に出たとしても、そのことに不満をもった大岩の父親が暴れば、この学園は廃校に追い込まれる可能性が高い。とすれば学長は学園を存続させるために、大岩に對し停学処分なんかで茶を濁そうとするはずだ」

仁は頭を抱えたい気持ち在必死に押さえ、つとめて平静を装い話を聞いていた。

賭場の主催者が茜と同じく学園を崩壊させる力を持つと聞いたときから、嫌な予感を感じていた。

この問題、依頼主は学長であるが、問題を深掘りしようとした途端に学長が味方でなくなる可能性を孕んでいる。

それに、その場合――おそらく学長は実行犯である二人の裏にいる巖の存在に気づいているのではないか。その上で、実行犯の二人のみを断罪するための証拠を用意し、退学とすることで表面上事件を解決したことにして、茜と巖の二人を網渡りに共存させようとしているのだ。

「最後に一つだけ。大岩先輩は賭場の開催以外に何か問題行動は見られますか？」

「細々としたことならいくらでもある。まず奴は賭場以外にも金貸しで儲けている。こ

れ自体はここでは問題ないのだが、取り立て方法に問題があると聞いている。これまたスマホを取り上げて監視カメラ外でやるから証拠は被害者の証言以外にないのだがな。あとは、奴は高校ボクシングで全国大会に出るような奴だ。その武力を武器に、本来生徒会案件の生徒同士の諍いを奴が片方から依頼を受けて仲裁に入ることがあるそうだ。仲裁と言っても片方から金をもらっているから当然公平なものではない。とまあ、ぱっと出てくるのはそんなところだ」

そこまで言うてから、何かを思い出したように忍は「いや……」と呟いた。

「あと一つ、大きな事件があった。これはいつ頃だったか、奴がスパークリングと称してボクシング部のメンバーを全員意識不明まで追い込んだという情報が入った。事実当時のボクシング部メンバーは巖を除いて学園から姿を消した。短い生徒で数日、長い生徒で数ヶ月単位でだ。当然生徒会も事実関係の調査に乗り出したが、学園側の介入により操作は強制中断となった。今でも説明に來た職員の言葉を一字一句覚えてる——『本案件は部活動中に起きた不幸な事故であり、当人も大変反省しております。また、当事者全員が大岩君に対する処罰感情がないことから、学園としては大岩君を処罰することに反対であります』だと。当然我々生徒会としては学園の横やりを抗議したが、それ以上はどうしようもなかった。この学園では生徒会が最高権力者だとか言われるが、それはなんでもない平時の話だ。その気になれば大人達はいくらでも俺たちを捻じ伏せることが出来る」

はあ、と忍はため息をつき、

「まあ、この件は特殊だから除くとしてだ。我々生徒会は奴からの被害報告を多数受けていて、調査も進めてきた。だが、中々物的証拠が取れず処分を下すに至らない。ここに警察の鑑識はないから、指紋なんかは採れないしな。さらに、仮に証拠を掴めたとして、先ほど説明したような理由で退学処分とすることは難しい。我々としても手を焼いているところだ」

そう告げる忍の表情は、彼の無念を讃えていた。

「……わかりました。聞きたいことは聞きました。お時間頂きありがとうございます」  
そう言うて仁は立ち上がり、深々と礼をした。今度は本心からの行動だった。

立ち去ろうとする仁の背中一言、

「奴には気をつける。手を出すなどは言わんが、もしそうするつもりがあるのなら、それ相応の覚悟をしておけ。同志として応援だけはしてやろう」

仁は振り返り、無言で再び深い礼をした後、今度こそ生徒会室を出た。

廊下を歩きながら考える。

忍から聞き及んだ大岩巖という人間についての情報を整理していく。

考えるだに、これほどフィクサーに相応しい人物もいまい。

しかし——と仁は思う。

今になって考えると、茜の事件には、極めて考え抜かれた対応と評価できる部分と少々安直だと言わざるを得ない部分が混在している。

前者としては、抜き打ち調査対策が代表例であり、他にも監視カメラのない場所を選びカメラを取り上げたりと証拠を残さないために細心の注意を払っている点が挙げられる。

後者に関しては、そもそも仮にそうした知的で合理的な人間が、実行犯ではないとはいえレイプなどという重罪に関与しようとするのだろうか、という疑問が浮かぶ。

しかも、その相手というのが茜というのも極めて不自然だ。偶然うまくいっているとはいえ、茜は巖と並ぶ、学園に対する権力を持つ者の娘である。他にもっと適当な相手がいればたはずだ。

さらには、動画の噂をわざわざ流した点も疑問だ。これに関しては、茜に対する報復の一環と解釈出来る——事実これが決定打となり茜は不登校を選択することになった——ものの、仮にフィクサーがいるならばこのようなりスクを取ることを許容しないのではないだろうか。

やはり黒幕などおらず、単にその男子生徒二人の頭が切れるだけなのだろうか。

仁は自信を失いつつあった。

だがそれでも、仁の感は、フィクサーはいると言っていた。

——考える。仁は自分にそう命じた。父が与えた、世界最高峰の頭脳に。

賭場で借金を作り、それを同級生から借りた金で返し、最初はきちんと返していたが途中から返済が滞りだした。ここまでで巖【仮】の陰は見えるか？

たとえば——例えばだが、と仁は考える。

もし仮に、賭場で借金を作った相手が巖かその一味だったとしたら。

返済を月の生活費全額という酷い設定にしたのも、さもあつた感じがする。

そして、返済で生活に苦しむ二人に、別の生徒から金を借りると言うアイデアを授けるというのもありそうだ。何故ならおそらく二人は胴元からしたらいいカモだからだ。

次の借金相手、即ち茜から温情で多少残しておいてもらった生活費を、もし仮にまたギャンブルにつき込んだとしたら？

かつとなつて生活費を茜に送金せず全額ギャンブルにつき込んだとしたら？

茜への借金の返済が滞るのも当然だ。

ここまで、巖の陰を見ることは容易である。

しかし、最後、強姦という大罪行為に及んだ——これが違和感の決定的な正体であった。

仮にこれが単なる犯人二人の逆ギレであり犯行自体に巖が関わっていないとして、後処理に協力するだろうか。仁の中の巖は、しない——はずだった。

忍の最後の話を聞くまでは。

巖が起こしたボクシング部での暴行事件。これは、それまで聞いてきた巖の行動とは乖離がある。揉み消せる確信はあったのだろうか、それでもそもそもみ消しが必要な事件を他に巖は起こしていない。少なくとも忍の話では。

どうもうまいこと情報が完結しない。

何か、足りないピースがある気がする。

巖について、知らない何かが。

仁はそこまで考えて、スマホを取り出した。

四月九日、水曜日。その放課後。

仁がその扉を開けると、二人の男子生徒が何かラップ調の曲を歌っているところだった。

「チツ」

片割れが舌打ちをして、リモコンの演奏終了ボタンを押す。

二人はマイクをソファに投げ捨て、片方はそのままどすんと音を立て座った。立ったままの方が、「おい、スマホ出せ」と手を突き出した。

おとなしく仁が渡すと、その男——金髪オールバックのオールドスタイルヤンキー風の生徒が「他に隠し持ってたねえだろうな」と仁の体をまさぐりだした。

好きにさせていると、やがて何も隠してはいないと判断したのか、

「よし、座れ」

ともう一人——強めのパーマが掛かった金髪に近い茶髪の、鼻ピアスと口ピアスが入ったこちらもヤンキー風の生徒が、組んだ脚をローテーブルに乗せる格好で座っている窓側の席、その向かいの席を指さした。

仁が席に腰掛けると、

「知ってるぜ、九条仁。一時期よくテレビでてたよなあ。天下の改造人間様だ。クラスじゃ話題の中心だ」

オールバックの男、一年D組の田中渡が嫌な笑みを浮かべながら言う。

「俺のクラスも同じだな。全く、入学数日でこれか、人気者は辛いねえ」

ピアスの男、一年C組郡道一は言葉とは裏腹に鋭い目つきで仁を見据えている。

——二人には昨日のうちに、わざわざ二人だけを招待したチャットルームにて連絡を取っていた。その目的は——。

仁が黙っていると、

「で？ 松井の動画について知りたいんだって？」

渡がぐつとこちらに体を寄越し、肘をローテーブルにつけ下から仁の顔を見上げる形でそう尋ねてくる。

「ああ。そうだ」

仁はため口で答える。一と渡は二年生だが、敬意を払う必要性を仁は認めなかった。

「入学三日目の野郎が知るには早え情報だぜ。ま、流石は天下の改造人間様ってどこか？

——それで？ 無駄な正義感でも発動したってか？」

「俺のことはどうでもいい。俺が聞きたいのは、噂の真偽についてだけだ」

「はは、大分調子のってんな。……まあいいや、噂って何聞いたわけ？」

渡の問いに、仁は一瞬考える。仁は一度堂々と茜の部屋を訪ねていて、それを一人の生徒に見られている。すでに噂が出回っていてもおかしくはないのだが、どうも様子を見るに、少なくともこの二人にまではまだ情報が行き渡ってはいないようだ。学年の違いなども要因だろう。あるいは、あの生徒がとも口が堅く、学校中で噂となっている仁に関する面白げなトピックについて周囲に共有しなかったという可能性もある。いずれにしてもこれは好材料である。となれば、この利を生かすために、この場で茜との関係性を疑われる訳にはいかない。もしそれがバレれば、この男達から情報を引き出すことは難しくなるからだ。となれば、ここで話すのは、噂として広く出回っている範囲に止めなくてはならない。

「お前達が松井茜をレイプした動画が存在するという噂だ」

「心外だな。それは違うぜ九条」

一は不敵な笑みを浮かべている。

「いいか、せっかくだから教えてやる。真実はこうだ。俺はアイツと付き合っていた。そこで、プレイの一環としてあの動画を撮ったのさ。一見するとレイプしている様に見える動画を。レイプもののAVみたいなものだ。あれだって本当に非合意なわけじゃないだろ？ 渡にもプレイに参加してもらった、だってよ、3Pって懂れるだろ？ 俺にはN TLの趣味もあるしな」

「ところがあの野郎、一と別れた途端に学長に、俺たちにレイプされたと訴えたんだ。ひでえ話だろ？ あの動画が証拠になると思ったんだろうな。その情報を知った俺たちは大慌てで動画を他の信頼出来る奴に送り、自分らの動画は削除した。これでなんとか冤罪は回避できたわけだが……やられっぱなしってのもどうなんって一と話してな。動画の噂を流したんだ。ここがキモで、うち何人かには本当に動画を見せた。送らなきゃ今のお前みたく変に正義感を発揮した奴に証拠として提出されることもないからな。冤罪ほどひでえもんはこの世にないからよ、流石に気をつけたぜ」

いけしゃあしゃあと世迷い言をのたまう二人を、仁は感情の死んだ目で見つめていた。

世の中にはこれほどの醜悪が存在するのか、と仁は思った。

そして、いや、それは嘘だ、と仁は前言を撤回した。

知らないはずがない。この世の中が醜悪で満ち満ちていることなど。ニュースを見ていれば小学生でもわかることだ。

しかし普段人間は、そういった情報を目にしても、自分に近い人が被害者でない限りはある種のフィルターを通して情報を摂取する。なぜならば、全てを全身で受け止めていては到底精神が持たないからだ。

そして今、身近な人間が被害者となっていて、それが故に仁は怒っている。

そのことを、仁は酷い自己欺瞞だと思った。

これに怒るのならば、世の中で怒っている全ての不正不実に対して全身全霊を持って怒るのが筋だと思った。

そして、それでいいと思った。

自己欺瞞で何が悪い。

どうせ、全ては救えないのだ。

人は、世の中の悲しみの総量に対して流せる涙が少なすぎる。

「そうか、話は大体わかった」

「はは、納得してもらえたようで何よりだ。なあ渡」

「ああ、このクソ忙しい中時間を作った甲斐があるってなもんだ」

仁は今すぐにでもこの二人に殴りかかりたい衝動を必死に押し殺しつつ、努めて冷静に振る舞う。なぜならば、まだ一番重要なことを聞いていない。

「まあな。ところで、もう一つだけ聞いていいか」

「お前らは、大岩巖とどういう関係だ？」

途端に二人の表情から余裕が消えた。

「……何を聞いた？ 誰から聞いたんだ」

ビンゴだ、と仁は思った。

これはある種の賭けだった。

もし二人が千両役者であったならば、仁にも見分けられないようにすつとぼけられて終

わりだったろう。仁は巖の関連性を確かめられず、その上で今回の件を二人は巖に報告する。向こうが一步先に行っていたことになる。

だが、その可能性は限りなく低いと仁は踏んでいた。

なぜならば、こいつらは賭場で借金を作るような計画性のない馬鹿共なのだから。

馬鹿に演技など出来ない。高等なものであればなおさらだ。

「さて。そろそろおいとましようかな」

仁が立ち上がると、

「まてやコラ！ 質問に答えろボケェ！」

一がローテーブルの上上がり、仁の胸ぐらを掴んだ。ドリンクが音を立てて倒れているがお構いなしである。

と、そこで。

ガチャリ、扉が開いた。

姿を現したのは、身長一九〇はあるかという長身に、体幅一メートルに迫る巨漢。それでいてけつして太ってはおらず、全身の筋肉が躍動しているのが服の上からでもわかる。間違いない。写真で見た大岩巖、その張本人だ。

仁は笑みを堪えきれなかった。

これは巖が二人の裏にいる決定的な証拠だ。証拠が靴を履いてこちらまで歩いてきたのだ。これを笑わずにいられるだろうか。

「てめえら勝手に何やってんだ？ ああ？」

「大岩さん!」

二人はビクツと体を揺らし、仁を掴む一の手も離れた。

「いや、えっと、その……」

さっきまでの威勢はどこへやら、縮み上がっている一と渡は一步、二歩と後ずさりした。後方の一はL字の短いほうのソファに脚が絡んで前方に体勢を崩し、渡を両手で押してなんとか勢いを殺すと、壁にもたれかかり、そのままとんと座った。

渡は巖の前までトットツと押し出され、巖の体を手について止まると、無情にも片手で振り払われた。力感をまるで感じない、纏わり付く蚊を振り払うかのような一撃であったが、想像を絶する威力があったようである。渡は一度も地に足をつけることなく座った状態の一に激突し、さらには頭を強く壁にぶつけてへなへなど座り込み、地べたに手をついた。すぐには立ち上がれなそうだ。もしかしたら目が回っているのかもしれない。一方のすごい勢いで渡に衝突された一は、青い顔をしながらも正気を保っているようだ。

「てめえらが九条に呼び出されたと言ってノコノコ待ち合わせ場所に向かっていたと聞いて、頭抱えたぜ。てめえら脳みそついてねえんか？ ああ？」

「あ、いえ、そのお……」

かろうじて正気を保つ一が、返答にならない返答を返す。

「えっと、その、あの……ソイツからチャットが飛んできまして、今日は巖さん練習の日でしたから、自分たちで片付けようって渡と相談しまして」

「そのとんちんかんな気遣いのせいで面倒ごとを増やしてのがわかんねえのか？ 全く、これだから馬鹿は嫌いだ」

「……」

悄然と黙りこくってしまった一に興味を失ったのか、巖は仁に視線を向けた。

「なあ、九条。なんだかこそそと嗅ぎ回ってるみたいだな。誰の指示だ？」

「答える義理はないな」

「ほう、そうか。いい度胸だ」

巖は右の手で握りこぶしを作り、

「その度胸だけは買ってやるよ——齒ア食いしばれ」

顔を狙った右ストレート。

仁は両腕でガードしたが、壁にたたきつけられる。

反動で前に倒れそうになるところをなんとか踏みとどまり、仁は言った。

「なんだ。ヘビィ級の全国選手もこんなもんか」

おでこから血を流しながらそんなことを言う仁に、巖はニヤと笑みを浮かべた。

「はは、中々やるな。学内で俺の右ストレートを食らって立ってたのはてめえだけだ。

褒めてやろう。流石は改造人間だ。——だが、次はない」

二度目はジャブからの右ストレート。ジャブで壁に叩き付けられ殺しきれない反動で巖のほうへ向かう体に、右ストレート。

これもなんとか堪え立ち続ける仁に、巖は口が張り裂けんばかりの笑みを浮かべた。

「はっはっは。何が次はないって？ このサイズの奴に2度まともなパンチ食らわせて

ダウンすらとれねえか。才能ってのは残酷だねえ」

仁は自分が必要のない煽りを繰り返していることに気がついていた。

それでいて、やめる気はなかった。

今の仁に出来る最大限の反撃がこれだからだ。

仁の言葉に巖は笑みを引っ込め、真顔で言った。

「殺してやろうか」

そこからは、壮絶の一言だった。

仁は初めてサンドバックと言う言葉の意味を体で理解した。

そして数分後。

「な、なあ……」

「ああ。……やばくね？」

意識が戻った渡と茫然自失状態だった一は、顔を見合わせて、

「巖さん！ ホントに人殺しになっちゃいますよ！」

ピクリ、と巖は拳を止めた。

そして、「やっぱ馬鹿だなてめえら」とため息をついた。

「興ざめだ。行くぞ」

「いや、でも！ アイツほっといて大丈夫ですか!？」

一が焦った様子で、扉を開け放ち出て行く巖の背中を追いかける。

部屋からいくらか離れても、巖の声は聞き取れた。

「おめえの目は節穴か？ その出来損ないの目で何を見てたんだ。アイツが1度でも倒れたか？ アイツア耐久力だけはバケモンだ。サンドバッグとしてボクシング部に欲しいくらいだぜ」

足音が去るのを確認すると、仁は扉を閉めた。

直後、「あ、大丈夫ですか？」とドア越しに声が聞こえた。店員か他の利用客かといったところか。おそらくずっと前から音は聞こえていたのだろうが、聞こえていたからこそ誰もその火中に飛び込む者はいなかったのだろう。

賢明な判断だ、と仁は思った。関係のない人間を巻き込みたくはない。

「ええ、大丈夫ですよ」

「……ええと、開けてもよろしいですか？」

「あ、今は勘弁してください。ちょっと吐いちゃって」

「それでしたら私共で清掃いたしますが」

「ああいや、吐いたの見られるの無理なんですよ。なのでお気になさらず」

「———そうですか。店員の手がご入り用でしたらなんなりと」

そう言い残し店員は去って行った。

「さてと。これ、どうしたものかな」

床やソファ、テーブルには血が飛び散っている。今でも仁のおでこや頭部からの出血が顔を伝い、ポタポタとしたり落ちている。

テーブルに置かれた三つのウェットティッシュでは全く追いつかない血量だ。

今回の件で、巖が二人のバックにいることが判明した。常日頃から巖のやり方を見ているのなら、恐らくカラオケでは入店時に名前を偽ったことだろう。となれば暴行の痕跡が認められても犯人をそうと断定する証拠がない。このカラオケには監視カメラが一切ないことは把握済みだ。何故なら茜の事件があったのが他ならぬこのカラオケなのだから。今回も場所は二人が提案してきた。

監視カメラがない———そもそもこれ自体がおかしい。普通カラオケの個室には監視カメラがあるものだ。これは個室で不適切な行為が行われるのを未然に防ぐ目的がある。それ以外にも、個室というのは得てして何か悪い目的に利用されがちである。ラブホテルのような特殊な例を除いて、個室に監視カメラは必要なのだ。しかし、ここにはそれがない。学生のためのものだから、というのには理由にならないだろう、と仁は考える。

もしかしたらこのカラオケの経営者と巖は何らかの利害関係にある、あるいは巖に買収されているのかもしれない。

そうだとしたら、茜の事件がカラオケで行われたこと、今回巖が気持ちよく仁をサンドバックにしたこと———これらに合点がいく。要するに、カラオケで起きた事件は巖にとつていくらでもみ消せるということだ。

ともかく、今回の件が立件できないことは心底どうでもよかった。

仁にしてみれば、こんなことで奴らが仮に何らかの処分を受けたとしても意味はない。

重要なのは、茜の一件を立証し奴らを退学に追い込むことだ。

幸運なことに、巖はノコノコ二人の元に現れ、自ら関係性を示してくれた。

やはり、巖は茜の件に関係している可能性が高い。

———しかし、あと一步。

胸につかえたこの違和感。

仁をあれほど警戒し、リスクとリターンの計算に余念がなさそうな巖。

その巖が、おそらく学内における犯罪行為として殺人の次に重いであろう強姦行為の教唆あるいは事後処理への協力をしたこと。しかもその対象が学内で巖の次に力を持つ茜と



いう不合理。

さらには、証拠になり得る一と渡が映った映像の噂をわざわざ流すという暴挙を二人に許可し、あまつさえ未だに動画をどこかしらに残していること。

確かに動画に直接巖は映っていないものの、証拠の映像がもし何らかのアクションにより表に出れば、二人は罪に問われるだろう。その際それがそういうプレイだったという言い訳は通用しない。そうして退学の危機に瀕した二人は、道連れとばかりに巖のことを話すかもしれない。それだけでは物的証拠ではないため処分には至らないだろうが、それでも巖の慎重な性格を鑑みるにこのようなリスクを放置するとはどうしても仁には思えないのだ。

——と、そこで仁は一つの着想を得た。

何か、茜の事件に——言い換えれば茜を陥れ苦しめることに、今の仁には思いつかないようなメリットが——リスクを抱えてまでそうするに値すると考える理由が巖にあるとしたら？

人間は、どこまで知的で冷静な人間でも、あらゆる場面で一〇〇%合理的ではありえない。それは、先ほど不必要に巖を煽り散らかした仁自身が身をもって証明している。

仁はすぐに放り捨てられていた——渡が巖に払われた拍子に落としたのだろう——スマホを拾い上げ、ポータルサイトを開き、寧にチャットを送った。

——学内一の事情通って誰か知ってるか？

四月一〇日、木曜日。早朝。A棟を出てすぐのモニュメントのあたりで仁は寧と合流した。無論登校のためである。

「えっ、それどうしたの」

寧は青ざめさせて、開口一番そういった。

「いや、ちよっと階段で転んでな。すってんころりんってな、ハハハ」

仁はおどけて面白いわけをしたが、むしろ逆効果だったかもしれないと仁は思った。

「嘘だ！ 何があったの、誰にやられたの！ 一人？ 相手は武器持ってたの？ それとも集団？ 顔は覚えてる!？」

すごい形相で捲し立てる寧を、仁はまあまあとなだめた。

——あの後仁はカラオケを後にし、医務室で手当を受けた。怪我の理由についてしっかりと聞かれたが、階段で転んだの一点張りで乗り切りつつ。養護教諭も最後まで納得してはなさそうだったが、最後は「もう怪我しないようにね」と送り出してくれた。

しかし、寧に同じ手は通用しなさそうだと仁は苦笑した。

「流石に信じないか……」

「当たり前でしょ。ねえ教えて、誰にやられたの」

「それはまだ言えないな。ちよっと昨日一悶着あったとだけ言っておこう」

「……まだ？ いつか話してくれるの？」

「ああ、近いうちに話せると思う」

寧の怒りが収まるまでは、間違っても奴の名前など出せないな、と仁は思った。

「ならいいけど。本当に、無理はしないで。約束できる？」

「善処する」

「それじゃダメ、約束して。それじゃなきゃ、もうこんな学校二人でやめちゃおう？ 私、こんなことになるなんて思ってた。ごめんね、私の考えが甘かったの。学長が仁君に関する話をするたびに否定的なことを言ってる生徒がいるのは私も知ってた。けど、それって芸能人にあれこれいう一般人みたいな感じで、実際に手を出すなんて思ってた。なかったんだ」

どうも寧は仁を怪我させたのアンチ仁と言うべき連中であると誤解しているようだ。そして、その誤解を正す必要もない。巖の件を正直に話せば、茜の件から撤退しようというだろうから。それが退学を意味するとしても。仁にまるでその気はない。退学が嫌なのではない。寧さえ納得するなら、仁はそもそも学生をする必要などないのだ。

——いや、それは嘘だ、と仁は心の中で自嘲気味に笑った。やはり仁も、寧との学生生活は惜しい。まだ何もおよそ青春らしい何かは経験してないが、ただ授業を受けるだけでも仁には新鮮で、同じ階に寧がいて、まさかのファンガルである茜もいて。そんな平凡極まりない日常が、これまで望まない非凡な生活を送ってきた仁にとって、惜しくないはずがないのだ。

ただ、茜の件から撤退する気がさらさらなのは、学校に残るためではない。無論それがないとは言わないが——そもそも最初はそのためだけに首を突っ込んだのだから——、今となっては罪人を裁き茜の無念を晴らすことが主目的である。

だからこそ、巖を放置するわけにはいかないのだ。

それが元の目的に反する、学園廃校への道だったとしても。

「わかった。もう心配させるような真似はしない。約束する」

「……本当？ それって仁君に選べることかな？ 何か対策とかあるの？」

「まあ見ててくれ。次に生傷が増えてたら、寧の言うとおりの大人しく退学するさ。そして寧もついてきてくれるんだっか？」

「うん。どこまでもついていくよ。もう放さない」

そう言っただけで涙ぐむ寧を、仁は心の底から愛おしく思った。

自分のことをこれほど大切に思ってくれる人がいる。

それだけで、こんなにも力が湧いてくるものだと、仁は知らなかった。

寧にこれでもかと釘を刺された、その日の放課後。

寧に調べてもらった学内一の情報通。それは、二年D組田中健二朗であった。

そして今、仁はその健次郎に会いに向かっている最中であった。

高等科校舎の五階は少数が部室となっているが、それ以外の殆どの教室が予備として現在には使用されていない。その少数の部活も、昼休みには活動していないようだ。

聞こえてくるのは下階層からかすかに届く人の声だけで、殆ど静寂に包まれている。

手前から手芸部、写真部、弁論部の部室があって、その次からプレートは掛かっていなかった。待ち合わせの場所は、この最初の未使用教室だった。

コンコンと二度ノックすると、コツコツと机を叩くような音が聞こえた。これは、健次郎が提示してきた入室時の合図だった。

扉を開けると、健次郎と思しき人物が最前列窓際の席に正面を向いて座っているのがみえた。

仁は教室に入ると後ろ手で扉を閉め、男の元に向かっていった。

隣の席の椅子を引き、座る。ここまで健次郎は一言も発していない。よほど仁との接触が周囲にばれるのを警戒していると見えた。

これほど警戒している健次郎と会う約束を、なぜ仁は取り付けられたのか。

それは、仁の提示した条件が魅力的だったからだろう。

仁は自らに残された東PAYの残高その全額を、話を聞かせてもらおう対価として提示した。巖の名前を出すと断られる可能性が高いと考えた仁は聞きたい話については当日話すとして譲らなかったが、その代わりもし当日健次郎が仁の聞きたい話について知らなかったり、知ってはいるがどうしても話せない内容だったとしても、変わりなく対価は支払うとした。

若者はみな金に飢えている、といえれば言い過ぎかもしれないが、多くの、と形容詞をつければ主語がでかいと指摘されることもないだろう。

その、多くの若者に健次郎が該当していること。

これが、仁の賭けだった。

と、そこで健次郎がようやく仁のほうを向き、ギョツとした顔をする。

「どうしたんだい、その怪我は」

「ちよつと階段で転びまして」

「……まあ何も言うまいが、休んでいなくて大丈夫なのかい」

確かに昨日は寝るまで頭痛に悩まされた仁であったが、起きたらすっきりなくなっていた。後は切り傷や打撲の箇所がたまにじりじりと痛む程度で、日常生活に支障はない。

——今ばかりは獄中の父に感謝しなくては、と仁は思った。

仁のこのタフネスは、間違いなく斎郷による遺伝子操作によるものだからだ。

「そうかい。流石はあ、九条仁といったところかな。それにしても……。全く、この世の中のくだらない人間のなんと多いことかな」

どうも健次郎も寧と同じ勘違いしていそうであった。

「それで、聞きたいことは？」

「はい。大岩巖先輩について話を聞きたいのですが」

瞬間、健次郎は顔を引きつらせた。周囲をさつと見渡し、仁に顔を近づける。

「いいかい、その名前を出すならよほど慎重を期すべきだ。これは僕のためでもあるが、君自身のためでもある」

もう遅いんだよなあ、と仁は苦笑した。昨日の一件で巖が仁をどう判断したかはわからない——存外与しやすい相手と思ったかもしれないし、九条仁という名を重要視して警戒度は高いままかもしれない。

前者であればありがたい、と仁は思った。そのために仁はあの場でサンドバッグに徹したのだから。

仁の表情をどう解釈したのか、健次郎は続ける。

「過剰反応に見えるかい？ まだ君は入学して間もないから知らないのも無理はないさ。いや、それどころか中等科からの学生でさえ、あの人について殆ど知らない生徒も多いんだ。しかし、僕は情報通だからね。あの人についても、それなりに情報を持っている。そして、それが故に睨まれてもいるわけだ。とまあそんなわけだね、その話題を出すときは他の生徒以上に気をつける必要があるのさ」

健次郎の小声に、仁は無言の頷きで返した。

この様子を見るに、仁が巖の名前を出してもなお、仁の怪我は巖によるものではなく、学内のアンチ九条仁勢力によるものだと思っっているようだ。学内一の情報通の健次郎がある。

この事実は、仁の巖像を強力に肯定するものだ。

やはり巖は軽々しく暴力など振るう人間ではない。

危険人物ではあるが、その危険とは巖の暴力的行為そのものではなく、どちらかと言えば暴力を背景とした脅迫、強請りなどなのではないか。弱みを握られたら終わり、骨の髄までしゃぶられる。

「それで？ あの人についてと言っても範囲が広すぎる。具体的には何が聞きたいんだい」

仁は努めて小声で、

「大岩先輩と松井茜さんの関係について何か知っていることがあれば教えてください」

「松井茜——ああ、動画の……じゃない、不登校の、あの。そういえば、君が朝倉先生と類地寧君と三人で松井君の部屋を訪ねたという噂を聞いたな」

これには仁も顔を引きつらせる。流石は情報通といったところか。昨日の段階で二年の一と渡には伝わっていなかった情報だが、同じく二年の健次郎にはもう伝わっているようだ。改めて早めに一と渡にコンタクトを取っておいてよかった、と仁は思った。巖に茜の部屋訪問の噂が届いていたら、巖から仁警戒令が発せられていた可能性が高かった。

「ふむ？ 不登校の松井茜の部屋を訪ねた君が、今度はあの人の情報を欲しがっている……あ」

何かに気づいたように、健次郎はぼんと手を叩く。

「松井茜の不登校に、あの人が関わっている？ どんなふう——動画？」

危うく真相にたどり着きそうになっている健次郎に、仁はあわててかぶりを振った。

「何か色々と飛躍して考えてるみたいですが——」

仁の言葉を右手を差し出して押しとどめ、健次郎は真相にさらに迫っていく。

「例の動画は田中渡と郡道一によるものだけけど、その裏ではあの人が手を引いていた……？ 二人はある時期からあの人の子分をしているから……ふむ、ありえる」

「えっと、あのー。田中先輩？ おーい」

仁は健次郎に声をかけながら、健次郎の顔の前で手を振ってみたりした。しかし、仁の必死の努力もむなしく、一人腕組みをして考え込んでしまう健次郎。

しばらくして、健次郎はおもむろに目を開けると、

「君は大変な事件に首を突っ込んでいるんだね……」

心から哀れむような表情で、そんなことを言ってくる。

「何か勘違いしてませんか？ 別にそんな大それた話じゃ——」

健次郎は首をゆっくり振って、

「その怪我も、あの人にやられたのだろう？」

仁は否定しようとして、そうしなかった。

「どうしてそう思うんですか？」

健次郎はさっきこの怪我をアンチ集団によるものと推測していた。何故それが変化したのか。それが知りたかった。

「その前に、先ほどの問いに答えよう。あの人と松井茜の関係だ。私の情報では、あの人は松井君を彼女にしようとして失敗している」

仁は目を見開いた。

「振られたってことですか」

「そうだね。あの人のことだから、様々な手を尽くしたようだが、松井茜のお気には召さなかったようだ。その後しばらくは荒れていて、ボクシング部の生徒がスパークリングと称して悉く病院送りになる事件もあったそうだ。まあ、あの人はこの学園における最高権力者といっても過言ではないからね。片手間でもみ消して活動停止処分にすんならなかつたようだけれど」

ボクシング部の件は忍も話していたが、そういう背景があったという話はなかった。こればかりは情報屋独自の視点というか、情報のつなげ方だろう、と仁は思った。生徒会が誰を振った振られたという情報は、直接その二人に問題が生じない限り気にもとめないだろうからだ。

と、そこで、仁はこれまで抱えていたあらゆる疑問、謎、違和感——その全てが氷解するような感覚を覚えた。

「なるほど……：そうだったのか」

「わかったみたいだね。なら、保留にしていた質問への答えは必要ないかな？」

「はい。どうも、ありがとうございます」

そう言っただち上がると、仁はスマホを取り出し東PAYを開いた。

送金の項目をタップすると、まず学年を選択する画面が表示される。二年を選択し、次にD組を選択する。あとは四〇人のリストの中から田中健次郎の名前を探し、送金する額を入力して確定すれば送金完了だ。

ピロロンと音がして、健次郎はポケットからスマホを取り出す。通知画面に入金の知らせが届いていたのだろう、「確かに。しかし今月の生活は大丈夫なのかい」と立ち上がりながら健次郎は言った。

「どうにでもなります。このシステムなら飢え死にすることはないですし」

「そうかい。じゃあ、いこうか」

二人は並んで教室後方の扉に向かって歩いた。

仁が扉に手をかけようとしたところで、健次郎は立ち止まり、

「僕は、君のしたいことについておおよそ察しがっている」

「そうでしょうね」

もはや仁は誤魔化す必要性を認めなかった。

「その上で忠告しておこう。どんな事情があるにせよ、大岩巖には関わらないほうがいい」

「ご忠告、痛み入ります」

仁の答えに、健次郎はふっと自嘲気味に笑った。

「ま、今の君には何を言っても無駄か。仕方のないことだ、僕も興奮が止まらないんだからね。巧妙に隠された真実が明らかになる瞬間に立ち会えて感謝するよ。それに——君には本当に、この事件を解決してしまうことができるのかもしれない。まるでヒーローだ。正直懂れるよ。それでも——」

健次郎は、その続きを言わなかった。

「……忠告はしたからね」

その夜。仁はベッドに横たわりながら、思索に耽っていた。

健次郎から得た情報をこれまでの情報に合わせると、違和感のない大岩巖像が浮かび上がってきた。

大岩巖は慎重で狡猾な人物である。普段から数々の罪を犯しているが、それらは決して証拠が残らない形で行われる。危ない道は渡らない。これは忍、健次郎——数々の証言から勘案するに確定事項だ。

しかし、そんな大岩巖がリスクを取る場面がある。

時系列順で並べるとこうだ。

最初に、ボクシング部での部員全員病院送り事件。

確かに巖の権力でもみ消しには成功したようだが、巖ほど慎重な人間が取る行動とは思われない。

次に、茜の事件への関与。動画の存在のリーク。さらには動画をどこかに残してあること。極少数の生徒には動画を見せたとも言っていた。これらは、誰がどう考えても大変なリスクである。

最後に、昨日の仁に対する暴行。巖の罪は強請りや脅迫がメインで、実際に暴力を振るうことは殆どないと忍が言っていた。しかし、現に昨日仁はサンドバックとなった。昨日はカラオケ店が支配下にあるからだと思っただけだが、人一人多くの傷が残るような形で暴行を加えるというのは、やはり慎重でリスクを取らない人間の行動ではない。

この三件全てに共通するのが、茜の存在である。

ボクシング部での件は健次郎によれば茜に振られた腹いせであり、昨日の件は仁が茜の動画について嗅ぎ回っていたところに巖が現れた。

おそらく健次郎もこの共通点に気づいたのだ。

仁に暴行を加えた理由については、カラオケの件については健次郎には話していないものの、茜の部屋を訪れたことは噂で知っていたから、そのことでシめられたと考えたのかもしれない。

結論。

大岩巖は振られたことで茜を恨んでいて、復讐のために一と渡を唆し、あるいは脅し強姦させた。そして動画の存在を学校中に拡散することによって、茜を不登校にまで追い込んだ。金を借りさせたのも巖の可能性があるが、その点はどうでもいい。

そこまで考えて、仁は深いため息をついた。

証拠は掴めるだろう。仁のハッキング技術を持ってすれば、それは容易なことだ。巖とて、まさか過去に遡るハッキングなどされるとは思っていないだろうから、一度くらいは動画を受信したり、茜の事件に関してチャットで指示したりしたことがあるはずだ。消してしまえばそれで問題ないと考えるのは、浅慮ではなく合理だ。

ただ、ここに一人、その理を外れた存在がいるというだけでは、その証拠を学長に提出した場合、どうなるか。

1、隠蔽しようとする。この場合、事件に対する巖の関与を茜に話させないように苦心することだろう。もし話した場合、茜は巖を含めた関係者全ての処罰を学長に要求するはずで、拒否すれば証拠を学外に出すことで裁きを下そうとするはずだ。こうなるともはや学園の廃校は秒読みである。巖は社会的制裁を下され、巖父は激怒し学園は廃校となる。

2、廃校覚悟で巖を正当に処罰する。この場合茜は救われる。しかしやはり巖父は激怒し学園は廃校となるだろう。

1、2のパターンいずれにしても、廃校は免れなさそうである。

「……短い学生生活だったな」

仁はんーと声を出してベッドの上で伸びをする。

今日が四月一〇日の木曜日。色々あった気がするが、入学式から数えてまだ四日目なのだ。殆ど体験入学のようなものである。

「ま、でもいいか。一人の女の子を救えるわけだしな」

寧と学生生活を送る約束は守れなかったけれど、寧も納得してくれるはず——そう、仁は思った。黒幕の存在を隠して実行犯の二人だけを裁いて、動画を全て抹消して。それで得られる学生生活のなんとむなしなことか。

仁はスマホを取り出し、茜にチャットを送った。

——話がある。明日の放課後そっち行つていいか。

そして、入学して初めてPCを起動する。現在のOSでは設定からシステム、バージョン情報と進めばPCのスペックが表示されるようになってる。

「ふむ。スペックは十分だな。これなら目的を果たすのに何の支障もない」

特にハッキングに要求されるのは、CPU、即ちPCの頭脳部分の性能だ。このPCは一般向けCPUとしては最新かつ最上位のものを搭載しており、簡易水冷方式のため廃熱の問題もバッチリである。

「さてと。じゃ、いっちょやっ तरीますか」

四月一日、金曜日。その放課後。仁と寧は茜の部屋を訪れていた。

廃校秒読みの学校の授業に真面目に出ている自分を仁は滑稽に思ったが、まだ寧にこれから起こるであろう事態について何も説明していないため、放課後に設定するのが自然だったのである。

そもそも、と仁は思う。別に、焦る必要は何もないのだ。

なぜなら、結末はすでに決まっているのだから。

「はい。今開けるね——って、九条君!? どうしたのその包帯!？」

茜も当然のごとく、仁のビジュアルに驚きの声を上げた。

「まあまあ、説明はあとで。とりあえず中に入れてくれ」

茜の部屋を訪れているところをあまり見られたくはない。すでに一度見られ噂が出回っているが、これが繰り返されるほど巖は警戒を強めるだろうからだ。

しかし、大勢に影響はない。茜と巖は学園の存在ごとく消し去ってしまったる謂わば禁止カードなのだ。巖はこれまでその力を利用して学内のフィクサー的立場を確立してきたようだが、それも茜が父親に泣きつけば全てが無に帰すのである。それに、全てが公になればいくら未成年かつ大企業役員の息子とはいえ少年院送りは免れない。この学園は巖にとってこれ以上なく都合のいい箱庭だが、一步その外に出れば多少生まれがいいだけのただの一般人に過ぎないのだから。

部屋に通され、二人は席に着いた。茜は「烏龍茶とミルクティー氷ありだったよね」と冷蔵庫のある廊下からこちらに声をかけてくる。

「ああ。すまないな」

代表して仁がそう礼を言った。

テーブルにおぼんが置かれ、やはり茜がグラスを二人の前に置いてくれる。

仁はさっそくミルクティーで喉を濡らすと、二人をゆっくり見回してから口を開いた。

「さてと。どこから話したのか……」

話を聞き終えた茜は、静かに泣いていた。

寧は口をぎゅっと引き結び、その華奢な体と両手はふるぶると震えている。

「ごめん。私のせいでそんな目に……」

右手の袖で涙を拭いっつ、茜は呟いた。

「何を言う。松井に非は何もない。この件を引き受けたのは他ならぬ俺なんだ。それに依頼主は学長だしな。松井が気に病む必要などこれっぽっちもない」

「そうだよ。悪いのは田中と郡道と大岩、それ以外は誰も悪くない」

渡と一は二年、巖に至っては三年の大先輩であるが、寧はしれっと呼び捨てしている。そのことに気がつき、仁はくすりと笑った。

「……なに笑ってるの」

「いや、気にしないでくれ。そんなことより」

仁は気になっていたりしたことを切り出した。

「件の事件への大岩の関与の話、もっと驚くと思ったんだ。思ったより反応が薄かったな。もしかして気づいてたのか？」

この話、茜にとっては裁くべき、言い換えれば恨むべき人間が増えたことになるわけで、しかも自分が振った相手による復讐とかいう極めて胸くそ悪い事案だ。相当心を揺さぶられることが想定されたため、仁はどのように話すか大変苦慮したものだ。しかし、予想に反し茜の反応は極めて薄く、カラオケで巖と対面した話が一番ダメージがあったようで、それはもう、仁のほうに申し訳ない気分になってしまうほどだった。



「気づいてたというか、その可能性もあるとは思ってたって感じかな。あの人がなりしつこくて、表だってはアプローチしてこないんだけど、チャットで色んなところに呼び出されて、接待みたいな？ 個室の飲食店とか奢って貰ったり、誰から聞いたのかその時欲しかったものを突然プレゼントされたりとか。でも、好きでもない人にそんなことされても怖いだけじゃん？ だからあるとき、もうこういうことはやめてください、あなたのことを好きになることはないですって言ったんだよね」

寧は話を聞きながら、「あー、そういう人いるよね……」と哀愁を漂わせていた。

仁にはまるで恋愛の経験がないため、異性に対するアプローチの正解など当然知らない訳だが、それでも今この場で学んだことがあった。

「しつこいのはよくないってことだな」

「うんうん、それ！」

寧と茜は我が意を得たりとばかりに何度も頷いている。

仁は、そういう場面がもし今後訪れたならば気をつけることにしよう、とそう思った。

「それで、話にはまだ続きがあった」

仁と寧の視線が茜に集中する。

「私が立ち去ろうとしたらね、言われたんだ。後悔するぜって」

寧が「うわあ」と嫌悪感丸出しの表情で呟く。

「その時はそこまで深く気にはしてなかったけど、あの件があったからしばらくして、ふと思ったんだよね、もしかしてあれってそういう意味だったのかなって」

確かに、「後悔するぜ」は色んな解釈が出来るような言葉だ。茜は単なる負け惜しみと解釈したのだろう。それは極めて自然な解釈だが、相手が巖ということを考えれば、もう少し警戒する必要があるのかもしれない。

いや、と仁は即座にその考えを否定した。かりに巖を警戒していたとしても、現実に巖は実行役を別に用意したのだから、対応は困難だったはずだ。誰も信用せず少し前までの仁のように頑丈な自宅に引きこもるくらいしか手はなくて、まともに学生生活を送ろうとしたならば巖の魔の手は遅かれ早かれ必ず茜に牙をむいていたのだろう。全く、災難としか言い様がない。

「なるほどな。しかし、だとしたら何故最初の話の時に巖の名前を出さなかったんだ？」

「だって、確証がなかったし。それに——」

茜は下を向いて続けた。

「もしあの人が裏にいたとして、それが確かなことだってわかっちゃったらさ……それって私にとって何もないことがないんだよね。だって、私の味方——学長も仁君達も、学園存続のために私に協力してくれてるじゃん？」

はっと寧が、何かに気がついたような顔で、

「……そっか。松井さんと私たちで、目的が対立しちゃうんだ」

茜は下を向いたままで、小さく頷く。

茜にしてみれば、もし巖が犯人の一人だとわかったならば当然裁きたいと考える。しかし学園における彼の立場からそれは難しく、強硬手段に出れば巖の父が怒って学園は崩壊する。それ自体は茜にとって何ら不利益のないことだ。協力者連中がこぞって学園存続を目的に茜に協力しているという不都合な事実を除けばだが。

「だから私、知らんぷりしようとしたんだ。あの人は事件に関係ない、あの二人の単独行動なんだ、あの二人を裁いて動画を消し去れば全て解決なんだって思い込もうとして。だってそうじゃないと、誰も私に協力なんかしてくれないから」

仁は無言で寧を見た。

寧も同時に視線を仁に向けてきて、一つ頷いた。

「気持ちと同じようだ。よかった、と仁は心から安堵した。

「松井、大丈夫だ。俺たちは大岩を正当に裁くつもりだから……だから、安心してくれ。そんな風に、気持ちを押し殺す必要はないんだ。松井にそんな犠牲を強いてまで、それに大犯罪者である大岩を裁くことなく放置してまで、学園存続にこだわるつもりは毛頭ない」

「で、でも……。九条君は、ここしかないってこの学園に入学したんだよね？ 類地さんと学園生活を送るために」

「おや、と仁は思った。その話を前回茜にしただろうか。

仁の疑問を察したらしい寧が、注釈を入れた。

「私たち、あの後チャットで色々、お互いの話とか話したんだよね。だからもう友達なんだ」

仁の知らぬ間に二人は関係を深めていたようだ。寧は仁とべったりの弊害で元々そう多くなかった友人の大半が離れていってしまったようだから、新しい友達が出来るのは大変喜ばしいことだ——と、仁は自分の友達事情を棚に上げてそう思った。

「つまりさ。確かに私は仁君が大事で、仁君と学園生活を送りたくてここに誘って、ようやく得られた二人の場所で……。それは事実だよ。惜しくないと言ったら嘘になる。だけどさ」

そこで寧はいったん言葉を切り、烏龍茶で喉を濡らして、それから続けた。

「私にとっては、もう松井さんも大切な友達なんだよ。友達に犠牲にしてまで守りたいものなんて、私には何もない」

「全くその通りだな」

「九条君、類地さん……うっ、うっ」

感極まり泣きじゃくる茜の隣に寧は席を移って、よしよしと頭をなで続けた。

そんな二人を、仁は穏やかな表情で見つめていた。

しばらくして泣き止んだ茜は、赤く腫らした目をゴシゴシと袖で拭いた。

「さて……。そしたら、校長に証拠を提出しに行くか」

「あ、もう証拠集め終わってるんだ」

「ああ、昨日のうちにな」

そう言っただけで仁は鞆からファイルを取り出しテーブルに置いた。

件の動画に関しては、実行犯の二人はまだ警戒しているのか現在では所有しておらず、巖も同様だった。そこで、茜の動画を全て消すという願いもあつて、総当たりで動画ファイル調べていった。これに関しては、全く無罪の学生のファイルを確認しなければならなかったため仁は大変な罪悪感に苛まれた。ただし、一度動画を見つけてからは、AIにその動画ファイルを読み込ませ、それと同じ動画があるかをチェックさせることにより、仁自身がファイルを覗き見たのは七八人に止まった。

結果として、動画を所有していたのは、三年の朝倉工のみであった。

次にすべきことは、巖の当該事件への関与を示す証拠の入手であった。

やはりと言うべきか、巖はかなり几帳面な性格のようで、チャットなどもいちいち消すのか何一つ残ってはいなかった。実行犯二人側も、巖との履歴は残っていなかった。巖に口酸っぱく指示されているのだろうか、と仁は思った。

だが、こうしたデータは一般的に、使用者が消したからと言って、完全に消去されてしまふものではない。データを保管しているバンクには残っている可能性が十分にあるのだ。何故ならサービス提供側は、使用者が誤って消してしまったトーク履歴などを復元することを求められることがあるからである。また、使用者が誹謗中傷などの悪質な投稿をし後にそれを削除、証拠を隠滅しようとした場合でも、警察が求めればサービス提供側が過去の投稿を復元し提供することが出来るようになっていいる。

であれば、このデータバンクにアクセスすればいい。

都合のいいことに、仁が相手しているのは一学園が運営するポータルサイトのシステムである。強力なセキュリティなど存在しない。

そうして仁は巖と渡、一両名のチャットを遡っていった。

事件前後のチャット履歴を確認しても、指示を与えていると判断できるようなものは残念ながら見つからなかった。証拠を極力残さないために口頭で指示を行ったのだろう。

しかし、事件から三ヶ月後、これまた動画を所有していたのと同じ朝倉工とのチャット履歴に証拠となるものが残っていた。

『馬鹿共を唆してレイプさせても登校してきやがってたあのブス女、動画の存在を広めさせたらようやく不登校になりやがった。退学しねえのが謎だが、プライドだけは高え女だからな。ざまあねえぜ。(中略)——おい、履歴消しとけよ』

どうも巖はこの朝倉工という人物をかなり信用しているようで、自身の種々の犯罪行為についても多くチャットで話していた。それらもついでに印刷・データとしても複製済みである。茜の事件には直接関係ないが、巖という人物の行為を世に問うのには有効だろう。

「順序としては、まず学長に実行犯二人の証拠だけを提出して退学処分を下して貰って、その上で茜がこの証拠を学園の外に持ち出して、警察とか父上に相談するとかして巖の実態を世に知らしめる——こんなところかなと思っているが、どうだろうか。ただ、茜の件を含めて断罪しようとした場合、動画も含めて提出する必要があるだろうから、それが嫌なら他にも沢山の余罪に関する証拠を集めてあるから、それだけで戦うことも出来るはずだ」

茜はファイルをバラバラと開き、

「本当に、何から何までありがとね」

そういう茜は、うかない様子であった。

「どうした。まだ何か懸念点があるか？ それなら正直に言ってくれ。できる限りの対応をするつもりだ」

茜はかぶりをふって、

「ううん、そうじゃないんだ。集めて貰った証拠は十分すぎるほどだし、これであの人の含めて全員を罪に問うことが出来る。動画ももう、証拠として私たちの手もとにある以外はどこにも存在しない。私が望んでいたこと以上の結果だよ」

「なら——」

仁の疑問に、茜は弱々しい笑みを浮かべて言う。

「私がこの証拠を学園の外に持ち出したら、多分近いうちに学園はなくなるでしょ。それしたら二人とは離ればなれじゃん？ 九条くんや類地さんと学園生活をこのまま送りたかったなつて。そう、思っちゃったんだ。ごめんね、自分でもおかしなこと言ってるって自覚はあるよ。一番それで悔しい思いをしているのは二人なのに、つてね」

寧は何も言わず、ただうつむいていた。

確かに、二人はもしかしたら同じ学校に転入して同級生として生活を共にすることが出来るかもしれないが、仁はそうではない。また埼玉の山中の自宅に引きこもる生活が始まることになるだろう。

「まあでも、実際に会うことは出来なくても、チャットとかビデオ通話とか、話せる手段はいくらでもあるわけだしな。文明の利器に感謝だ」

「……私は会いに行くけどね」

寧がうつむいた顔を少し仁に向け、そんなことをいう。

「やめとけて。本当に危ないから。俺を信仰対象にしてる新興宗教団体とか、俺の精子を使って人類の能力の底上げすることを人類の進化とか呼んで目標にしてる人類進化会議とか、俺を狙ってるカルト団体は未だに少なくないんだから。そいつらとうっかり鉢合わせでもしたら面倒なことになる」

「噂には聞いてたけど、ホントにいるんだ……」

茜が目を見開き愕然とした表情でいう。

「いるいる。まあそいつら俺の自宅にいたずらしようとするような奴らとかマスコミも追い払ってくれたりするから悪いことばかりじゃないんだが、それでもウザったいのは変わらない」

「ウザいっていうか、危険だね。仁君の身柄を狙ってるってことでしょ？」

「それは団体によるな。人類進化会議は何度も俺を誘拐しようとして失敗してるが、宗教系の奴らは大体お声を聞かせてくれとか、要求はそんなのが多いな。まあ全部無視してし、警備会社と契約してからはかなり数が減ったが」

「私が行ったときも誰にも会わなかったしね」

「うん、でもそれは運がよかっただけだ。そういう危険な目に寧をあわせるわけにはいかない」

寧はブスツとした表情で不満を表明してくるが、こればかりは仕方がない。それに、仁とて口惜しいのである。

と、そこで。

茜が妙に真剣な表情で、

「ねえ、九条君」

「ん、どうした」

仁と寧の視線が茜に集中する。

「仁君がさつき提案してくれたプランだけどさ。校長に二人分だけ証拠を提出するところまでは一緒として、あの人の罪に関する情報を、勿論私の件まで含めてポータルサイトに乗っけたらどうなるかな？」

思いがけない発言に、仁と寧はしばし固まった。

「……まあ、学園側が削除するだろうな」

「じゃあ、それでもしつこく投稿しつづけたら？」

「そしたら巖の悪行を白日の下に晒すことは出来るな。まあ、それでも学園は巖に退学処分は出せないだろうが」

と、そこで仁は茜の言わんとしていることに気がついた。

「もしかして、まだ諦めてないのか。巖を裁きつつも俺たちが学園に通い続ける道を」  
しかし——と、仁は思う。

その選択肢を採ることは難しいだろう。

「それは無理じゃないかな」

と、仁の代わりに寧が反対の意見を表す。

「もし松井さんのいう通りにした場合、大岩の怒りは仁君と松井さんに向くと思う。こんなこと出来るのは仁君しかいないし、そもそも大岩は松井さんを恨んでるわけだしね。学校がなくなればいくらでも逃げられるけど、大岩のいるここで学生を続けるとなったらあと一年は地獄なんじゃないかな」

巖は三年生なので、あと一年経てば自動的にいなくなる。しかし、その一年が途方もなく長いのだ。

「そっか。そうだよね……ごめん」

「ううん。私も三人でここで学園生活続けたいから、気持ちはよくわかるよ。でも——」  
実現は不可能——本当にそうだろうか。

懸念点は、二人——寧と茜の身の安全だけだ。

そして、学園内で生活する上で、警戒に警戒を重ねたとして。

巖サイドの魔の手が二人を傷つけることはあるだろうか？

——仁は考える。

「……条件さえ整えば」

寧と茜が、意味深な発言をする仁を見る。

——そういえば、対巖の立場が明らかである、表面上とは、いえ、学園最高権力を誇る団体があるではないか。

彼らを味方につけることが出来れば、あるいは。

「なあ。これから生徒会室に行ってみないか」

生徒会は平日は毎日放課後から六時半まで活動している。

時刻はすでに夕方の六時。時間的にはギリギリだが、今日は金曜日。土日を挟まず、早めに話を通しておきたい。そうでなければ、どのような気持ちで土日を過ごせばいいのか、仁はわからなかった。

協力を取り付けられるにせよ、拒否されるにせよ、早く回答が欲しかったのだ。

校舎は静寂で満ちていた。六時ともなれば殆どの生徒はすでに残ってはいないだろう。文化部の活動時間は五時半が上限に設定されている。となれば残っている可能性があるのは、図書室くらいか。図書室は生徒会室と同じ一階にあるが、試験前でもなければ人の出

入りは少ないだろう。

なお余談だが、この学園、モール横には図書館がある。図書室ではなく独立した図書館である。無論中等科・高等科共用であり、地下に三階、上に三階の六階構成で蔵書数は三万冊と、高校までの教育機関としては最高峰の蔵書数を誇る。ただ、こちらはテーブルなどは必要最小限に押さえられており、学生が勉強する場所というよりは調べ物にやってきた学生に資料を貸し出すことがメインの機能である。逆に中等科棟、高等科棟それぞれにある図書室は蔵書数こそ抑え気味だが、その分仕切りつき一人用机や通常の長テーブルなど最大四〇人分の席があり、勉強に来た学生を多数受け入れる用意がある。

「生徒会室なんか初めて行くな、ちよつと緊張するかも」  
「あ、それちよつとわかるー」

そんな話をする二人を横目に、仁は考えていた。

生徒会室には一度来たことがある。しかし、あの時は会長である黒神忍しかいなかった。怖そうな印象に反して案外友好的で、巖に関する重要な情報を授けてくれた恩人である。

だが、これから仁達が要求しようとしていることは、生徒会全体の方針に関わってくることだ。生徒会は生徒の相談に乗ることが職務の一つであるとはいえ、ものには限度というものがある。凶々しいにもほどがある仁らの要求を彼ら生徒会が飲む可能性は、決して高くないと仁は考えていた。

——一方で、可能性は〇ではないとも、仁は考えている。これには理由があつて、生徒会は長らく、おそらくは巖が中等科に所属していたころから彼に手をこまねいてきたのである。そんな巖のこれまでの罪に関する本人の自供とも言うべき証拠が今、仁の手にはある。これは不当な手段で入手したものだ、それでもなお、長らく巖の罪の証拠を握めなかつた生徒会にとっては喉から手が出るほど欲しいのではないか。

実際問題、巖を退学に追い込むことは困難だとしても、生徒会がこうした情報を握つていれば、それは巖に対する牽制として機能するだろう。今後の巖による被害を減らすことに一役買うかもしれないのだ。

そんなことを考えていると、一行は生徒会室前に到着していた。

仁が代表してコンコンと二度ノックする。

ギィイと重苦しい音を立てて扉が開く。そこに立っていたのは——。

「類地——と、九条に松井か。奇妙なメンツだな。生徒会に何か用か？」

寧は「奇妙じゃないし」と抗議しつつ、「うん。ちよつと相談があつて」

「相談か。三人同じ案件ということでもいいんだな？」

「そうだ。出来れば黒神会長に話を通して貰いたい」

龍牙は舌打ちをして、

「会長は忙しいんだよ。……まあ、一応聞いてみるけど。ちよつと待つてろ」

そう言つて龍牙はずんずんと生徒会室を進んでいき、最奥部の会長席にたどり着くところやら話していた。

二人が話していた時間は一〇秒にも満たなかつたかもしれない。龍牙は大腿でこちらまで戻つてきて、

「着いてこい」といいさつさと部屋に入って行った。

三人は生徒会室に入り、しつかりと扉をしめる。

生徒会室には、今日は全員が勢揃いのようだった。会長の席以外にもそれぞれ役員の席が個別に用意されていて、それらは壁際にずらっと並んでいるのだが、一つを除いて全てが埋まっていた。残った一つは龍牙のものだろう。

生徒会役員達の視線が突き刺さる。三人をみての感想は龍牙と変わらないようで、首を傾げる者、奇妙なものを見るような表情の者、共通しているのは「なんのメンツだ？」という疑問を持っていそうなことだ。

確かに、仁は色んな意味で現在学園の注目の的であるあの人造人間、寧はそんな仁とかなり親しげにしていることで現在悪い意味で注目を集める人物、茜は絶賛原因不明の不登校中である元Aクラス一〇傑でかつ学園の上位権力者。

仁と寧のセットはともかくとして、そこに茜が加わるのだから中々にパンチの強い組み合わせだと思われても仕方がない。

「四人だと個室は使えないから、その長テーブルに適当に座ってくれ」

言われて三人は着席する。その向かいに龍牙が座ろうとして、背後からぽんと肩を叩かれた。

「話は俺が聞こう。後で呼ぶことになるかもしれないが、それまでは残った事務処理を進めていてくれ」

「え、いやでも、まずは自分が……」

「普段はその決まりだが、今回は例外だ」

「……はい、わかりました」

龍牙は何故か仁を鋭く見据えてから、席に戻っていった。

——どうも自分はあるの男に嫌われているようだ、と仁は思った。

龍牙と仁が遭遇するのは入学式以来二度目だが、思い返せば入学式でも龍牙は仁に対して冷たい態度を取っていた気がする。

「さて。相談があるそうだが——時間も時間だからな。簡潔に話せ」

席に腰掛けた忍が、三人を見渡してから視線を仁に固定し、そう告げた。

仁は無言で頷き、それから肩に掛けていたバッグのチャックを開け、取り出したファイルをテーブルに置いた。

「これは？」

「口で説明するより、ご覧になっていただいた方が早いかと」

「ふむ」忍はファイルを手元に引き寄せ、開いた。

「これは……」

それからしばらくの間、忍はファイルのページを繰り続けた。そんな忍の姿を、他の生徒会メンバー達は仕事の合間のふとした瞬間に眺めては不思議そうな顔をしていた。

会長・黒神忍を釘付けにするファイルとは何物なのか、という疑問を、会長を除いた全生徒会メンバーが持っていることだろう。

最後のページを見終えた忍は、パタリとファイルを閉じると、

「なるほど……昨日のハッキングはお前の作業か、九条」

ハッキングという言葉に、生徒会メンバーの視線がにわかに仁に集まる。

「ハッキングって……そういえば昨日、システム担当の職員が慌ただしかったって噂を聞きましたが、まさか」

龍牙の言葉に、「そういえば、そんな話を私も……」と、シニオンヘアーの大人びた少女——三年A組、生徒会副会長の佐倉芙美がそう呟いた。

「……で？ お前はこれを使ってどうしたいんだ」

「最初の二人の分に関しては、学長に提出する予定です。そもそもこの二名の犯罪行為の証拠を集め出したのは学長の依頼ですので。罪を償って頂きましょう」

「ふむ。して、その次は？」

「ご相談したい点というのが、まさにそこなのです」

「なるほどな……」

忍は腕を組んで目を瞑った。仁が持ちこんだ爆弾について、色々と考えを巡らせているのだろう。すでに長テールブルの周りには全ての生徒会役員が集結している。もはや通常業務などしている気分ではないのだろう。だが、勝手にファイルを取り中を見ようとすると人はいなかった。

忍は目を開けると、

「九条、まずはお前のビジョンを話せ。話はそこからだ」

仁は頷き、口を開く。

「わかりました。——俺達が考えているのは、後者の証拠をポータルサイトに投稿するという方法です」

茜と寧が、えつという表情で仁を見た。まさか本気でそのルートの相談をしにきたとは思っていなかったのだろう。

「ふむ……。するとどうなると考える？」

「学生中に大岩先輩の所業が知れ渡ります。これについては、アドレスを偽装することで存在しないはずの学生として行いますが、大岩先輩を初めとした少しでも鋭い生徒であれば犯人が俺であると気づくでしょう。となれば、俺に対する攻撃を大岩先輩は考えるはずです。そして学園は、『不確かな情報』とかなんとか理由をつけて大岩先輩に対する処分を行うおうとはしないはずですよ。この証拠がハッキングという不当な手段で得られたものであることは明確ですから、証拠に偽造の可能性があるとか、いくらでも難癖をつけようと思えば出来るはずですよ」

「大岩……？ 大岩だって!?!」

芙美は驚きを隠せないといった様子で、ファイルを手繰り寄せると開いた。その周りに真鍋友樹書記、川田綾音会計、そして龍牙の三人が集まる。

「これは……酷い。大岩が問題児なことは理解していたつもりだが、ここまでとはな」

芙美の言葉が、これ以上なく的確に綾音と龍牙の気持ちを代弁しているようだった。三人は呆然、沈痛、嫌悪、憤怒——様々な感情がごちゃ混ぜになったような、名状しがたい表情を醸えていた。

「こんなことが許されていいんですか」

龍牙は忍を見据え、問う。

「落ち着けお前ら。……まだ九条の話の途中だ」

龍牙らを諫める忍の表情にもまた、苦々しい感情が滲み出している。

「すまんな九条。続けてくれ」

「はい。結論として、この情報を持ってしても大岩をたちどころに退学に追い込むこと



は困難でしょう。しかし」

「時間を掛ければ可能性はあると？」

「0ではないという程度ですが。学園サイドの処分による可能性はありませんが、自主退学という線がまだ残っています」

「自主退学……なるほどな。そういうことか」

忍はこれだけの情報で、仁の狙いを理解しようだった。

「でも、あの大岩が自主退学なんてするでしょうか。いくら自身に関する不都合な情報が一度学園中に拡散したとはいえ、九条君も言っていました。その後学園側はその情報を偽造された、大岩を陥れようとする者による仕業だという方向に持って行くことが予想されます。大岩が退学を自ら考えるほど追い詰められるとは思えませんが」

綾音の疑問はもつともなものだ。だが、仁の話には続きがある。

「その通りだと思います。——そこで終わってしまったえば、ですが。そして、そこで終わらせないための相談を、俺たちはしに来たわけですよ」

まだ忍以外はピンときていない様子である。そこで、忍は切り込んだ。

「つまり、お前は生徒会にこう要求するつもりなのだろう——。この巖の犯罪行為に関する証拠の正当性を生徒会として主張し、学園並びに大岩と徹底抗戦せよと」

仁は無言で頷く。仁の相談とは、いかにもそういうことであった。

「しかし、情報の正当性の主張とはどうするつもりなんだ？」

芙美の疑問には、忍が答える。

「そこは、九条を使う。具体的には、ハッキングの実行者の正体を九条だと公開する。さらにハッキングの実演なんかもしてやれば、証拠の出自に対する疑いは限りなく薄れるだろう。無論それでも、偽造の証拠だと言いつ張ること自体は可能だが」

「でも、そんなことしたら、仁君も何かしらの罰を受けることになりませんか？」

寧が不満げに忍を見据える。

「そこは、生徒会が泥を被ろう。生徒会の依頼によりハッキングを行ったということにするんだ。——生徒会は今まで多くの生徒からの相談を受けて大岩の罪について調査を進めてきたが、ここまで確かな証拠を掴むには至らなかった。そこで、九条に依頼した。非合法の手段であることは無論承知しているが、それでも暴かれ白日の下に晒されるべき罪があると生徒会は考えていたからだ。そして、その考えは正しかった——とまあ、こんなところか」

「なるほど。生徒会は完全に九条と手を組むということですね」

龍牙の言葉を、忍は無言でもって肯定する。

「……」

ふと仁は、綾音がどうにも浮かない表情をしていることに気がついた。

ほかのメンバー達は、先ほどまでとは違って顔に精気が戻り、希望を得たような表情をしている。

そのことに気がついたのだろう、

「川田。お前は反対か」

忍の問いに綾音は、

「……いえ。ただ、失敗すれば生徒会の立場が悪くなるな、とは。それに……」

綾音の言葉の続きを、この場に居る他の全メンバーが待った。

「徹底抗戦、私も間違ってるとは思いません。それだけのことを彼はしているわけですから。ただ、少し怖い気持ちがあるのも事実です。——私は女ですので」

広い生徒会室が、しんと静まりかえった。

綾音の心配はもつともで、誰も否定などする権利は持ち合わせていない。

暴力と頭脳、この二つを背景に学園のフィクサーとして暗躍する巖。

——これまでも生徒会は巖の調査を続けてきた、それは事実である。

しかし、仁が持ち込んだ爆弾と、生徒会に対する要求——それを飲むことは、生徒会と巖の対立をこれまでとは別次元のステージにまで押し上げる。それは疑いようのない事実なのである。

「ふむ。川田会計、お前の主張は理解した。無理にとは言わない。最悪生徒会を辞任することも認めよう」

生徒会は原則それぞれの学年の主席と次席（一年だけは主席の一人）が自動的に選ばれる。基本的に任期の一年間はそのメンバーのまま交代することはないが、例外はある。本人が辞任を申し出て生徒会長がそれを認めた場合がその一例だ。

その場合、生徒会は辞任した生徒と同学年の生徒から自由に役員就任のスカウトを行うことが出来る。成績順でないのは、この学園は生徒会役員を除いて全員が何かしらの部活動に所属するルールになっているためである。逆に生徒会役員は部活動を兼ねることは出来ない。生徒会の仕事量は膨大で、二足のわらじは不可能というのがその理由である。つまり、生徒会役員に就任するのであれば、その時点で所属している部活動を退部することになる。これを受け入れる生徒は多くない。成績順にスカウトしてはいつまで経っても新しい役員が見つからないということになり得るのだ。そこで、生徒会でまず有能そうがかつ部活をやめてもいいと考えている生徒を探しアプローチし、それでもダメなら立候補を募る。生徒会役員は多少のボーナスが出るため、それ目当てで手を挙げる学生はいるだろう。しかし生徒会としては、そのような些細な金目当ての生徒を求めてはいない。ただ、欠員が続けば学園からは是正勧告が出てしまうため、無理矢理にでもメンバーを充足する必要がある。

「……いえ。問題ありません。私は与えられた職務を全うします」

「そうか……。他には？」

忍は周囲を見渡し、それから言った。

「俺は九条の提案を受け入れようと考えている。ただ、これは俺の独断だ。反対の意見を持つ者がいてもなら不思議ではないし、それを否定するつもりはない。しかし、普段とは事情が違う。故に、この決定について議論などするつもりはない。反対者がいたとしても、生徒会長権限にて強行させてもらう」

「はいはい！俺は賛成！大岩は絶対許せねえし、それにあんなやつ怖くもなんともねえしな！」

「ふふ、真鍋は元気だな。……私も同じだ。川田の言う通り身の危険に関する懸念がないとは言わないが、対策すればいいだけのこと。我々にはそれが出来る」

友樹と芙美の参戦表明に、場の雰囲気が一気に明るくなった。

あとは、一人。

「そうか。……感謝する。して、神宮司。お前はどうか？」

「神宮司くん……」

寧が不安そうな目を龍牙に向ける。そして、全員の視線が彼に集まった。

龍牙は瞑っていた目を開けると、言った。

「無論、参加します。最初から不参加などという選択肢は俺にありません」

それを聞いて、寧は感極まったように龍牙の元に駆け寄ると、両手で手を取り、

「ありがとう！ 嬉しい、私……！」

と、龍牙は瞬間湯沸かし器の如く顔を赤くし、

「お、おい類地……。落ち着け、別に当然の選択をただけだ。感謝されることなど何

も——」

「そんなことない。すごく勇気のいる選択だと思う。だから、ありがとう」

「……」

「神宮司のあんなに取り乱してるところ、初めて見たな——」

真鍋がいい、芙美が「ふふ、相変わらず真鍋は鈍いな」と笑みを浮かべた。友樹は芙美の言葉の意味がわからないのかぼかんとしている。

と、そこで仁は気づいてしまった。

——なるほど、神宮司が初対面から俺にあたりがきつかったのって……。

しかし、そうなるやと少々やっかいだな、と仁は思う。

「……いや、何がだ？」

——やっかい、一体何が？ 神宮司が寧を好きだとして、その何がやっかいだというのか？

「へ？ 九条君、どうかした？」

隣に座っていた茜が尋ねる。それで、仁は自分が独り言を言っていたのだと気がついた。

「あ、いや。別に」

「ふうん？ にしてもさ、神宮司くんてそうなんだね、知らなかったなあ。もしかして

強力なライバル登場かも？」

そう言っって意味ありげな笑みを浮かべる茜。

「ライバルって……。別に俺と寧はそういうんじゃないぞ」

「そうなの？ じゃあ類地さんが神宮司君と付き合っちゃっても何も思わないんだ？」

「……そうだ。俺には関係のない話だな。まあ、彼氏がいるとなれば異性の友人とはからみずらくなるだろうから、そういう意味で悲しい気持ちがないと言えれば嘘にはなるが。それ以上の感情はない」

「へえー、本当かなー。怪しいもんだけどなー」

「しつこいな。本当だと言ってるだろう」

仁は何故かイライラしている自分に気がついていて。茜がしつこいから、ではない。では、何に対して？

「ふふ、ごめんごめん。——でもさ」

茜は仁の耳元まで顔を近づけ、

「私にとっては、そのほうが都合がいいかも——なんてね」

「——へ？ それって、どういう——」

仁が発言の真意を問おうとした、その時。

「ちよつと二人、コソコソと何を話してるの？」

龍牙への感謝を伝え終えたらしい寧が戻ってきて、何やら話している仁と茜に尋ねる。

「別に大したことじゃないよー。ね、九条君」

「あ、ああ」

「ふーん？」

寧は胡乱な目を二人に向けるが、

「静粛に。……話はまとまったようだな。このメンバーで対大岩の布陣を敷く。大変な戦いになるだろうが、覚悟はいいな」

忍の言葉に、それぞれが頷き、親指を立て、指を鳴らし——それぞれの方法で自らの意思を示す。

と、そこで。

「あの〜」

申し訳なさそうに手を挙げたのは、茜だった。

「どうかしたか、松井」

「いやあ、そのお。今更なんですけど、私あんまり戦力にならないというか……。皆さんに迷惑かけることになっちゃうかもなんですけど」

「なんだ、そんな話か」

忍はかすかに微笑み、

「九条、お前が説明しろ」

「……元々俺が生徒会に求めようとしていたのは、俺とともに大岩と戦ってもらうこと、あともう一つ。どうしても俺の目が届かない時に、寧と茜を守ってもらうことだ。この犯罪の証拠を公開すれば大岩はまず俺自身をターゲットイングリ攻撃してくるだろうが、それだけで満足するとは思えない。そもそも大岩の怒りを買っている茜、それから俺が一番大事にしている寧。この二人も攻撃の対象になると考えるのが自然だ。俺が常にそばにいらればいいが、学生である以上そうもいかないタイミングが出てくるだろう。そこで、極力信頼出来る人間が常にそばにいる状況を作った。俺が一番懸念していたのはそこだからな。その点生徒会なら、信頼出来る人間をある程度把握し遣わせてもらうことができる力があると考えた。だから俺は、生徒会に協力を求めようと考えたんだ」

「一番大事とか……流石に照れるな。仁君、人前だよ？」

顔を両手でサンドし、体をくねらせながらそんなことをいう寧。——こんな寧ははじめてみた。

「いや、ほら……一番って言うのは、ええと」

妙な反応をする寧に慌てた仁は少し考えて、

「……人間として。そうだ、人間としてだ。だから特に変な意味はない」

「ほら、その二人。いちゃコラしないの」

どうやら何か大いなる勘違いをしていそうな茜に仁が突っ込もうとすると、

「痴話喧嘩なら後にしろ。とにかく、我々生徒会はお前ら二人が安全な学生生活を送れるよう支援する」

例えば、と忍は続けた。

「九条と松井は同じEクラスだが、類地はBクラスだったな」

「そうですね……もしかして、生徒全員の所属を暗記してるんですか？」

驚いた様子で尋ねる寧に忍は表情一つ変えず、

「生徒会長として当然のことだ。……話を続けるぞ。お前らの所属が散けているのは都合が悪い。まとまっていてくれたほうがこちらとしても守りやすいからな。そこで、近いうちに新一年達に試験を受けてもらう」

「予定にない試験を行うのか？ 学園側がなんと言うかな」

「まず不満が出ることは間違いないだろう。そこで今回は外部模試を利用し採点も外部に委託することとする」

教員もいきなり予定になかった大量の作問と採点が降りかかれば、不満の一つや二つ出るだろう。そこを金の力で解決すると忍は言っているわけだ。そんなことを会長の一存で決められるとは——と、生徒会の権限の大きさを初めて目の当たりにした仁は驚嘆していた。

「それはいいとして、名目はどうするんです？」

友樹の問いに、忍は眼鏡をクイと直しつつ、

「一般に多くの高校では新入生が実力テストなどの名目で試験を受けると聞く。うちにはその習慣がないが、試験的に導入してみることにしたとでも説明すればいいだろう」

「でも、試験を受けても同じクラスになれるとは限りなくないか？」

「……はあ。佐倉、お前も副会長ならもう少し学園のルールを把握しておけ。いいか、この学園では基本的に定期試験の点数順にクラスが決まっていくが、生徒は自分が配属される予定のクラスより下のクラスであれば、配属の転換を希望できる。まあ、通常時であればメリットが皆無故俺の在籍中にこの制度を利用した学生はいないがな」

考えるメリットは友達と同じクラスになれることくらいだろうが、クラスによって配布される生活費が大きく変動するシステム上その金を捨ててまでクラスを移りたいと考える学生は少ないだろう。

「なるほど。最悪Eクラスに全員集合出来るというわけですね」

龍牙の言葉に忍は頷きつつ、

「そうだ。ただし理想を言えば、可能な限り上のクラスで集合してもらいたいがな」

「どうしてですか？」

寧が首を傾げ尋ねる。

「下のクラスになればなるほど、巖の支配下にある生徒が多い傾向にあるからだ」

あー、と友樹は手を叩き、

「そういえば、リスト見たときそんな印象だったかも」

「リスト？」

仁は本日初出のワードに食いつくが、

「後で説明する。ともかくそういう事情だから、悪いが試験には全力で当たってくれ」

仁、寧、茜の三人は強く頷いた。

「あ、ただ……」

仁は学長との契約の件を話した。

「なるほどな。九条、お前がEクラスだったのにはそういう事情があったか。だが安心

しろ、今度の試験は外部に委託するため答案自体に細工は出来ない。順位を弄ることは出来るが、外部に委託するのは生徒会だから答案は一度生徒会に戻ってくる。そこで九条の答案のコピーを取っておこう」

確かにそうすれば、不当に低い順位が出た際に文句が言える。さらに今回は生徒会のバックアップまであるのだ、いくら学長とはいえ仁をEクラスに張り付け続けることは出来ないだろう。

「ちよつといいですか？」

ここまで殆ど口を開かなかつた綾音の横やりに、視線が集中する。

「そもそも、試験の前に学長に田中渡と郡道一の犯罪行為の証拠だけを提出してしまえばいいのでは？　そして松井さんが、これで二人に処分が下されれば登校する準備が出来ると言うんです。そうすれば、もはや学長に九条君への嫌がらせをする理由はなくなるはずですが」

「それはダメだ」

忍が即座に綾音の意見を切り捨てる。

「大岩の情報を出さなくても、大岩の配下二人が退学処分になれば大岩はそれなりに怒るだろう。それも、二人がハッキングにより得られた証拠により処分されたとなれば、自分の情報も漁られたと考えるはずだ」

「クラス替えなどの準備が整う前に、大岩の攻撃が始まる可能性があるということですか」

龍牙の補足に忍は頷いた。

「さて……やるべきことは決まった。通常業務が残っている者は直ちに終わらせて準備に移れ」

忍の指示を受け、生徒会役員達はさっと自席に戻っていった。

それから忍は仁達をさっと見渡し、

「お前らはもう帰れ」

「でも、私たちにも協力できることが——」

「あいにくだが、間に合っている。それにもう六時半だ。本来の生徒会の活動時間を超えている。生徒会は仕事が終わらなければ何時まで残っても問題ないが、学生の相談に乗っているのは定時の六時までの規則になっている。不必要にルールを破る必要はない」

淡々とした忍の答えに、寧は渋々といった感じで、

「……わかりました」と言った。

新入生学力テストは四月一五日の火曜日に行われた。試験の実施が決定したのが金曜と考えると驚異的なスピードである。土日も業者とのやりとりをしていたとしか考えられない。なお、茜はこの日だけ登校し周囲をざわつかせたが、以後しばらくまた登校することはなく、これがまた多くの憶測を呼んでいた。

試験が帰ってきたのが、四月二五日——翌週の金曜日であった。

仁は全体一位を獲得、茜もAクラス入りを果たした。寧は変わらずBクラスであった。

「ごめんね、私のせいでクラスを落とすことになって……」という寧の謝罪を仁と茜は笑い飛ばした。忍曰くAクラスとBクラスには殆ど巖の配下と思しき生徒がいなく、また金銭面の話であれば二人はどのような些事にまるで興味がなかった。そのように説明しても、しばらく寧は落ち込んでおり、そんな寧を二人で慰める会が開かれるなどした。この二週間にも満たない期間が、仁達三人にとって束の間の心落ち着ける時間だった。とはいえ三人もこの間ただ遊んでいたわけではない。定期的に生徒会役員達と連絡を取り、後々のシュミレーションなどを実施していた。

それから、部活動の加入期限が四月末と迫っており、協議の結果三人は生徒会の契約メンバーという新たに創設されたポジションに付くこととなった。

以下が、生徒会が出した声明である。

——このたび新設することとなった契約メンバーとは生徒会が業務について処理能力の不足を感じた際に独自に採用出来るものである。なお正式な生徒会役員ではないため報酬は発生しないが、部活動への参加は役員同様禁止されるものとする。

なお話は少し戻るが、龍牙は仁に続いての学年二位と、入学四年目にして初めて主席の座を明け渡した。その龍牙も仁、そして再び登校してきた茜と同じくBクラス移動を希望したため、龍牙の元には事情を尋ねる生徒であふれかえていた。

そしてこの日、仁らは渡と一の犯罪行為に関する証拠を学長に提出した。

学長はこれを元に、即日二人に対し退学処分を下した。

そして、その日の夜分一二時。

存在しないアドレスを持った学生によって、大岩巖の犯罪行為に関する自供とも取れるチャットのスクリンショット写真の数々が、学内のポータルサイトに投稿された。

四月二十八日、月曜日。時刻は七時五五分。

いつも通り、仁ら三人はA棟を出て校舎へ向かう道を歩いていた。

——なお、安全を最大限考え、登校時はまず仁が部屋を出て寧、茜と部屋を尋ね拾っていくことにしていた。無論女子達からは朝から女子生徒のみが住まう階層へやってくる仁に対し白い目を向けられることが多々あったが、そのような些事を気にしている段階ではないと仁は自分に言い聞かせていた。なお、寧と茜に関しては、仁の想定していたより心が強いようで、あの九条仁とべったりというので様々な言葉を掛けられたり、また口には出さなくとも態度で示されたりしていたものの、まるで気にしている様子はなかった。仁は、自分に気を使ってくれているのだと思いきや感謝したもの、それにしても少しの動揺くらいはみられてもよさそうなものだが、と思った。

と、そんなこんなで校舎に到着し、下駄箱で下履きから上履きに履き替える——その時である。

「ふむ……始まったか」

仁はそう呟いて右手で顎をなでた。

「ん、どうかした？」

寧がいち早く仁の異変に気づき、それを見て「……何これ」と呟いた。

遅れてやってきた茜も、「酷い……」と両手で顔を覆う。

仁の下履きは片方が切り刻まれ布片と化し、もう片方は泥がこれでもかと詰め込まれていた。ご丁寧に外側にまで泥が塗りたくってあり、すでに外側に関しては多少乾燥してカピカピと鈍く光り始めていた。

「大丈夫だ、こんなこともあるかと予備を持ってきてあるからな」

仁は靴から予備の上履きを取り出し、履いた。そして、悪戯された靴をこれまた持参していた使い捨てのビニール袋に入れる。と、そこで、

「あつ、見て！ あれ」

茜が指さしたのは、昇降口付近の白壁——であつたはずの場所。

そこには、遠くてよく見えなかったものの、仁を名指ししての罵詈雑言の類いが印刷されたポスターが大量に貼られていた。これには思わず仁も吹き出してしまい、「笑い事じゃないよ」と寧に諫められる。

「すまんすまん。ただ、あれだけの数張り付けるのは大変だっただろうと思つてな。恐らく一階だけじゃないだろうから」

「九条君はノー天気だなあ」

くすくすと笑っている茜と、まるで危機感のない仁に不満がありそうな寧を交互にみて、仁はこんな場合にもかかわらず「平和だなあ」と感じていた。

ただ、これは生徒会（主に忍）と協議していた内容にしっかりと当てはまっている。

「教室の前に生徒会室に行くぞ」

生徒会室では、忍だけが自席で何やらPCを操作していた。

仁が何も言う前に、

「やられたみたいだな」

と、視線をPCのディスプレイモニターから外すことなくそう言い当てた。

「映ってましたか」

「ああ。ただ——」

忍は一瞬言いよどみ、

「残念ながらこの映像から犯人を特定することは難しい」

「えっ、どうしてですか」

驚く寧に、「これをみる」と忍は自身の背後を指さした。忍の席の背後、その壁には大型の——六〇インチはあるかという——壁掛けスクリーンが設置しており、ぱっとそこに映し出されたのは、玄関口を上から映した映像だった。

そしてその映像に映るのは、青色でだぼっとした作業着を着て頭にはフードを被り、さらには仮面まで付けた人物だった。これでは人物の特定どころか性別すら判断出来ない。

こしやくな、と寧は目をつり上げている。

「ただし、まるでやられっぱなしというわけでもない」

「フードや仮面の購入履歴ですか？」

「そうだ。モールの該当店舗に佐倉を向かわせた。店員によれば、これらは店頭在庫



を買い求めたわけではなく、生徒の注文を受けて取り寄せたものだそう。それも、一〇〇着以上まとめて発注があったらしい」

「一〇〇着……」

想定以上の規模だ。高等科の定員は一〇三年全て併せて六〇〇名。そのうち六分の一以上が巖の支配下にある可能性があるということか。

忍も同じようなことを考えたのか、

「恐らく、これまで使ってきた手下と言うべき連中を超えて、手駒たり得る生徒を総動員するつもりなのだろう」

「手駒……賭場に足を踏み入れたことがある生徒ですか」

「他にも色々あるだろうが、最大グループはそれだろうな。突然大岩から連絡が来て、そこには直近のものか、はるか昔のものか——それは人それぞれだろうが、ともかく自身が賭場で遊んでいる写真が添付されている。そして、指示に従わなければこれを公開すると脅され、従わざるを得ない連中だ」

不憫ではあるが、自ら賭場という違法の場所に足を踏み入れた以上はその生徒にも非がある。もし無理矢理連れ込まれていたのだとしたら、それはただただ可哀想だが、仁には、そして恐らく生徒会にも、そのようなことを区別しようとする余裕はない。巖に従う者達は一ひとくりに敵と認定し、排除していく必要がある。そうすることで巖の戦力を削ぎ、それこそがゆくゆくは巖を追い詰め自主退学に追い込むことに繋がるのである。

「その、大量の発注を行った人物は特定出来たのですか」

「ああ。発注時には名前を偽ったようだが、支払いには東PAYを使わざるを得ないからな。店舗にしっかりとデータが残っていた。二年の暁という生徒だ。本日中に無期限の停学処分を通知する」

無期限の停学処分、これは殆ど放校に近い。いつ停学が解けるかわからないまま島外で身分のない人間として生きていく不安は察するにあまりある。であれば、新天地を探して再出発するのが賢明な判断だと殆どの人間であれば考えるだろう。

退学処分にするほど罪状は重くない。この人物が購入した物品が校内における違反行為に使用された、ただそれだけのことだ。だから停学処分、ただし無期限。

「なあ、九条。それから松井、類地」

名前を呼ばれるとは思っていなかったのか、寧と茜は互いに顔を見合わせ、

「はい」「私ですか?」と不思議そうな顔をした。

「お前ら三人、ここに引越すつもりはないか」

「ここって……生徒会室にですか!?!」

茜が驚愕に身を仰け反らせ、寧も目を見開く。

「そうだ。ここには鍵が閉まる個室がいくつもある。本来相談者が複数訪れた場合に互いの話が聞こえないようにするためのものだが、まあ問題はない。お前らは生徒会の契約メンバーだからな」

忍は前に、生徒会メンバーでない者は通常の営業時間外に生徒会室にいてはならないと述べていた。

「もしかして、このことも考えて俺たちを契約メンバーなんていう謎の職位を創設してまで生徒会の一員にしたんですか」

「まあな。だが、無理にとは言わない。畳一畳半の空間での生活を強要することは、流石に出来ないからな。だが、奴の攻勢が始まった以上、万全を期すべきだと俺は思う」

三人は顔を見合わせ、

「私は全然問題ないけど……、でも、お風呂とかはどうすれば？ その時だけ部屋に戻る感じですか？」

「ん、そうか。まだお前らには紹介してなかったな」

そう言っつて忍は席を立ち、

「付いてこい」

忍は入り口からみて左の奥の方に歩みを進める。そこには本棚があり重厚なファイルが多数並んでいた。

と、忍は本棚の天板に手を掛け、横にスライドさせるように力を込めた——すると。

ガラガラガラ。音を立て本棚は左方向にスライドし、空いた空間は壁ではなくさらなる空間に繋がっていた。

よくよく見てみると、本棚がある床には図書館の閉架書庫にありがちなスライドが可能な機構が設置されていた。

と、そこで寧と茜は、

「よく噂に聞いた、学内マップには乗っていない生徒会室の隠し部屋、本当にあったんだ」

「ね！ 外から見ると謎にそこだけ出っ張ってるからって、夜中に境界線を越えてまで見に行こうとか計画してる男子達いたよなつかしー。それでバレて大目玉食らってさー」

確かに、とてもきれいな形状をしている校舎の一部だけが不自然に出っ張っていたら、さらにはそれがマップ上ではないことになっていたのなら、噂にもなるだろう。七不思議に使われてもまるで不思議はないくらいだ。

忍は二人の相手はせずに、ぐんぐんと奥の部屋に入っていく。仁は二人の肩をぽんと叩き、忍の後を続いた。

奥の部屋は表の生徒会室の半分くらいの広さで、多くの備品と思しき物品達が積み重ねられている。最初に目に付いたのは、上履きの白箱がいくつも上に重なり、さらにはそれが列を成しているエリアである。上履きへの悪戯は想定内であり、生徒会が大量の上履きを購入していたのであった。そこから目線移すと、二Lペットボトルのケースが積み重なっているエリア、非常食メーカーの名前が入った段ボールが積み重なるエリアなどがあり、さらに視線を移すと、金属バッドや防護盾、防護服などの物々しい備品も散見された。

「これ、最近買ったって感じじゃないですよね」

仁の問いかけに、忍が頷く。

「ああ。これは最も生徒会と生徒達との対立が深刻だったころの遺物だ。といっても一〇年も立ってないがな。——これを使わなくても済むことを願うばかりだ」

全くだ、と仁は思った。

多くの学生が武装しての全面戦争など、想像したくもない。もしそうなれば、仁は寧と茜を連れて逃げ出すだろう。人生恥はかきすてである。それより二人の安全のほうが仁にとっては遙かに重要であった。

「さて、話が逸れたが、そこを見る」

忍が指さしたのは、部屋の最深处。そこには小さめの個室と大きめの個室が一つずつ並

んでいた。その隣にはキッチンと冷蔵庫もある。

「あれがトイレと風呂だ」

「……風呂トイレ完備の生徒会って一体」

寧の疑問はもつともだが、防護服やらが置いてある部屋についてそれを言うのは野暮だろうと仁は思った。

恐らく当時の生徒会も生徒会室に立てこもる必要を感じ、扉や壁を強化したのみならず生活に最低限必要な生活インフラを整えたのだろう。

「でも、確かにこれなら生活に不自由はしないかもー」

「決定だな。放課後すぐに荷物を纏めてこい」

「はい」

「了解ですー！」

寧が静かに頷き、茜は右手をビシッとおでこに当てる敬礼のポーズをとった。

「よし。そうしたら、もういい時間だからお前らは先に教室に行け」

仁が腕時計を見ると、秒針は八時二〇分を指していた。授業は八時半から。余裕をぶっこいていると遅刻しかねない。

「何から何までありがとうございます」

「ふん。いいからいけ」

仁らは忍に頭を下げ、生徒会室を出た。

「まさか生徒会室で暮らすことになるなんて、想像もしなかったな」

「私もだよ。でも、遅くまでみんなと一緒にいられるから楽しみかも」

「おいおい。遊びじゃないんだからな」

「はーい」

とはいえ、と仁は思う。

可能なら、二人には少しでも心穏やかに過ごして欲しい。常に敵を警戒し続ける毎日など息が詰まりとてもじゃないが続かないからだ。その意味では、生徒会室は中々の防御性を誇るようだし、生徒会室にいる間は緊張を解ける時間になるだろう。

そういう意味でも、生徒会室への移住の提案はとても有難いものであった。

移動中、見ようとするまでもなく視線に飛び込んでくるものがあつた。ポスターである。

やはり螺旋階段から四階の廊下部分に至るまで、考え得る限りの壁という壁にポスターは張り付けてあつた。一人や二人の仕業ではありえない。一〇人単位の人員が投入されたことは間違いないだろう。

内容としては、こんなことが書いてあつた。

——九条仁はあらゆる遺伝子が改竄された人造人間である

——神の理に背き誕生してしまった、悪魔の子である

他にも何パターンか存在したが、大体似たような内容であつた。

教室に到着すると、時刻は二五分であつた。いくらか余裕を持って到着することが出来たようである。殆どの席はすでに埋まっているものの、まだ担任の先生の姿は見えない。

三人は黒板に張り出された座席表を確認し、それぞれの自席へと向かう。  
と、そこで。

「……ほう。こうきたか」

自席にたどり着いた仁がみたものは、天板に隅々まで落書きがなされた机に、画鋲がびっしりと張り付けられた椅子であった。

「まあ、ありがちな。そんなことより——」

仁は寧と茜を探した。二人はすでに着席しており、前を向いていた。二人の席にまでは悪戯の魔の手は届いていないようで、仁は一安心した。

「あの……!」

声の方をみると、仁の席から通路を挟んで左隣の席に座る女子生徒——座席表には玉樹桜とあった——が気まずそうな表情で言った。

「それ、私 came 来たときにはもうそうなつて……」

と、親切な少女、桜のそのまた左隣の女子生徒——大板昭子——が桜の肩を掴み、

「ちよつと、やめときなよ。へんに関わるとアンタも標的になるよ」

「で、でも……」

親切な少女は親切だが、そうでない方の生徒が悪いとは仁は全く思わなかった。むしろ彼女のバランス感覚こそがこの修羅の世の中を生き残るためには必要なのであって、親切な少女はいつかどこかでその優しさを食い物にされないかと不安になってしまう。

仁は親切な少女に、努めて穏やかな表情と口調で伝えた。

「心配してくれてありがとう。だけど、そつちの子の言う通りだ。俺に関わつてもろくな目に遭わない。だから、今後は俺に何があつても心配ご無用、無視して欲しい」

「そういうこと。仁君には私たちがいるから」

と、いつの間にかやってきていた寧がそう言って桜の机に手をつき、にこりと笑顔を一確かに笑顔なのだが、何故か少し圧を感じるそれを——桜に向けた。

「そつそ。九条君を心配するのは私たちの役回りだし」

いつの間にか仁の背後に回っていた茜が、椅子を持ち上げると教室の隅に持つて行った。

「お、おい。危ないから触るなよ」

「大丈夫だよ、ちゃんと確認したしさ。全く九条君は過保護なんだから。でも、椅子と机どうしようね？」

「空き教室から予備持つてくるしかないよね。先生来たら事情説明してひとつ走り五階までGO、かな」

「うん、もういいから席に戻った方がいいぞ。先生そろそろきちやうし」

そんな三人の会話を、クラス中の生徒が聞いていたわけであり。

一人の男子生徒がぼつりとこうこぼしたのも、無理はないだろう。

「松井に類地つて……。九条、羨ましいにもほどがあるだろ」

この日はクラス替えしてからの初日ということもあり、長めのHRが実施された。その間に仁は事情を説明し、机と椅子を五階の空き教室——健次郎と話をした部屋——から持つてきて、代わりに悪戯されたそれを持ち出したのと同じ場所においてきた。担任のいうところによれば、そこにおいておけばそのうちどうにかするとのことである。

長いHRを終え、授業に突入する。授業が終わると、一〇分の短い休み時間である。

仁は持参した哲学書を読みつつ、クラスで話されている会話に聞き耳を立てた。決して自分の悪口が言われていないかチェックするためではなく、二五日に公開した巖の罪に関する情報がどれほど真なるものと受け止められているかを確認したかったからだ。

仁らの作戦では、巖の評判を地の底まで落とし、それと対立する生徒会（+仁）を殆どの生徒が支持するような状況をつくらなくてはならない。

そして事実、教室で交わされる会話の多くは巖の罪に関することであった。中には鋭い生徒もいて、あの告発と仁に対する過剰な嫌がらせを関連付けようとする者もいたが、多数派の意見はそうではなく、仁に対する嫌がらせは単に人造人間・九条仁が嫌いな勢力によるものであり、巖の件とは無関係というものであった。

巖の罪の告発について、一旦は成功といい、と仁は考えた。

まず最初の段階で重要なことは巖の罪を学内の周知の事実とすることであり、仁に対する嫌がらせはむしろ、まだ今のところはノイズなのである。余計なことは考えず、巖の罪について議論しつくしてくれることを仁は願った。逆に一番嫌なのは、あれが単なるフェイクとしてみんなに認識されてしまうことである。

——そしてこの日の午後、五限目の最中にポータルサイトが更新された。

更新者は学園公式アカウントで、その投稿内容は、件の巖の犯罪行為に関するスクリーンショットに関して、学園としては単なるフェイクであると考えており、投稿者が特定出来次第退学処分も含めた厳しい処罰を検討しているというものだった。

そしてほぼ同時刻、学長よりチャットが届いた。

——本日放課後、学長室に来てください。

仁が扉を開けると、学長はすでに応接用の椅子に腰掛けていた。

特に許可も得ずに向かいの椅子に座ると、仁は口を開いた。

「何か俺に用ですか、学長」

学長ははあ、と深くため息をついて、

「心当たりがないとは言わせませんよ」

仁は不敵な笑みを浮かべ、

「ええ、ありますとも。その上でもう一度問います。——俺に何か用ですか」

苦虫を噛みつぶしたような表情の学長は、ゆっくりと二度三度とかぶりをふり、

「君のような化け物に、隠し事をして、そのまま押し通せると考えた私が甘かった、それは認めましょう。しかし、君は自分がしようとしていることがどんなことなのか理解していない」

仁は半目で、

「そうですかね？ 生徒会や学園の権限で退学に追い込めない大岩を唯一退学に追い込む方法、それが奴を学園内で孤立させ、自主退学するような状況を作り出すこと——しっかりと説明できますが」

「そういうことではないのです」

学長は前屈みからどさっと深く椅子に腰掛け、

「君が生徒会と手を組み対大岩君の布陣を敷こうとしていることは知っています。ですが、はつきりいいでしょう。君たち負けまずよ。それはもうボロボロに」

仁は反論の言葉を挟もうと思ったが、できなかつた——学長の目が真剣そのものだったからだ。

「君たちは、黒神君も含めて大岩巖という存在を理解していない。当然です。彼の深淵は深く、一朝一夕で見通せるようなものではない。私はこれまで、一大企業の役員にまで上り詰める過程で多くの人間を見てきました。しかし、彼を超える闇を私は知りません」

「……それで？ 大岩の闇が俺には見通せないほどに深いとして、それがどうしたというんです」

仁の問いに、学長の答えはシンプルだった。

「深い闇は、手段を選ばない」

その迫力に、仁は少し気圧された。

初老の男の、その有無を言わせぬ迫力に。

「君たちは確かに優秀です。生徒会は学年の首席、次席の集まりで、君に至っては世界最高峰の頭脳と言っても過言ではない。ですが——、そういうことではないのです。君たちは絶対に敗北します。そしてそれは君たちが常識に囚われているからなのです」

常識。無意識に人間を縛るもの。

巖はそこから解き放たれている？

仁は巖をこう捉えている——基本的には冷静で慎重だが、ただ一つの例外として、茜に関するこの場合その慎重さはどこへやら、感情的な人間に早変わりする、と。

では、その変化が、常識すらも取っ払ってしまうほどであるとしたら？

そこまで考えて、仁は思考を中止した。

考えても意味のないことだからだ。いずれにせよ、立ち止まるという選択肢はない。それに、生徒会には十分な装備がある。最悪の場合寧と茜には生徒会室に立てこもってもらえばいい。それで二人の身の安全は確保出来る。

「ご忠告感謝します。では、俺はこれで」

扉に手を掛けた仁に学長は最後の言葉を告げた。

「忠告はしましたよ」

放課後。荷物を纏めた仁らは、生徒会室にやってきていた。

三人はそれぞれ鍵を渡され、個室に荷物を置いた。生徒会の備品だろうか、すでに個室にはマットレスが敷いてあり、最低限寝泊まりは出来る体制が整っていた。

仁らが個室から出てくると、生徒会役員達は長テーブルに全員集まっていた。

三人がいそいそと残った席に座り、そうして新生生徒会メンバーが勢揃いすると、

「うん、なんだかい感じだ。正直俺、生徒会が五人てのは少ないんじゃないかと思つてたんだよな」

気の抜けた友樹の発言に、一瞬和やかな雰囲気の流れる。

「さて。今日の議題は、演説会についてだ。——神宮司、この演説会の目的について説

明してみる」

「はい。現在情報が錯綜しどの立場を取ればいいかわからず揺蕩っている状態の生徒達を生徒会サイドに引き寄せるための演説会です」

「その通りだ。そこでこのファイルに綴じられたリストが重要になってくる」

そう言って忍は、手元のファイルをポンポンと叩いた。

「リスト……：そういえば、そんなことを以前言っていましたね」

あれは、仁達が生徒会に協力を要請しに行った日だ。

「このリストは元々、対大岩の切り札としてこつこつと調査してきたものだ。具体的には、生徒の立場をそれぞれ表にして記している。例えば①大岩と近い仲、②大岩に弱みを握られている可能性が高い、③反生徒会——このあたりを招待してしまうと、演説会を台無しにされる可能性がある」

確かに、ヤジを飛ばされたり、下手したら暴れて演説会どころではなくしてしまうようなことも考えられる。特に巖に弱みを握られている人間は、巖の指示であればどんなことでもする可能性がある。その意味でこのリストは非常に有用と言えるだろう。

「高校入学組はどうするんだ？」

芙美が問い、忍が答える。

「高校入学組はまだ十分に調査出来ていないが、大岩に弱みを握られるにも、反生徒会の感情を持つにも早いだろう。基本的には全員招待していいはずだ」

「となると、問題はいつにするかですね。後は招待の方法の問題もあります」

龍牙の言葉に、生徒会室はしばし静寂に包まれた。

全生徒を招集することは生徒会にとつてたやすいことだ。しかし、生徒会で選別したメンバーのみを秘密裏に招待することは難しい。仮にメッセージを受け取ったことを誰にも話さないでほしいと付け加えたところで、話す人は話すからだ。むしろ人間は話すなど言われると話したくなる生き物である。

そして生徒会の主催で招待制の会合があると巖に知れば、会合の目的に気づいて刺客を送ってくる可能性がある。

静寂を破ったのは、忍だった。

「開催は今週中がいいだろう。それも、できるだけ早いほうがいい」

芙美は厳しい表情で、

「初日であの有様だからな。生徒からバイトを募集して現在撤去を進めているところだが、恐らく明日以降も同様の被害が続くだろう。こちらも早朝の校舎見回りメンバーを集めているところだが、犯人と遭遇する可能性がある危険な仕事だからな。人も集まりも剥がしバイトに比べて芳しくない。現状後手後手だ。黒神の言う通り、なるべく早いタイミングでこちらからも手を打つべきだな」

忍は頷き、

「次に招待の手段だが——まず、招待メッセージは会の開催一時間前に送信することとする。時間があればあるほど情報は伝達するからな」

「一時間前、ですか」

「神宮司、お前の言いたいことはわかる。確かに告知が一時間前では、すでに予定が入っている生徒は来られなくなるかもしれない。だが、今回の演説会に関しては映像を撮っ

ておくつもりなのでな。不参加であった生徒達にはそれをみてもらうことで対応可能だ」それから、と忍は続ける。

「当然だが、招待メッセージに集会の目的を正直に書くことはしない。対象の生徒に周知事項があるとか、ぼかした書き方をする」

「でも、それだと誰か参加した人に後で話を聞けばいいやって生徒が出てきませんか？」寧の疑問に、忍は頷き、

「その通りだ。よって今回招待を受け集會に参加した生徒には特別手当を出す。これならばよほどの理由がない限り参加してくるだろう」

かなり強引な方法だが、悪くないと仁は思った。

一番問題なのが、巖に集會の開催が早々にバレ、準備の時間を与えてしまうことだ。最悪小規模の刺客が送り込まれたところで、数の利で鎮圧出来る可能性が高い。だが、もし多数の——それこそ一〇〇人規模の——作業着に仮面の生徒達が突入してきたら？ もはや演説どころではない。事態の収束が第一目標に早変わりだ。

「他に何か意見はあるか」

無言で首を振る生徒会の面々。

「決定だな。——実行は明日だ。各自準備を進めるように」

四月二十九日、火曜日。

この日、誹謗中傷ポスターの浸食は学生寮棟にまで進んでいた。深夜から早朝にかけての時間帯に行われたものと見られているが、寮棟には監視カメラがないため確かなことはわからない。流石に教職員の使用するD棟の被害は確認されなかったようだが、これも時間の問題かもしれない。

また、予想されたことではあるが、生徒会が募集し集まった校舎の早朝巡回を行う学生と、作業服に仮面でポスターを貼り付ける者達の間で小競り合いなども発生したようだ。巡回を行う学生達は、ただ映像を撮るなどして生徒会に報告するだけでもいいが、可能なら仮面を剥がし人物の特定を行いたい。仮面を剥がしその姿を映像に残した場合、一人あたり一〇万の報奨金を出すとあって、特に血気盛んな生徒達がこの依頼に応じたが、当然仮面の生徒達も抵抗するわけで、負傷者も出てしまったようだ。

ただ、巡回の生徒達の奮闘により張られたポスターの数は前日より遙かに少なく、それにはこの日だけで実行犯のうち七名が特定され、生徒会より無期限の停学処分を言い渡された。

案の定と言うべきか、この日も仁の椅子と机は細工されていた。というより、昨日空き教室においてきたものをそのまま持ってきたらしい。芸のない奴らだ、と仁は苦笑して、机と椅子の交換を行った。この日は教室に入ったのがギリギリだったため、交換は授業中に行うことになったが、一眼目の数学の先生は何も言わなかった。酷い有様の机と椅子にも、無言でそれら運び出す仁にも。昨日、同じシチュエーションで担任は渋い顔をしつつ「交換してきていいぞ。五階の空き教室から好きな持ってきて、そのままそれは置いてこい。……全く、物を大事にしない奴は嫌いだ」とかぶりを振っていた。教員にも色々



な立場の人間がいるようだ。

昼休み、三人は生徒会室で過ごした。他にもこの日は放課後に予定されている演説会に向けて、全生徒会役員が集結していた。

——そして、六限目が始まって三〇分が経過した、一五時一〇分。予定通り、生徒会が選定したメンバーにのみ、集会への招待メッセージが送信された。授業中ではあったものの、スマホを見ているような生徒はいる。

そうした生徒から、次第に、波のように、メッセージの着信が知れ渡っていく。仁ら一年生は全員がメッセージを受信しているが、二年生と三年生はそうではない。そのことに生徒達が気づくには、たいした時間が掛からないはずだ。果たしてメッセージを受け取った生徒とそうでない生徒の差は何なのか？ 授業中なため口頭で話は出来ないだろうが、チャットを用いて議論が盛り上がりたりはしていることだろう。巖が真相にたどり着くのが可能な限り遅れることを、仁は願った。仁だけではなく、おそらくは全生徒会の所属員が。

そして、放課後。

高等科校舎付属体育館には、生徒会メンバーが勢揃いしていた。

他にも、今朝の巡回員達を中心とした、有事のための警備員もすでに控え室に詰めている。なお、座席などの設営は六限目の時間帯に業者を呼んで完了させたようである。

「いやあ、うまくいくといいなあ！」

友樹がいつも通り陽気にそんなことをいう。

「そうだな。この演説会の成否が、今後の大岩との戦いに大きな影響を与えるのは間違いないからな」

芙美が腕を組み、真剣な表情で友樹に同調する。

「まあ、黒神会長ならやってくれるでしょう。……その後の九条のターンが不安ですが」

「……ちよつと、神宮司君？」

寧がジトツとした目を龍牙に向ける。

「神宮司の不安はもつともだ。なんたつて他ならぬ俺が一番不安なんだからな」

仁は両の手の平を上にして肩くらいまで持ち上げ、一回、二回とかぶりを振った。

「ほら、ネガティブモード入っちゃった。こう見えて仁君結構繊細なんだからね」

「こいつが？ とてもそうは見えないがな」

「確かになー！ 緊張って概念と無縁だと思ってたぜ」

龍牙が訝しげな視線を仁に向けてそんなことをいい、友樹もケラケラと笑いながらそれに続いた。

「緊張は確かに、殆ど感じることはないかもしれませんが。ただ、現実を誤魔化すことな  
く見据えているだけです。すると、人生とはなんと苦難の連続なのかということに気がつ  
いて、中々ポジティブでいるのは難しい。ただそれだけのことです」

「おー、なんか九条が哲学的なこといいでした」

相も変わらず友樹が笑い飛ばし、芙美が、

「九条は考えすぎだが、お前は考えなさすぎだ」

と苦笑した。

「お前ら、雑談はそこまです。始めるぞ」

警備を担当する生徒達を伴って、忍が控え室から現れた。そして、手に持っていた台本をポイと芙美に投げ渡す。

「おっとつと。……おい黒神、投げるなちゃんと渡せ」

なんとか台本をキヤッチした芙美は文句をいうものの、忍はそれを無視して、

「入場の時間だ。友樹、会場を開けてくれ」

「はいっ！」

友樹は彼らがいた壇上からひよいと飛び降りて、壇上の正面、連絡通路側の扉に向かっていった。二人の警備担当者もそれに続く。

そして、扉が開かれると、ぞろぞろと生徒達が入場してくる。入り口にて受信したメールを見せることで入れるシステムだ。

講演会の演目は二つしか予定していない。まず忍が話し、続いて仁が話す。ただそれだけだ。他のメンバーは特段仕事がないが、それでも勢揃いしているのは、生徒会が仁のことを強力に後押ししていることを印象づけるためであった。通常生徒会役員が壇上にずらつと並ぶことなどそうはないため、異例の光景に生徒達は生徒会の強い意志を感じるだろうという忍の考えだった。忍がそういうまでは、実際に話をするわけではないメンバー達は控え室で見守っているという話で纏まり掛けていたのだ。

段々と体育館に集まってくる生徒達だが、壇上の仁の姿を認めたせいであろう、ざわざわと騒がしくなっていく。

「大丈夫か、これ」

仁がポリポリと頭を掻きながら独りごちる。

「大丈夫、会長と自分を信じて」

仁の左隣に座る寧が、右手を仁の左手に重ねる。

「……そうだな」

ここに集まったのは、少なくとも生徒会に対しては最低限中立の立場を取っていると思しき生徒達だ。無論そのことは反九条仁であることと両立するわけだが、それでも彼らのうちのいくらかは、学園の権力者集団たる生徒会が強力に仁を支持しているという事実を受けて改心してくれるかもしれない。

また、仁について中立の立場であれば、忍の演説、そして仁の演説次第で十分に生徒会サイドに引き寄せることができる可能性がある。

最後に、内心では仁に対し同情しているものの、学園の雰囲気飲まれて意思の主張をするには至らなかった生徒達。彼らは高確率で引き込めるはずだ。

概して分のいい勝負をしようとしているのだから、弱気になる道理はない。  
と、そこで。

「では、そろそろ始めさせて貰おうと思う」

忍は壇上の前方マイク前まで出て、そう告げた。

それまで騒がしかった生徒達が、途端に大人しくなる。そんな生徒達を忍はゆっくりと見渡して、

「本日は突然の召集にも関わらず多くの生徒が集まってくれたこと、誠に感謝する」

こほんとおつ咳払いを挟み、忍は続けた。

「して、本日の集会についてだが大きく二つの論点がある。とはいえこれら二つは繋が

っているということを先に言っておこう。一つ目はお前たちも当然知ってのことと思うが、現在学園内で起こっている九条仁への度を越えた悪戯——いや、犯罪行為についてだ」

ざわ、と小さいざわめきが走る。仁が壇上にいたことで予想がついていたために反応が薄くなったのだろう。

「そして二つ目——、先日ポータルサイトに投稿され学園側がその正当性を否定する声明を出した、三年C組所属・大岩巖の学内における多くの犯罪行為に対する自供と取れるチャット履歴、そのスクリーンショット——この正体についてだ」

先ほどよりも数段大きなざわめきが体育館を満たした。これは予想していた生徒が少なかつたのだろう。

「先ほど言ったように、一見関係のないように思えるこの二つの論点にはつながりがある。何故か？ それを説明するには、まず当該スクリーンショットの自身について考える必要がある。あれは過去の大岩と他生徒とのチャット履歴であり、現在はずでに削除されているものだ。だが、そうしたデータはポータルサイトと連結しているデータベースに全て残っている。そして、そのデータベースをハッキングすることにより得られたのがあのスクリーンショット達というわけだ」

ハッキングという言葉に、多くの生徒が困惑の表情を浮かべた。

「つまり、あれは実際に過去になされたチャットであり、その中で大岩は自身の犯罪行為について雄弁に語り、あまつさえそれを自慢しているのだ。そこで、生徒会長の名をもつて断言する。先日出された学園の声明は完全に誤っていると」

もはや集まった生徒達は混乱を極めているように見える。特に高校組の一年生などは、何故学園がそのような嘘をつくのか到底理解できないだろうから仕方がない。一方でこの学園に長くいる生徒達は、大岩の父について少なくともうっすらとくらいは知っている者が多い。そのため、納得しているかとはかくととして、全く理解出来ないという生徒は少ないだろう。ただ、それでもこうして、生徒会と学園サイドが対立する場面に出くわせば混乱するのも無理はない。誰しもが考えるはずだから、自分はどちらの立場を取るべきなのか、と。

そんな群衆の思考を読んだかのように、忍は続ける。

「ただ、勘違いしないでもらいたいのは、確かに我々生徒会と学園側は当該スクリーンショットの正当性に関して異なる立場に立ってはいるが、少なくとも生徒会としては学園側との溝を深めたいとは考えていないということだ。我々は独自に大岩巖の犯罪行為について調査を行う——その際に学園側の見解などどうでもいい」

対立するつもりはないと言ってはいるものの、いちいち言葉が強いために生徒達からすると、「本当か？」という疑問がわきそうではある。

「黒神、攻めてるな……大丈夫か？」という芙美の呟き、これは生徒会メンバー全員の本音ではないかと仁は思った。

「さて。これまで聞いて貰って、まだ二つの論点のつながりが見えてこないだろう。そこで、一つの事実を公表する。当該スクリーンショットは生徒会が九条仁に依頼して入手し、後に公開したものであることだ。あいにく我々生徒会メンバーはそうしたことは疎かつたため、多彩な九条に白羽の矢が立ったわけだな」

ハッキングを生徒会が依頼したという告白に、この日一番のざわめきが起こった。

そして、一人の生徒が立ち上がり、言う。

「どのような事情があったにせよ、ハッキングという犯罪行為を生徒会が依頼したという事実は重いと思いますが、会長はその点についてどうお考えなのですか」  
多くの生徒が頷き彼の質問に賛同を示すなか、忍は答える。

「お前の言う通り、黒い手段を用いたのは事実だ。だが、敵は黒も黒、深淵に潜む大犯罪者だ。長年に渡り賭場を開いては参加者のみが映る映像を残して脅しの材料とし、時には自身が所属するボクシング部の部員を全員病院送りにおきながらその事実を揉み消し、——さらに今回、自身の過去の行為を白日の下に晒した九条仁をターゲットに定め、多くの生徒を脅して嫌がらせを繰り返している。しかも自身は決して表に出ることがないため、我々が実行犯を捕らえても大したダメージにならない。奴からすれば、手駒がいくらか減ったくらいのものだ」

忍は険しい表情で、

「ここにいるお前たちも、いつ奴に弱みを握られるかわからない。そしてそうなれば、いつかそれを元に脅され、したくもない犯罪行為の実行役となり、もし現行犯で捕まれば重い処分を受けることになる。いいか、誰も他人事ではないのだ」

つまり——、と、忍は続ける。

「先ほどの質問に答えるならば、こうだ。目には目を、黒には黒を。時には正攻法だけではどうにもならない——救えないものがある」

質問した生徒は、完全に納得した様子ではなかったものの、「言い分はわかりました」と引き下がった。

「さて、九条仁に対する嫌がらせの話に戻ろう。どのようなことが行われているのかは説明するまでもなく君たちも知っているだろうから、あえてこの場で並べ立てるようなことはしない。問題なのは、多くの大岩に弱みを握られた生徒達が今回、ポスター貼りなどの行為に参加させられている点だ」

また、先ほどとは別の生徒が立ち上がり、尋ねる。

「お言葉ですが、九条仁に対する嫌がらせが彼を嫌う勢力によるものという可能性はないのですか？」

「そうであれば、我々も処罰するのに心が痛まないのだがな。今日だけで七人に我々は停学の処分を下したが、その際彼らが口を揃えたのは、大岩に脅されてやったということだ」

体育館がしんと静まり帰る。

「我々としては、この事態を大変重く受け止めている。九条自体への心配はもちろんのことだが、あのようなポスターが貼られては学内の風紀が乱れる上に、本意にも実行役の生徒達を処分しなければならぬ。このような事態は早々に収束させる必要がある。そこでお前達にお願いしたいのが、こうした行為に決して加担しないことだ。可能ならポスターを見つけ次第剥がすなどの対応も願いたいだが、無理にとは言わない。とにかく加害者にならないこと、それから誰かから賭博の誘いを受けても決して乗らないこと。それが最低限お前達に求められることだ。それが、お前達自身のためにもなる」

と、そこまで語り終えると、忍は体育館に集まり自分の話に耳を傾けている生徒達をゆっくりと見渡した。そして。

「俺からは以上だ」

パチパチ、とまばらな拍手が起こる。期待していたほどの成果ではないな、と仁は思った。同じ気持ちだったのだろう、「厳しいな……」と芙美が呟いた。

忍が戻ってくる。そして、

「――すまない」

一言、そう言って空いた席に座った。

仁を初めとした生徒会メンバーはぼかんと口を開け、目を見合わせた。

仁はまだ一月にもみたない付き合いだが、それでもわかる――黒神忍は、謝罪などするキャラクターではない。

だがそれは、彼が有能すぎる故にこれまで失敗といえる失敗をしてこなかったということもあるのだろう、と仁は推測した。

しかし――と、仁は思う。

忍のスピーチは決して悪いものではなかった。多少言葉が強い部分はあったにせよ、現在起きていることを明確にし、また話を聞く生徒達に何を求めているのかをしっかりと説明した。それも、決して高い要求を押しつけたわけでもなく、極々当たり前の、それでいて巖の策略に対し効果のある行為を推奨した。

それでも期待した反応が得られなかったのは、一つにハッキングという行為がいくら犯罪行為を暴くためとはいえ、よい印象を持たれなかったということ。そして、九条仁が想像以上に嫌われているということだ。

「ま、なるようになるか」

忍でこの様子だと、仁のスピーチなどどんな反応になるのか想像もしたくない。

しかし、それでもやることはかわらない。

仁は不安そうな寧と茜に小声で「大丈夫」と呟くと、立ち上がり、先ほどまで忍が立っていたマイクの前まで進んだ。

先ほどまでの忍の話の直後ということもあってか、直接的な暴言などが投げかけられることはなかった。しかし、決して歓迎ムードというわけでもなく、どころか多くの生徒は胡乱な目を仁に向けていた。

なんのことはない。仁にとってはただの日常だ。

仁は、聴衆を前にして考えた。

台本は用意してきた。当然すべて頭に入っている。

だが、それをここで語ったところで、意味がない気がした。

忍でダメだったのだから、仁でもダメなのは目に見えている。

だったら、台本の綺麗な言葉など打ち捨てて、自分の生の声を語る方が幾分かマシなのではないか。

誰かに、届くのではないか。

そんな風に、仁は思った。

マイクの前に立つても口を開かない仁に、生徒達にはわかにはざわつき始める。背後では自分を心配する気配を感じた。

「はつきり言おう。俺は誹謗中傷など慣れきっている」

予定にないしゃべり出しに焦ったのか、小さく自分の名を呼ぶ寧の声が聞こえる。

「だから、どんなポスターを貼られようが、どれだけ陰口を言われようが、あるいは直接暴言を浴びせられようが、今更どうということはない。——もしそんなことで心を病んでしまうような性格だったら、俺はもうこの世にはいないだろう」

シン、と静まり帰る体育館に、仁の言葉だけが響き渡る。

「世の中には、有名税って言葉がある。そんな税金は実際には存在しないわけだが、しかし世の中の人間の一定数は、有名人なのだからそれくらい我慢すべきだと考えている。俺のことも、それと同じなんだろう」

不思議と、話の展開など何も考えていないのに、仁の口からはすらすらと言葉がでた。あるいはそれが、普段から仁が考えていたことだからなのかもしれない。

「俺の親父——九条斎郷が起こした世紀の大事件、それによって生まれたのが俺だ。あらゆる当時理論上可能だった全ての能力のエンハンスメント、そうして生まれた新人類、あるいは改造人間。他の人と同じように扱ってくれと願う方が無理があるんだろう」

そんなことない、という寧の消え入りそうな声を、確かに仁は聞いた。

「俺に対してどんな感情を持つのが自由だし、それを表に出すことも許容したいと俺は考えている。先ほど会長は加害者にならないことと言っていたが、悪口くらいなら被害を受けたとは思わないから安心して仲間と俺の悪口で盛り上がってくれてかまわない。だが、物理的な嫌がらせに関しては流石に俺としても対応せざるを得ない。生徒会も俺を支援してくれると言っているからな、停学になりたくなければ悪口程度に押さえておくことだ」

本心だった。ネット上などでどれほど誹謗中傷を受けようと仁の心が動くことはないが、自宅への嫌がらせなどには本当に悩まされてきた。動物の死骸が代引きで送られてきたり、ゴミが敷地内に投げ込まれたり。これらは一々警察に相談してもきりが無いし、対応に有限の時間がゴリゴリと削られていく。物理的な嫌がらせ、これが仁にとって最も面倒な有名税だった。

「まあでも、下駄箱に泥が塗られたりたくられようが、机と椅子にいたずらされようが、大した問題じゃない。最悪殴りかかってくる奴がいたとしても、怒りはしないだろうな。馬鹿だなとは思うだろうけど」

世の中は理不尽の連続だ。特に有名人は、それらに一々怒り散らしては持たないの  
で、段々とこういうメンタルが育ってくる。あるいはそうなれずに潰れていく。

「——だが、そんな俺でも一つ、許せないことがある。それが、俺によくしてくれる人たちへの攻撃だ。幼馴染みでこの世で一番大切な人、寧。こんな俺とともに戦うと決めてくれた生徒会の面々。そして、俺の元ファンガールであり、一度大岩によって許されざる犯罪行為の被害者となってしまった茜。今のところこの面子だな。もしこの七人に何かあれば、必ず犯人を見つけ出して、二度と起き上がれない体にしてやる。脅しじゃない、単なる事実だ。何故なら俺には失う物がない。元々堅く困った自宅から一歩も出ない生活をしてた俺だ、刑務所に入ったって大して生活は変わらんさ。お前らとは前提条件が違うんだ。もし変なことを考えてる奴がこの中にいるのなら、今言ったことを一度思い出して、それから実行するか決めることを勧めよう」

静まりかえる体育館には、重い空気が流れていた。

やってしまったな、と仁は思った。これでは単に威圧しただけだ。やはり会長が書いた原稿を読み上げるべきだったか。

と、そこで。

前方から、かすかにドドドという、走るような音が聞こえた。それも一つではなく、同じ音がいくつも重なったような、そんな音だ。

体育館内には異変はない。しかし、他にも音に気づいたであろう生徒達が背後を振り返るなどしているため、どうやら仁の勘違いというわけではなさそうだ。

そして、数秒後。

すでに閉じられていた渡り廊下と繋がる扉が開け放たれ、青の作業着を着て仮面を被った集団が雪崩のように突入してきた。その数約三〇名。

大混乱に陥る生徒達をよそにその集団は壇上前までやってきて、連呼した。

「人造人間は学園から出て行け！」

「NO改造人間！ 人間のふりをした怪物！」

警備のために生徒会が雇った生徒は五名。そこに生徒会の男性メンバーを合わせても九名、三倍の差がある。

しかし、彼らはただ言葉を発しているだけだ。先ほど悪口はOKと言った手前、強引な手段に出ることは躊躇われた。

だが、そこで予想外の事態が起きた。

「帰れ！ ヘイトスピーチやめろ、気分悪いんじゃ！」

一人の男子生徒が体育館中に響く声で叫んだのだ。

すると、それに呼応するように、

「そうだ！ ヘイトスピーチはやめろ！」

「素性を隠して悪口連呼って、恥ずかしいと思わないのか！」

体育館のあちこちから、青の集団を批判する声が上がる。

と、そこで、たじろいでいた青の集団のうちの一人が声を上げた。

「なあ、神宮司！ お前はいいのか！」

突然名指しされた龍牙は、訝しむような表情で、

「……何の話だ」

「この前の実力テスト、お前は二位だった！ ずっと一位を守り続けてきたお前がだ！ 悔しくないのか!?! 神の理に反し造られた偽りの天才に、本物の天才であるお前は負けたんだぞ」

心からの言葉だと仁は感じた。他はどうだか知らないが、この生徒だけは少なくとも本当に仁を嫌っていて、それが故にこの青の軍団に参加したのだろう。

龍牙ははあ、と深いため息をついて、

「そりゃ悔しいさ」

「ほら見たことか——」

「満点を取れなかったことが、な」

「なっ——」

絶句する男に、龍牙は続ける。

「これまでの俺は、確かに努力してきたが、それ以上に才能のおかげでずっと一位をとり続けてきた。そしたらもっと才能が上のやつがきた、ただそれだけのことだ。その時俺が取るべき行動は、さらに努力して才能の差を埋めんとすること、あるいは無理だと諦め

ること、そのいずれかだ。才能の差を恨むことじゃない。それから、誰かの才能が天然かどうかなんて興味もない」

理解を求め、そして拒絶された男は、へなへなと座り込んでしまった。  
と、そこで。

「もういいだろう。解散だ。我々生徒会もお前達を取り押さえる戦力がないし、とお前達のヘイトスピーチはこの場では受け入れられない」  
いつの間にもやら最前列に出てきていた忍が、そう言った。

「……それじゃ俺たちは帰れないんだよ！」

青の集団の一人がそう叫ぶと、集団は揃ってポケットから何やら球体状のものを取り出した。そしてそれを地面に叩き付ける。

瞬間、視界が白に染まった。球体状のものは煙幕玉かなにかだったらしい。

混乱する生徒達の声が聞こえる。

「落ち着け！ ただの煙幕だ、次第にはれる！」

忍が声を上げるなか、仁は、

「寧、松井！」

と、次第にはれてくる視界の中二人を探していた。二人は壇上奥の席に座っていたはずだ。

「仁君！」

寧の音が前方から聞こえた。声の方に向かうと、はれゆく視界の先に寧の顔が見え。

仁と目が合い笑みを浮かべたその頬に、ダーツの矢のようなものが突き刺さるのを見た。

視界が完全にはれたころには、青の集団は姿を消していた。

被害の規模はそれほど大きくはなかった。

集団は煙幕で視界を奪ったあとで、先端を金属製の鋭利な物体に取り替える改造を施されたダーツの矢を生徒会メンバーが揃う壇上目がけて相当数放ったようだ。しかし集団も視界を奪われていたためか命中率は低く、また当たっても服を掠めた程度だったり、運が味方したようであった。

——寧以外は。

寧は矢が当たり、顔に小さくない怪我を負った。矢の先端部分はかなり鋭利で、目に当たらなかつたことだけが不幸中の幸いであった。

保健室で治療を受けた寧は、嚴重な警備の元生徒会室に戻ってきていた。

「全く大げさなんだから。でも、これで仁君が大けがしてきたときの気持ち、少しはわかつた？」

人生で初めての涙を流しながら守れなかつたことについての謝罪を繰り返す仁に、寧はそんなことをいった。

二人を見るメンバーらの表情はみな一様に険しく、無力感に満ちているようだった。

気丈に振る舞いつつも表情に疲労感が出ている女子陣を休ませて、男性陣だけが長テールブルに座ったものの、誰も口を開くことはなかつた。



仁は健次郎や学長の言っていたことの意味をようやく理解した。  
大岩巖に関わってはいけない。

なるほど確かにぶっ飛んでいる。もし当たり所が悪ければ人が死にかねない危険物を持たせての荒らし行為。仁は想像だにしていなかった。

想定が甘かった。それは仁以外も思っていることだろう。

無言のままに、仁が立ち上がった。そして、方向を変え出入口へと歩き出す。

「どこへ行く」

忍の問いに、一度歩を止め、

「外の空気を吸ってこようかと」

そうして生徒会室を出た仁の後を追うように、龍牙が走ってくる。

そして、隣に並び、

「大岩のところに行くんだろ」

「……そうだとしたら？」

「俺も行く」

仁は深いため息をつき、

「やめておけ」

二人は階段を上り始める。

「あいつ、頭ぶっ飛んでやがる。その拠点に乗り込むことの意味がわからんはずがないだろう」

「その言葉、そっくりそのまま返そう」

「俺は特別製だからな。そこら辺のパンピーと一緒にしてもらっては困る」

「人間は人間だろ。武器持ち出してくるような相手に大差ねえよ」

それは人間の限界を知らないだけだ、という言葉は仁は飲み込んだ。これ以上は水掛け論だ。

「仮にそうだとしよう。しかし、俺には命に代えても奴に復讐する理由がある」

「それは俺も同じことだ」

仁の中で、何かがぶつりとはじけた。

「同じじゃねえだろ。お前、命を甘く見るなよ」

四階と五階の間の踊り場。仁は龍牙を壁に押しつけ、顔を近づけた。

「……うるせえよ。お前にとって類地が大切なように、俺にとってもアイツは大切なんだよ！」

龍牙はそう言って仁を押し返した。

と、そこで仁は思い出す。

そして、どうして忘れていたのか、と悔いた。

確かに、龍牙にも十分な理由があった。

「そうか……。お前、寧のこと好きなんだったな」

すると龍牙は途端に顔を赤くして、

「は!?! ……なんでしてんだよ。言ったことないだろ」

「んなもん見てりゃわかる」

そう言われ、龍牙は愕然とした顔をしていた。どうやら気づかれているとは全く思っ

いなかっただらいい。

「しかしまあ、それならそうか。……命を賭けるには十分だ」

「チツ、うるせえな。そもそもお前の許可なんか必要としてねえんだよ」

そんな話をしながら、二人は階段を上りきった。

五階の最奥部にある、とある未使用教室。

そこが巖の実効支配する拠点となっていることは、以前忍との雑談の中で聞いていた。と、そこで仁は一つのことを思いついた。

突如立ち止まった仁を龍牙が訝しげにみて、

「なんだ、ここにきてビビってるのか」

「馬鹿言え。……なあ。大岩の学内における支配力の源泉は、一つがその狡猾な知性だ。だが、どれだけ賢くても弱っちかったら行動には移せないし、誰も従わないよな。だって、脅されたって脅し返してやればいいんだから」

「ふん、なんだ突然、そんな当たり前のことを」

その当たり前のことを、仁は確認したかったのだ。

「……うまくいけば、俺たち二人で大岩を今の座から引きずり下ろせるかもしれないぞ」  
そう言って、仁は自身の考えを語った。

扉の鍵は開いていた。

仁と龍牙が乗り込むと、そこは元々教室だったとは思えないほどに充実した設備が整った空間だった。ソファに大画面のテレビ、デスクにはデスクトップのPC、壁際の本棚には漫画本がびっしりと詰まっている。

そしてそこにいたのは、多数の青の集団と、ソファに足を組んで座る巖だった。

「久しぶりだな、大岩。カラオケでは世話になった」

「ハハ、殴りすぎて頭イカれちゃったのか」

そんな話をしながら、青の集団を数える。その数一〇人ほど。

大岩はまだソファに深く腰掛けて余裕綽々だ。完全に仁らを舐めているようだ。

「で？ 今日の復讐に来たってか？ その心意気だけは買ってやらんこともないが、二人とはどういふことだ。黒神は逃げたのか？」

「バーカ、お前ごとき二人で十分ってことだ」

次の瞬間、仁は風になった。

一人、また一人と青服をなぎ倒していく。彼らには恨みはないため、一撃で、ただ昏倒させるに留めた。

——小学生の頃ですでに一〇〇M九秒台の俊足を生かし、全員を仕留めるのに二〇秒も掛からなかった。障害物が多いこの空間で、である。

「……マジか」

後ろの方から龍牙の驚く声を聞きながら、仁は未だソファから動こうとしない巖に言う。

「——さて、これで人数はこっちが有利だな」

「クッククック。嬉しそうだな、褒めてやろうか」

そう言いながら巖がようやく立ち上がる。  
そして伸びをすると、その巨軀からバキバキとおよそ人の体から出たとは思えない大きな音が鳴る。

「どれ、遊んでやろう——耐えろよ」

巖は右腕を大きく振りかぶり仁目がけて突き出した。  
パン。

と、仁はその右ストレートを左手で受け止めた。

「——は？」

口を開け間抜けな表情を浮かべる巖に、仁は言った。

「——耐えろよ」

掴んだ握りこぶしを上から握り潰す。

「ガアッ!」

堪らず腕を引き抜いた巖だが、時すでに遅し。

仁の握力は巖の手の骨を粉碎し、肉を抉り取っていた。

ポタポタと赤い液体が零れ出る拳を庇いながら、

「てめえ、この短期間に何しやがった!」

仁は、巖の言っている意味がしばらくの間よくわからなかった。

「……もしかしてドーピングとか、そういう話してるのか？」

「たりめえだ、この短期間でこんなに力が増すなんてありえねえだろ」

「——ふっ」

「何がおかしい」

仁は込み上げる嘲笑を抑える術をしらなかった。

「すまんすまん。俺はずっとお前がとても賢い奴だと思ってたんだ。でも、勘違いだった。お前、馬鹿だ」

「……てめえ、舐めんなよ糞餓鬼がア!」

負傷した右手を庇うのをやめ、巖は左のストレートを仁に見舞った。

——それを小さな動作で交わした仁は、勢い余る巖に足を掛けた。勢いそのままに地面に倒れ込んだ巖を踏みつけ、

「冥土の土産に教えてやるよ。カラオケの時俺がサンドバック状態だったのは、ありやわぎとだ。まだどんなふうにお前を裁くかすら決まっていなかったからな、勝手に俺がぶん殴って退学になるわけにはいかなかっただけだ」

「グ、があっ」

立ち上がるとうとする巖に、仁は腰を落として、頭部に右の拳を見舞った。

そこからは、一方的な暴力だった。

仁は真顔で、無心で殴り続けた。

「——おい、九条!」

と、突然背後から抱きつかれ、仁はもはやルーティンと化していた拳の運動を止めた。

「なんだ、神宮司。……ああ、すまんすまん。お前も殴りたいよな。よし、じゃあ交代だ」

そういつて笑う仁とは対照的に必死の形相である龍牙が叫ぶ。

「馬鹿！ 落ち着けよ、このままだと本当に殺しちまうぞ！」

仁が改めてもはや呻き声すらもなく倒れ伏す巖に視線を移すと、地べたは血だまりが出来ていた。

「そうだな。で、それが？」

「——は？」

「は、って。お前だってこいつが憎くて復讐するためにきたんだろ？」

不思議そうにそう尋ねる仁を龍牙が張り倒した。

「馬鹿野郎！ お前が人殺しになることを寧が願っていると、それがあいつのためになると、お前本気で思ってたのか!? 目覚ましやがれ！」

仁の頬に、じんわりとした痛みが広がる。

そして。

「……すまん。どうかしてた。怒りで我を忘れてたみたいだ」

たしかにそうだ。仁が本当の犯罪者、それも人殺しになることなど、寧が望んでいるはずがない。

「気持ちにはわからなくてもないが、もう十分だ。映像も撮れた。——っと、息はあるな。

よし、医務室に運ぶぞ」

映像。正確には、仁と巖の戦いの映像。

その撮影が、土壇場で仁が龍牙に提案したことだった。

巖の権力の背景には、圧倒的な暴力がある。それは、その人物に従う理由になる。弱みなど握られていたらなおさらである。

だが、その巖の暴力神話が崩壊したら？

巖の暴力が、一年坊主にあっけなく敗れる姿が白日の下に晒されたならば。

もはや、巖に従う積極的な理由はない。

何故なら、彼を屈服させることが出来る人物に心当たりがあるのだから。

映像は、最後の数十秒——もはやピクリとも動かない巖を真顔で殴り続ける部分——をカットした上でポータルサイトに投稿された。

この件以降、本人に聞こえるような悪口は途絶えた。ただし、だからといって多くの生徒に受け入れられるようになったというわけではなく、むしろ前よりも物理的に距離を取られることが増えた。生徒達が、終始真顔で殴り続ける部分をみて「サイコパス、絶対に怒らせたらだめな奴、大岩より危ない」などと話していると聞いた時には、仁は苦笑するしかなかった。否定する材料が何もなかったからだ。他ならぬ仁本人が、映像を見返して「こいつイッチまってるな」と思ってしまったのだから仕方がない。

また、巖は全治三ヶ月と想像したよりも軽傷であったが、三ヶ月を超えても復学することとはなかった。しかしながら、それからいくらたっても廃校の話は出ることはなかった。これに関して噂では、巖の父は強い巖を溺愛していたようで、強さ故に起こす事件に関しては何も気にしていなかったようであったが、ボロボロになった巖を見て興味をなくしたと言われているが、真偽のほどは定かではない。

仁達は、そうして平穏な生活を取り戻した。

住処もA棟に戻り、寧が仁と茜の三人で部活を作りたいと言い出したため生徒会も辞職した。元々正式なメンバーではなかったために補充も行わないようで、「いつでも戻ってこい」と役員全員から送り出して貰った。

部活は【おたすけ部】に決まった。メンバーが規定の五名に足りないため部費はでないが、活動にお金が必要な部活でもないため問題はなかった。

活動内容としては、生徒会のように生徒からの相談を受け付け、可能な限りサポートするというものだった。学内で浮きに浮きまくっている三人の元に誰が相談になどくるのかと仁と茜は言ったのだが、寧曰く、「やってみなきやわからない。生徒会には相談しづらいちよっと喋りプだったりグレーな内容で私たちにしか相談できないとかあるかも」とのこと、そんな相談ばかり乗るのはそれはそれで嫌だなと二人して苦笑した。

しかしそれでも、元々の寧の願いであった学生生活を一緒に送るということ、そしてその中には部活動もあると考え、仁は承諾した。

——否。

仁にとってみれば、部活動の内容などどうでもいいのであり。

重要なのは、寧と、そして茜と平穏な日常を送ること、ただそれだけなのだ。